

松任市法仏遺跡

第5・6次発掘調査報告

1991

石川県立埋蔵文化財センター

松任市法仏遺跡

第5・6次発掘調査報告

石川県立埋蔵文化財センター



航空写真（南から）



航空写真（北から）



第6次調査区 航空写真（南から）



同上（北から）

例　　言

- 1 本報告書は石川県松任市法仏町地内に所在する法仏遺跡然第5・6次緊急発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡の発掘調査は、石川県住宅供給公社の千代野ニュータウン拡張工事に係るもので、昭和50~54年にかけて4次に渡る発掘調査が石川県文化財保護課によって実施されている。第5次発掘調査の対象面積は約3,000m²で、昭和63年5月11日から9月20日まで現地調査を実施した。第6次発掘調査の対象面積は約2,200m²で、平成元年8月3日から11月13日まで現地調査を実施した。
- 3 本遺跡の発掘調査は石川県住宅供給公社の委託をうけ、石川県立埋蔵文化財センターが実施した。第5次調査は西野秀和、第6次調査は中屋克彦が担当し、大藤雅男、宮本直哉、宮本　徹、山辺　繁、北野裕保の協力を受けた。
- 4 調査の実施に当たっては、石川県住宅供給公社、松任市教育委員会、地元松任市民の助言、協力を受けた。
- 5 本遺跡出土遺物の整理作業は、平成2年度に石川県埋蔵文化財保存協会に委託した。遺物整理作業に従事したのは次の各氏である。

浅野豊子、松田智恵子、横山そのみ、竹内弘美、勝島栄藏、前田すみ子

- 6 本報告書の執筆、編集は、中屋、西野が分担した。執筆分担は以下の通りである。

中屋—I、IV、V・西野—I、III

- 7 本遺跡の第5・6次調査に係る遺構・遺物実測図、航空写真、現場写真、出土遺物などの資料は、本センターにて一括して保存管理に当たっている。

- 8 本報告書の遺構・遺物の挿図、写真図版の指示は次の通りであるが、適宜変更したものは挿図内に明示した。

- (1) 遺構挿図の方位は全て磁北を表示している。
- (2) 遺構挿図の水平基準は、海拔高で表示している。(単位 m)
- (3) 挿図の縮尺(堅穴式住居址・掘立柱建物跡1/60、上器・石器1/3)
- (4) 写真図版の遺物の縮尺は任意のもので、統一していない。
- (5) 写真図版中の遺物番号は、挿図内番号と同一である。

目 次

I 地形と周辺の遺跡	1
II 調査に至る経緯と経過	7
III 第5次調査の概要	9
1 層序と遺構の配置	9
2 検出した遺構	10
3 出土遺物	27
IV 第6次調査の概要	46
1 積穴住居址	46
2 掘立柱建物跡	46
3 出土遺物	53
V 若干の考察	68

挿図目次

第1図 遺跡の位置	1
第2図 周辺の遺跡	2
第3図 調査区の位置	5
第4図 昭和63・平成元年度調査区全体図 (S = 1/600)	6
第5図 グリッド配置図 (1/600)	10
第6図 第5次調査区全体図(1) (1/300)	11
第7図 第5次調査区全体図(2) (1/300)	12
第8図 土層断面図 (南北方向) (1/80)	13
第9図 土層断面図 (東西方向) (1/80)	14
第10図 第1～5号住居址 (1/60)	16
第11図 第6～9号住居址 (1/60)	18
第12図 第1号掘立柱建物跡 (1/60)	20
第13図 第1号掘立柱建物跡断面図 (1/60)	21
第14図 第2・5号掘立柱建物跡 (1/60)	22
第15図 第3・4号掘立柱建物跡 (1/60)	24
第16図 第6号掘立柱建物跡 (1/60)	25
第17図 第7・8号掘立柱建物跡 (1/60)	26
第18図 住居址出土土器 (1/3)	28
第19図 住居址・掘立柱建物跡出土土器 (1/3)	30
第20図 溝跡出土土器 (1) (1/3)	31
第21図 溝跡出土土器 (2) (1/3)	33
第22図 溝跡出土上器 (3) (1/3)	35
第23図 溝跡出土上器 (4) (1/3)	36

第 24 図	溝跡出土土器（5）（1/3）	38
第 25 図	溝跡出土土器（6）（1/3）	39
第 26 図	包含層出土土器（1）（1/3）	41
第 27 図	包含層出土土器（2）（1/3）	42
第 28 図	包含層出土土器（3）（1/3）	43
第 29 図	石器他実測図（1/3）	45
第 30 図	古錢拓影（1/2）	45
第 31 図	法仏遺跡（平成元年度）遺構図（1/300）	47
第 32 図	第 1・2 号住居址（1/60）	48
第 33 図	第 1 号掘立柱建物跡（1/60）	49
第 34 図	第 2・3 号掘立柱建物跡（1/60）	50
第 35 図	第 4・5 号掘立柱建物跡（1/60）	51
第 36 図	第 6 号掘立柱建物跡（1/60）	52
第 37 図	土坑、溝土層断面図（1/60）	54
第 38 図	第 1 号竪穴住居址出土遺物（1/3）	55
第 39 図	第 2 号竪穴住居址出土遺物（1/3）	56
第 40 図	大溝出土遺物（1）（1/3）	56
第 41 図	大溝出土遺物（2）（1/3）	57
第 42 図	大溝出土遺物（3）（1/3）	58
第 43 図	大溝出土遺物（4）（1/3）	60
第 44 図	大溝出土遺物（5）（1/3）	62
第 45 図	大溝出土遺物（6）（1/3）	63
第 46 図	大溝出土遺物（7）（1/3）	64
第 47 図	大溝出土遺物（8）（1/3）	65
第 48 図	遺構外遺物（1/3）	67
第 49 図	掘立柱建物平面プラン	68

表 目 次

第 1 表	周辺の遺跡地名表	3
第 2 表	掘立柱建物跡一覧表	68
第 3 表	須恵器の生産地とその時期	70

図版目次

巻頭図版 1 航空写真（南から）、航空写真（北から）
 巷頭図版 2 第 6 次調査区航空写真（南から）、同上（北から）

- 図版 1 第5次調査区全景（北東から）、同上（南から）、同上（北東から）
- 図版 2 住居址群調査風景、掘立柱建物跡調査風景、住居址群調査風景
- 図版 3 住居址群（南東から）、住居址群（南西から）、第1・2号住居址
- 図版 4 第1・2号住居址、第6号住居址断面、第6号住居址
- 図版 5 第7号住居址断面、第7号住居址断面、第7号住居址
- 図版 6 第3号住居址断面、第3号住居址、住居址調査状況
- 図版 7 第5号住居址、第8号掘立柱建物跡、第8号掘立柱建物跡
- 図版 8 第1～4号掘立柱建物跡、第1号掘立柱建物跡、同上
- 図版 9 第3・4号掘立柱建物跡、第5号掘立柱建物跡、第6号掘立柱建物跡
- 図版 10 柱穴7、柱穴8、柱穴4
- 図版 11 柱穴10、柱穴6、柱穴3
- 図版 12 第4号溝と周辺、第6号溝と周辺、第2・3号溝と周辺
- 図版 13 第6号溝の発掘、第8号溝の発掘、第15号溝の発掘
- 図版 14 南端トレンチ（東から）、南端トレンチ（西から）、大溝検出状況
- 図版 15 出土遺物（1）（1～33）
- 図版 16 出土遺物（2）（34～69）
- 図版 17 出土遺物（3）（75～103）
- 図版 18 出土遺物（4）（105～134）
- 図版 19 出土遺物（5）（136～159）
- 図版 20 出土遺物（6）（157～186）
- 図版 21 出土遺物（7）（187～208）
- 図版 22 出土遺物（8）（209～232）
- 図版 23 第1号住居址全景、東西断面、南北断面
- 図版 24 第1号豎穴住居址完掘状況（南より）、同上たちわり状況（北より）
- 図版 25 作業風景（第1号豎穴、第1号掘立柱周辺）、第1号住居址かまど址検出状況、同鉄器出土状況
- 図版 26 第2号住居址、同上東西断面（北より）
- 図版 27 第2号豎穴住居址南北断面（西より）、同上完掘状況（東より）
- 図版 28 大溝中央断面（北より）、大溝完掘状況（南より）
- 図版 29 第2号掘立柱建物跡、第1号溝、第3号溝
- 図版 30 出土遺物（1）（5～37）
- 図版 31 出土遺物（2）（36～74）
- 図版 32 出土遺物（3）（75～105）
- 図版 33 出土遺物（4）（106～136）
- 図版 34 出土遺物（5）（137～151）
- 図版 35 出土遺物（6）（152～184）
- 図版 36 出土遺物（7）（185～202）

I 位置と環境

1 地理的環境

法仏遺跡は、松任市市街地の西方約2kmにある松任市法仏町及び千代野町地内に位置する。

松任市は北を金沢市、東を石川郡野々市町と鶴来町、南を石川郡美川町と能美郡川北町に接し、西は日本海に臨む。靈峰白山に源を発する手取川が形成した。典型的な扇状地の扇央・扇端部を占める。手取川扇状地の扇端部は地下水が季節的に湧き出す低湿な地域となっている。この地域は全国的にも早場米の産地として知られている。湧き出す地下水は工業用としても使用されているが、近年は過度の揚水により、地下水位が低下傾向にある。

手取川は「その水路を七度変えた」との伝承があるように、古くから暴れ川として知られており、河道の変遷が激しい。現在の七ヶ用水（富樫、郷、中村、山島、大慶寺、中島、新砂川）とその分流は、手取川の旧河跡と言われており、地質の研究からも大量の土砂を堆積させながら、現在の本流の位置まで南遷したことが明らかになっている。ちなみに、現在の流路には、寛文～天和頃に落ち着いたようである。

周辺の地形は、県営圃場整備事業がほぼ終了した現在では、整然とした水田風景が一望できる平坦な地形となっているように見える。しかし、よく観察すると、現在でもかなり大きな田面の高低差が認められる。これは手取川の氾濫や、河道跡などを流れる用水・小河川などによる浸食・堆積の産物であり、実際には「微高地と微低地が複雑に入り組んだ変化に富んだ地形」というのがこの扇状地の本当の表情なのである。本遺跡をはじめ周辺に存在する遺跡は、その多くがこの複雑な地形の中の、水の流れに沿って形成された帶状の微高地上に立地しているのである。遺跡の中でもこの複雑さは表れており、1つの遺跡の中でも集落域が小河川によって分断されており、いくつかの小集落グループにブロック分けができるまでになっている。

近年、周辺は金沢市の近郊ということで、大型の住宅団地や工業団地が計画・建設されており、その景観は大きく変わりつつある。この傾向は数年前までは主に国道沿いの地域を中心としたものであったが、最近では国道から少し離れた郊外を中心とした開発へと変わってきている。法仏遺跡も遺跡地図の範囲でみると限り、千代野ニュータウンがその半分を占めるまでに至っている。

2 歴史的環境

手取扇状地では、原始・古代の遺跡が扇央稜線の北側に集中している。現在では手取川の北と南では遺跡の数に偏りが見られるが、過去においてはおそらく南側にも多くの遺跡が存在したのであろう。それらは手取川の南遷により破壊され、流されてしまったのではないだろうか。

法仏遺跡周辺の扇端付近は地下水の季節的自噴地帯ということもあって、生活に適していたと考えられる。

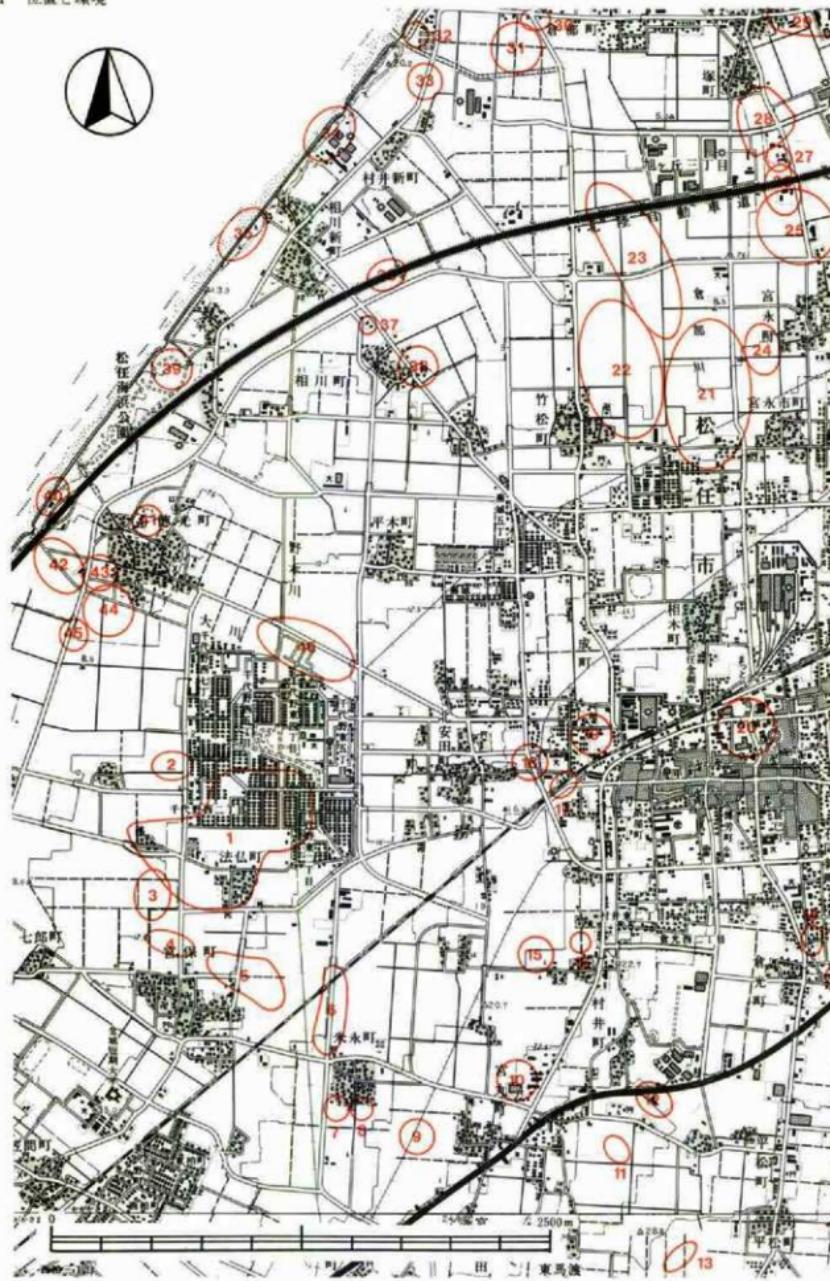
縄文時代 周辺では縄文時代の遺跡は点在する程度で、遺跡数は多くない。その中でも北安田北遺跡では(46)、本調査と同じく千代野ニュータウン拡張工事に係る埋蔵文化財発掘調査の第3次調査において、晩期後葉の遺物が出土している。この他宮永B遺跡(25)、徳光遺跡(43)などがある。

弥生時代 水利がよいことによって弥生時代から古墳時代にかけては、扇端部付近を占地する遺跡が多い。縄文時代からみれば、その数も非常に多くなる。本遺跡のすぐ南には宮保遺跡(4)、北東約2.5kmには宮永市遺跡(21)、その先には平成元年の調査で、県内初の四隅突出型墳丘墓が検出された旭遺跡群(25・26・27・28)や



第1図 遺跡の位置

I 位置と環境



第2図 周辺の遺跡 (1/25000)

第1表 周辺の遺跡地名表

No	県 No	遺跡名	所在地	現況	時代	主な出土品
1	1159	法仏遺跡	松任市法仏町	平地・水田	平安	土師器、須恵器
2	6700	番出・高松遺跡	○ 宮保町番出・高松	○	平安～中世	土師器、須恵器、青磁
3	1158	鶴丸館跡	○ 宮保町	平地・水田	不詳	
4	6699	宮保遺跡	○ ○	○	弥生	弥生土器
5	1156, 57	光明寺跡 赤松次原宮保本陣跡	○ 宮保町	○	安土桃山 安町	
6	1129, 30	北出遺跡	○ 末永町	○	中世	須恵器、土師器
7	1128	高山遺跡	○ ○ イ202	○	平安	須恵器隻
8	1127	古屋敷遺跡	○ ○ ロ116	○	○	○
9	1131, 32	宮丸遺跡 岡本四位館跡	○ 宮丸町1026～1029	○	中世	須恵器、土師器
10	1133	高畠左エ門久留跡	○ ○ 263～265	平地・宅地	室町	
11	1134	延寿寺跡	○ 桐原町牛馬塚14-41	○ - 水田	不詳	五輪塔
12	6701	村井遺跡	○ 地行、北馬鹿	○	中世	中世陶器
13	6697	劍崎遺跡	○ 剣崎町	平地・水田・道路	平安・中世	土師器、須恵器、灰・綠釉陶器、五輪塔、宝鏡印塔
14	1142	倉光船跡	○ ○ 237, 238	○ - 水田	舞鶴	五輪塔・珠洲燒・宝鏡印塔、古鏡戸・信楽燒
15	1154	村井備中守館跡	○ 村井町中村	○	中世	五輪塔、仏具（銅製）、花器
16	1155	中村遺跡	○ ○ 287	○	平安中期	須恵器、台付深鉢
17	6702	成町遺跡	○ 成町	○	中世	土師器、須恵器、土師質土器
18	1167	安田三郎惟光館跡	○ ○ 長164	平地・水田・道路	不詳	
19	1168	出城城跡	○ ○	平地・水田	室町	宝鏡印塔
20	1169	松任城跡	○ 古城町	○ - 公園	室町・安土桃山	弥生土器、珠洲燒
21	6707	宮永市遺跡	○ 宮永市町	○ - 水田	弥生後期・中世	弥生土器、珠洲燒
22	6706	竹松C遺跡	○ 竹松町	○	不詳	
23	1197	竹松遺跡	○ 宮永町381, 583	○	古墳	土師器（高杯、装飾器合）
24	1201	坊の森寺跡	○ 宮永町1580	○	室町	金属製仏具（茶器合）
24	6499	宮永B遺跡	○ ○	○	繩文・古墳・中世	
26	1198	宮永遺跡	○ ○ 1873	○ - 道路	古墳	土師器（二ツ星～宮地式）
27	1199, 1200	旭小学校遺跡	○ ○ 1909	○ - 校地	弥生	土器片、土師器（高杯、器台、壺）
28	1202, 03	-塚遺跡	○ -塚町	○ - 水田	縄文	土器片、勾長、管玉
29	1204, 05	八田中瀬川遺跡	○ 八田中瀬1722	○	○	石斧、土師器、須恵器
30	1195	倉部出戸遺跡	○ 倉部町284	○	古墳	須恵器、高杯、大型裝飾器形土器、錐型土器
31	1196	倉部倉跡	○ ○	○	室町	
32	1194	倉部川連跡	○ ○ 329	平地・水田・道路	不詳	土器片（加賀古墳か）
33	1192, 93	浜竹松遺跡	○ 竹松町浜竹松	○	古墳	土器片
34	1190～91	相川新羅田川遺跡	○ 相川新町	平地・砂丘	弥生	○
35	1189	浜相川相川新羅田遺跡	○ ○	○	○	○
36	1187～88	相川新八連跡	○ ○	○	古墳	
37	1186	御手洗川遺跡	○ 相川町1881	○ - 水田	○	土師器（慈）
38	1185	相川館跡	○ ○ ～115	台地・社地	室町	五輪塔
39		浜相川B遺跡	○ 相川町	平地・圃地	弥生	
40	1162	徳光遺跡	○ 徳光町	海岸・砂丘	縄文	縄文式土器光形品
41	1165	大相隼人館跡	○ ○ 100	平地・水田	小鉢	
42	5150	徳光ヨノキヤマ遺跡	○ ○	○	弥生・中世	土器、白磁、青磁
43	1163	徳光遺跡	○ ○ 183～188	○	○	五輪塔
44	1164	アベノ駒頭寺跡	○ ○ 6	○	○	
45	1166	聖興寺跡	○ ○ リ165	○ - 宅地	室町	五輪塔
46		北安田北遺跡	○ 北安田町	○	縄文～中世	縄文式土器、土師器、須恵器

I 位置と環境

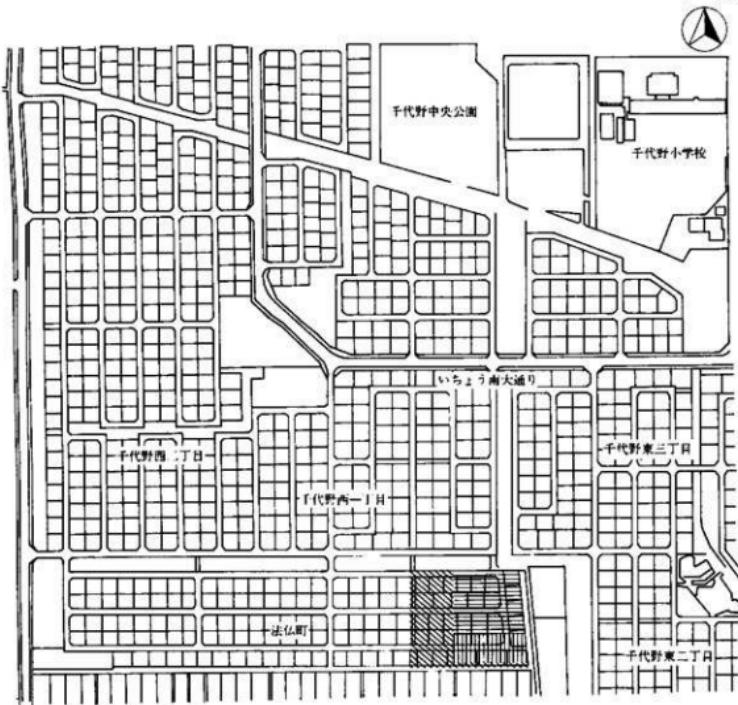
八田中遺跡など、北約 3 km には、昭和 63 年度の調査で弥生時代後半から古墳時代前半の時期を中心とした集落が確認された倉部出戸遺跡（30）、倉部遺跡（31）、その手前には浜相川 B 遺跡（39）、相川新雁田川遺跡（34）、浜相川相川新遺跡（35）、北安田北遺跡（46）、北西には徳光ヨノキヤマ遺跡（42）などが盛衰を見せる。

古墳時代 弥生時代終末から漸進的に営まれている遺跡も多い。北東から北約 3 km 圏には竹松遺跡（23）、旭遺跡群の中の宮永遺跡（26）、倉部出戸遺跡（30）、浜竹松遺跡（33）、相川新 A 遺跡（36）、御手洗川遺跡（37）などが存在する。

奈良・平安時代 この時期はちょうど法仏遺跡の存続期間にも当り、周囲の遺跡については少し詳しくみておきたい。この時期に入ると扇端部から少し内陸に入り、扇央部での遺跡の立地が多くなっている。これは手取扇状地の開発において、比較的開発の行い易い扇端部はこれ以前（弥生時代～古墳時代）に開発が進み、この時期になってようやく開発の難しい扇央部にも人間の手が入ることになったためであろう。そうした中で法仏遺跡周辺の遺跡は、扇端部に取り残された遺跡ということができるのではないだろうか。近隣の遺跡としては、西に隣接する番出・高松遺跡（2）、南の高山遺跡（7）、古星敷遺跡（8）、宮丸遺跡（9）、刺崎遺跡（13）、東の中村遺跡（16）などがある。さらに北東約 5 km には東大寺領横江庄莊家跡（国指定）が存在し、さらにその北東約 600 m には昭和 62 年度から発掘調査が行われている上荒里遺跡が存在している。奈良・平安時代に限らず弥生時代・古墳時代のものを含め、大量の遺物が出土している。特に奈良・平安時代の遺物には、墨書き器や木簡がたくさん含まれ、東大寺領横江庄との関連が指摘されている。

中世 中世になると周辺には館の跡が目立つようになる。鶴丸遺跡（3）、赤松次郎宮保本陣跡（5）、岡本四位館跡（9）、高畠紋左エ門岑久館跡（10）、倉光館跡（14）、村井備中守館跡（15）、安田三郎惟光館跡（18）、相川館跡（38）、大和隼人館跡（41）などである。

法仏遺跡周辺の地域では、古くは繩文時代から人々が暮らし始めた。繩文時代にあっては金沢市・野々市町・松任市の境界付近にある大きな集落とは離れ、小さな単位集団で生活を営んでいたのであろう。弥生時代の中期を過ぎる頃から、扇端部の開発と共に拠点的ともいべき比較的大きな集落が出現する。この傾向は古墳時代にも引き継がれる。ところが奈良・平安時代にはいると扇央部の開発が進められ、人々の居住域も扇端から扇央までの広い範囲になり、分散化の傾向がみられるようになる。これにともない一つ一つの集落も小型化するようである。



昭和63年度調査区
} (本報告書)

平成元年度調査区

平成元年度松任市教育委員会調査区

第3図 調査区の位置

I 位置と環境



第4図 昭和63・平成元年度調査区全体図 (S = 1/600)

II 調査に至る経緯と経過

松任市千代野ニュータウン建設事業は、石川県住宅供給公社が計画、実施した事業である。昭和 46 年 12 月 1 日付で公社から県教育委員会文化室に、事業用地内に周知の埋蔵文化財が所在していないかの調査が依頼されている。周知の遺跡は所在していないが、所在する可能性が認められるので試掘調査を実施する必要があるとの回答を行っている。昭和 47 年 9 月 30 日付で、事業用地約 811,000 m² (建設戸数 2,000 戸) の分布調査依頼が提出され、昭和 48 年 3 月に人力による試掘調査が実施された。試掘調査の結果、平安時代と推定される新たな遺跡が 3 地点で確認された。遺物包含層の推定面積は、A 地区（法仏町地内）約 195,000 m²、B 地区（北安田町地内）約 195,000 m²、C 地区（徳光町地内）約 33,750 m² と広大であった。

第 1 次調査は各地区にトレーンチ調査を行い、分布範囲を確定する作業で、昭和 50 年 3 月に文化財保護課によって実施された。

第 2 次調査は北安田・徳光地区の約 5,000 m² について行われ、期間は昭和 50 年 4 月 14 日から同年 7 月 30 日である。

第 3 次—1 工区調査は、昭和 50 年 6 月から行われた。調査面積は約 5,450 m² で、弥生から平安時代の竪穴式住居址 13 棟、掘立柱建物跡 12 棟、土坑墓などの遺構が検出された。第 3 次—2 工区の発掘調査は、昭和 50 年 9 月から実施された。調査面積は約 6,600 m² で、弥生から平安時代の竪穴式住居址 8 棟、掘立柱建物跡 6 棟が検出された。昭和 51 年 4 月から 6 月までは、A 地区（法仏町地内）の範囲確定分布調査が行われ、遺跡の推定面積は約 18,000 m² となった。

第 4 次調査は昭和 51 年 4 月 1 日から 10 月 30 日まで行われた。調査面積は約 3,700 m² で弥生時代の竪穴式住居址 4 棟、奈良時代以降の竪穴式住居址 43 棟、掘立柱建物跡 2 棟などが検出されている。

千代野ニュータウンの造成に係る発掘調査は第 4 次調査をもって終了したが、その後、金沢市近郊の住宅需要が高いことから、昭和 60 年に北安田北地区・南地区および法仏地区の 3 カ所についての拡張計画が松任市教育委員会、本センターに提示された。現況水田である統計 154,000 m² に土地区画を行い、既設団地と一体になった住宅団地を建設するものである。法仏遺跡に含まれている法仏地区は首に及ばず北安田北地区においても埋蔵文化財が所在している可能性が高いと判断され、昭和 60 年 7 月 9 日から 15 日にかけ、試掘調査を松任市教育委員会が担当して全城について実施した。試掘調査の結果、北安田北地区 (21,000 m²) と法仏地区 (11,000 m²) の 2 カ所で埋蔵文化財が確認された。分布調査の成果を受け、各地区についての発掘調査計画が、住宅供給公社、松任市教育委員会、石川県立埋蔵文化財センターの 3 者で協議がもたらされた。北安田北地区的発掘調査を先行させる形で、昭和 61 年度から 3 カ年計画で行い、法仏地区については昭和 63 年から 2 カ年で実施する事とした。調査主体者は松任市教育委員会が主に担い、昭和 62 年度から石川県立埋蔵文化財センターが協力する形をとり、年度内の発掘調査面積の 3 分の 1 を担当する事となった。

昭和 61 年度は松任市教育委員会が、北安田北遺跡の海側、約 6,100 m² において発掘調査を行った。北安田北遺跡第 1 次発掘調査である。昭和 61 年 6 月 19 日から 12 月 26 日まで現地作業を行い、遺構群の伸びが認められたことから最終的な発掘面積は 7,600 m² に上っている。古墳時代後期から平安時代にかけての集落遺跡で、竪穴式住居址 50 棟以上、掘立柱建物跡 56 棟以上や多数の溝が検出された。

北安田北遺跡の第 2 調査は、第 1 次調査区に隣接した 6,000 m² の地区で、松任市教育委員会が担当して実施している。現地調査は昭和 62 年 4 月 6 日から 11 月 12 日まで行われ、奈良時代以降の竪穴式住居址 16 棟、掘立柱建物跡 34 棟や多数の溝跡が検出されている。第 3 次調査は東に隣接する約 3,100 m² の範囲に本センターが担当して実施した。昭和 62 年 9 月 7 日から 12 月 4 日まで現地調査を実施し、竪穴式住居址 15 棟、掘立柱建物跡 5 棟、土坑 20 基、河道跡を含む多数の溝跡が検出された。

昭和 63 年度は北安田北遺跡の最終年度で、松任市教育委員会が残りの 5,900 m² の発掘を実施している。北安田

II 調査に至る経緯と経過

北遺跡の第4次調査である。同年には本センターが法仏遺跡に係る 11,000 m² のうち、3,000 m²について発掘調査を実施した。先に記述した如く法仏遺跡での第5次調査に当たる。昭和 63 年 5 月 11 日から 9 月 20 日まで現地調査を行い、遺構密度が稀薄であったことから拡張し、最終的な調査面積は 5,000 m² になった。検出した遺構は、奈良時代の竪穴式住居址 9 棟、平安時代の掘立柱建物跡 9 棟と溝跡多数である。

平成元年度は法仏遺跡の残りの地区約 6,000 m² を、松任市と本センターが分担して調査を実施した。第 6・7 次調査である。最終的な調査面積は、松任市が 4,600 m²、本センターが 2,200 m² である。第 6 次調査は 8 月 3 日から行い、竪穴式住居址 3 棟、掘立柱建物跡 6 棟、大溝とそれに関わる多数の小溝を検出した。

平成 2 年度は、第 5・6 次調査で出土した遺物の整理作業を石川県埋蔵文化財保存協会に委託して実施した。

昭和 63 年度現地作業参加者（第 5 次調査）

最里健太郎、村上勝次、宮田ハル、西川愛子、坂井かず子、坂井澄江、西村みどり、原 孝市、高峰春子、竹山くに子、浜野長一、本田次雄、中垣 明、村田一昭、山本百合子、大岸敏子、小川 操、北村三枝、宮下清枝、神保花子、中島清子、三嶋美恵、中村一子、吉田与四次、村上義雄、川端美智子、蓮田貞子、堀田雅枝、石山ひさ子、佐野つた、中栄みゆき、浜野 煉、蓮田一雄、竹西正則、作田信吉、三谷正子、原 禮子、宮崎達雄、高畠昭夫、高柳美代子、山本喜美子、石田喜久男、北岸外茂之、橋本勝衛。

平成元年度現地作業参加者（第 6 次調査）

西本与三作、坂田進午、最里健太郎、村上勝次、宮田ハル、西川愛子、坂井かず子、坂井澄江、西村みどり、高村松子、高峰春子、竹山くに子、高柳美代子、相川幸子、村西良雄、小料文雄、塙梅紀子、竹田みよ、中川須磨子、橋本和江、米田幸子、北川一枝。

III 第5次調査の概要

1 層序と遺構の配置

法仏遺跡の分布範囲は団地造成地域に限定される形でしか把握されていなかったが、昭和50年代の後半から計画実施されてきた県営圃場整備事業に先立つ埋蔵文化財分布調査によって、団地周辺の水田地帯の殆どでの確認作業が終了している。その結果によれば、遺跡の分布密度は比較的高く、数百メートル間隔で展開する状況を呈している。それらは時期差を含むものではあるが、本遺跡での発掘調査で検出された如く遺跡内部で若干の距離を持って配置されている状況に類似しているようである。また、奈良時代以降に限定すれば、遺物包含層での遺物の出土頻度は全般的に薄い傾向が見られ、遺構密度の濃淡が遺物包含層に直接的に反映しているとは言えないようだ。さらに、扇状地末端での微地形的な起伏が、傾斜の少ない田園地帯では覆い隠されているために、いつそう判断しにくい状況となっているもので、遺跡の範囲を限定することの難しさが指摘される。

今回の発掘調査区の周辺部に限定して見れば、北東方向に団地造成当時に発掘調査を行った第4次調査区が隣接しており、西方向では約300mの位置に県営圃場整備に関連して調査が行われた地点がある。広く法仏遺跡を見るならば、その範囲に包括されるものと言える。南方向では調査区に隣接する地区で一定の範囲の遺跡の伸びが認められるが、100mを越える範囲より大きく広がらない試掘調査結果がでている。

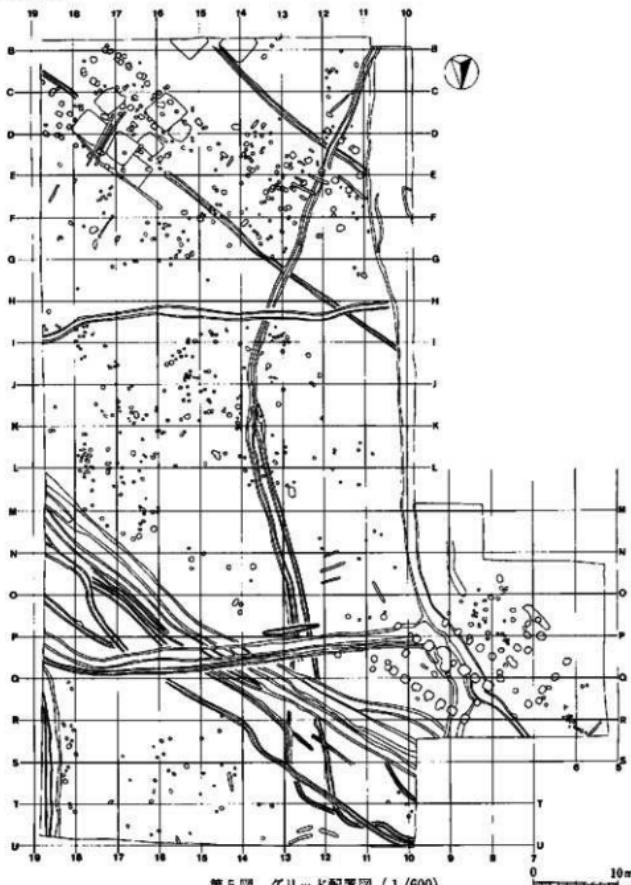
層序は比較的単純で、耕作土15~20cmが全体を覆い、黄褐色粘土が10~20cmの厚さで堆積している。これらの下に黒褐色粘土が遺物を若干含んで10~20cmの堆積を持っている。地山は黄茶褐色砂質土であるが、地点によって高低差が見られ、調査区の中央部分がやや高くなり、竪穴式住居址群、第1~4号掘立柱建物群が検出された地区では黒褐色粘土の堆積が厚く地山面が相対的に低くなっていく傾向にある。調査区の北西隅・南西隅では、地山面が砂質土から砾層が現れ低くなる変換点に位置しており、遺構配置の遷移の傾向がうかがえる。住居址や掘立柱建物の柱穴の覆土は黒褐色系の土であるが、溝の覆土は近現代の溝を除いては黄褐色系の均質な砂質土が堆積するような傾向が見られ、大雨・洪水等による短期間で埋まった状況を示しているものが多く、必然的に遺物の包含は稀薄である。

調査グリッドは5m方形で、調査区域の軸線に沿う形で設定した。必要的に水田区画の方向に合致するグリッドであり、磁北に近い方向となっているが磁北とは合致しない。南北方向にはアラビア数字の軸線、東西方向ではアルファベットで表示し、南西隅の杭をもってグリッド名とし、遺物の取り上げを行った。住居址、掘立柱建物跡、溝跡などの遺構の番号は、発掘順ないしは検出順に適宜番号を振っていった。なお、土層断面図は、南北方向ではI9軸線に平行する壁で、また、東西方向はB軸線に平行する位置で実測を行っている。

検出した遺構は、竪穴式住居址9棟、掘立柱建物跡10棟と主要溝13条と多数の溝、ピット群であり、調査面積での密度は稀薄な配置と言える。そして、溝の配置を除けば主要遺構は調査区の南端部と北西隅の2箇所に限定されている状況が見え、時期的な差を考えれば竪穴式住居址群が古く掘立柱建物跡が重複ないしは新たに加わるという状態となる。竪穴式住居址は第1~7号住居址の7棟が群を形成し、わずかに切り合うという配置を取り、大きく切り合う関係はないことから、同一共同体内部での増改築と考えられる。さらに、住居址群と重複する掘立柱建物が、竪穴式住居址からの発展過程として把握できるようだ。また、掘立柱建物群の中で中核的な第6号掘立柱建物跡が少なくとも3回の建て替えを行っているのは注目できる。第1~7号住居址から若干の間隔を置いた第8・9号住居址の2棟の竪穴式住居址群は、平面方形の隅を向き合わせる配置を取り、先の住居址群と同一の主軸方向になっている事から並存していたものと推定できる。この2棟の住居址群からの掘立柱建物跡への発展過程は明確ではないが、隣接して検出されている柱穴群が見られた事から調査区外に掘立柱建物が展開している可能性が高いと推定できる。

調査区の北西隅で検出した第1~4号掘立柱建物跡群は、底を持つ第1号掘立柱建物跡を中心とした群で、先

III 第5次調査の概要



第5図 グリッド配置図 (1/600)

行する竪穴式住居址群は見られず、柱の抜き取り穴を残すが近辺での建て替えが認められない状況は、群としての性格的一面を示しているものと考える。

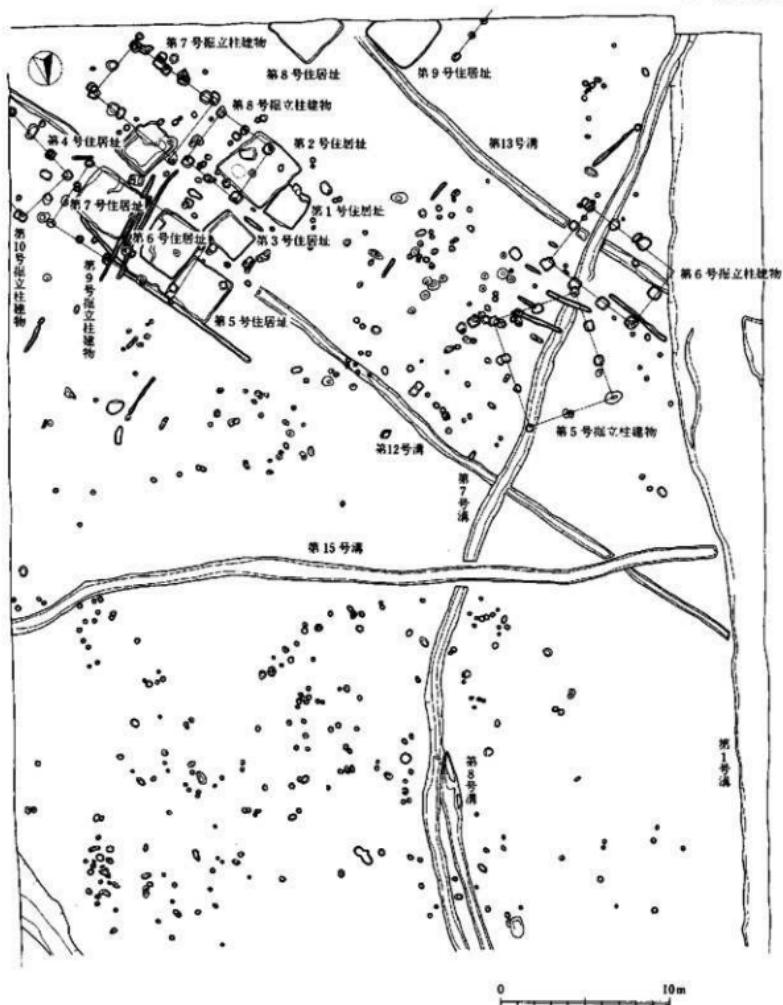
検出した多数の溝群は、近現代の陶器、硝子製品を含んでいた第1号溝や墨書き器を混じえた須恵器を多量に包含していた第4号溝を除いて、ほとんど遺物を包含していない事から、それぞれ存続した時期を限定するのは困難なものがある。溝同志の切り合い関係や住居址との重複から相対的な時期判断にとどまり、各住居址や獨立柱建物群との関わりについては不明瞭である。

2 検出した遺構

第1号住居址（第10図、図版3・4）

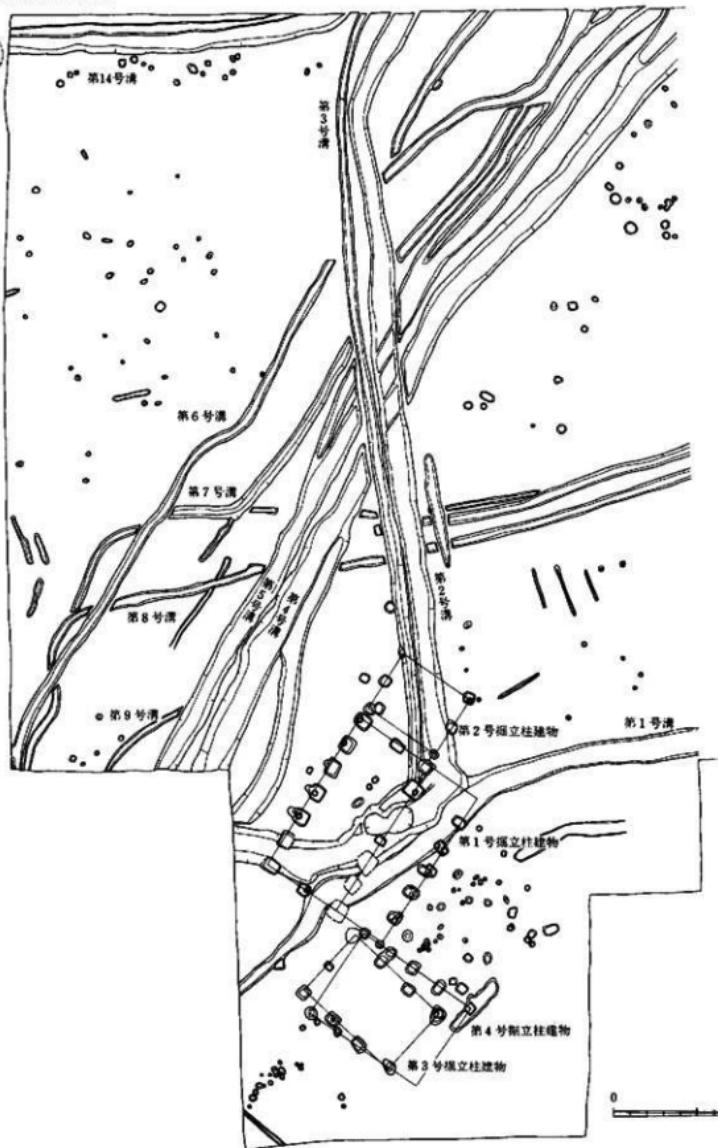
第5次調査区の南東端で検出した竪穴式住居址で、第3号住居址とともに検出した中で最も小型の住居址である。最大規模の第2号住居址の北西に壁を共有するような形で隣接しているが、上層断面の観察では第2号住居址に先行して構築されていたものである。北東方向約1.5mで第3号住居址、南西方向約9.3mで第9号住居址

2 検出した遺構

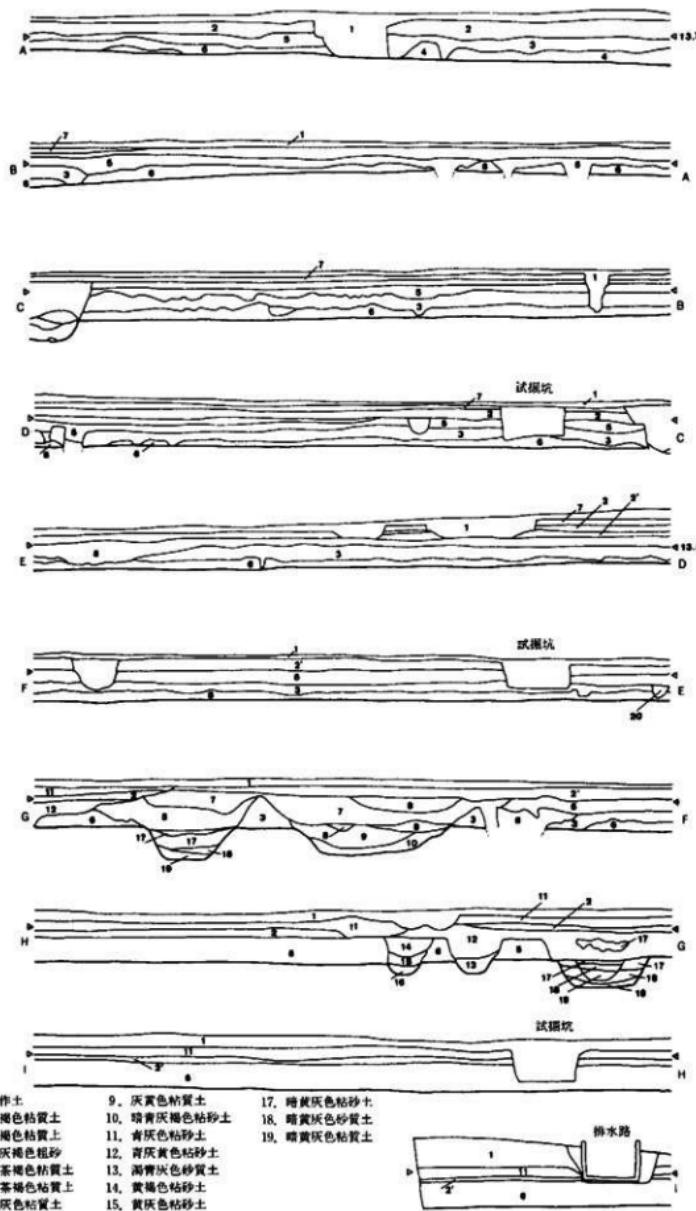


第6図 第5次調査区全体図(I) (1/300)

III 第5次調査の概要

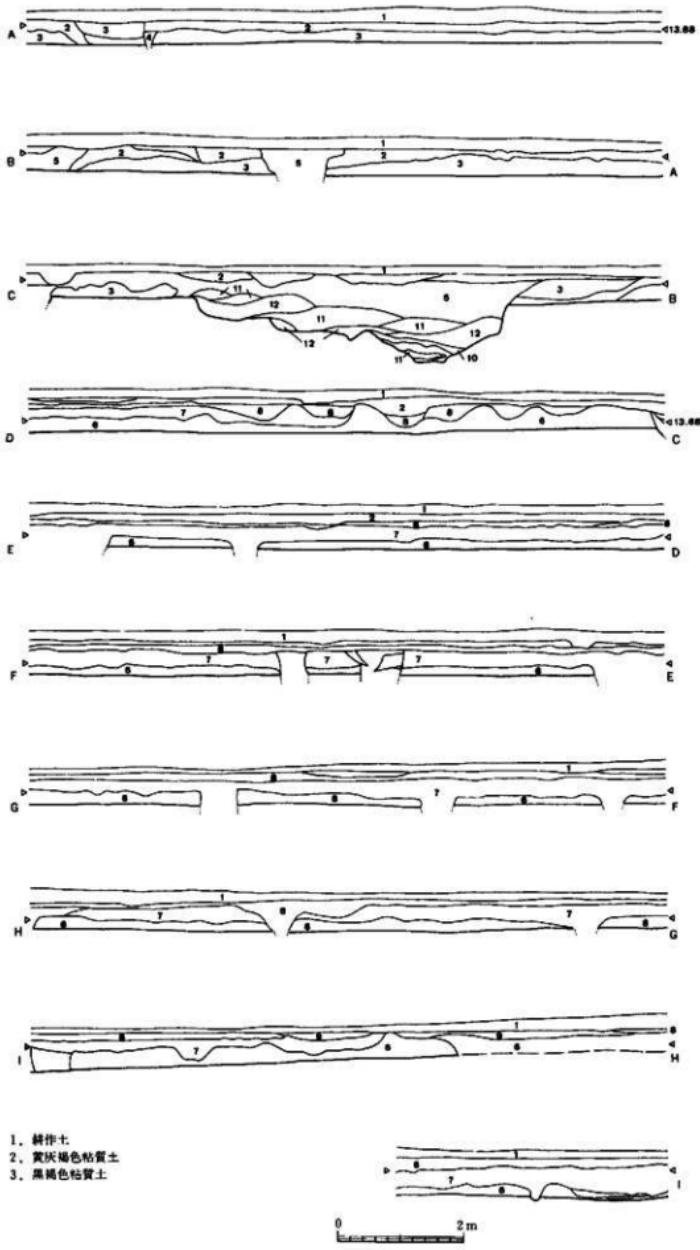


第7図 第5次調査区全体図(2) (1/300)



第8図 土層断面図（南北方向）(1/80)

III 第5次調査の概要



が配置されている。平面プランは長方形を呈し、長軸 224 cm、短軸 200 cm、深さ 29 cm の規模を測る。覆土の状態は単純で、上層が黒褐色土で床面に近づくに従い地山質上をまじえた茶褐色土へと変化していく。壁の立上がりは比較的明確で直に近い形で整えられている。床面は平坦で、南西隅には床面からやや高くなっている位置で焼上面が検出され、かまどが置かれていたのである。床面の中央部分は面を持つように固くなっている、駆近くではやや軟質の状態である。柱穴・壁溝などの施設の検出は見られなかった。覆土からの出土遺物は少量で、床面に付いているものは皆無であった。南西辺の立ち上がりには、時期、平面形の異なるピットが時期差をもって掘り込まれている。

第2号住居址（第10図、図版3・4）

第1号住居址の南東辺を切り込んで構築されている竪穴式住居址で、本調査区内で検出した住居址では最大規模を測る。北方向約1.2mで第3号住居址、南東方向約2.7mで第4号住居址、南方向約5mで第8号住居址が配置されている。第1～7号住居址群での、中核的竪穴式住居址と言える。平面プランは正方形であるものの、南隅が内部へ入り込んでいることからやや歪なプランとなっている。南北方向で356cm、東西方向で366cm、深さ20cmの規模を測る。壁の立上がりは第1号住居址と比較して緩やかで、壁溝などの施設は確認できなかった。覆土の堆積は水平堆積に近く、黒褐色土、濁茶褐色土がそれぞれ約10cmの層厚を持っている。住居址の南東半部は新たに構築された柱穴によっての擾乱が入っているようだ。床面は南東半部の方に傾斜するような状態となり、中央部分はやや踏み固められているものの凹凸が認められる。住居址の東隅近くに、平面梢円形を呈する焼土面が見られ、径90×70cmの規模を測る。床面では住居址に付く柱穴は認められず、第8号掘立柱建物を構成する柱穴が掘り込まれている。覆土からの出土遺物は少なく、また、床面に付くものや一括性を推定させる遺物の出土は見られなかった。

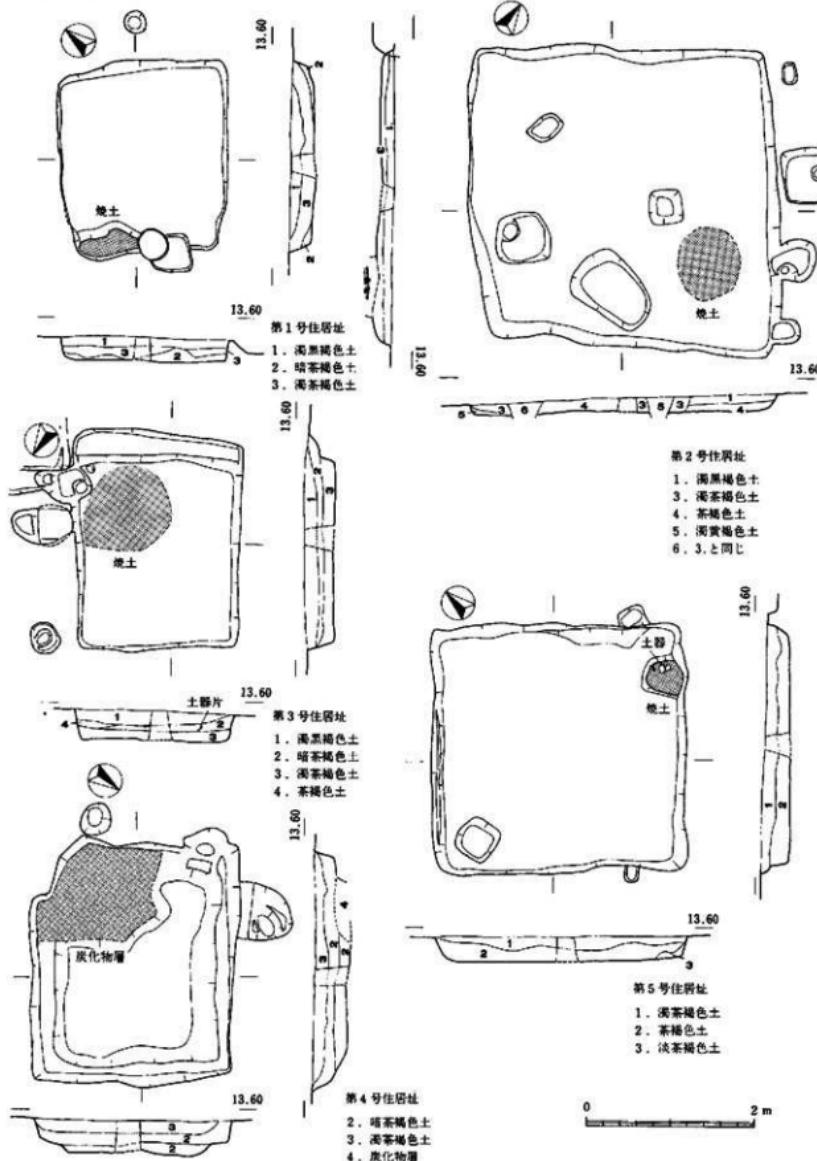
第3号住居址（第10図、図版6）

第1号住居址と共に小型の竪穴式住居址で、比較的端正な平面形を持っていると言える。東隅は第6号住居址のコーナーと接し、北方向約1.2mで第5号住居址、南西方向約1.2mで第2号住居址が配置され、北西方向を除いては住居址に囲まれている状態となっている。平面形は長方形を呈し、長軸方向は本住居址群の中では第7号住居址と同じ少數例の中に含まれている。長軸方向で268cm、短軸方向で200cm、深さ34cmの規模を測る。壁の立上がりは比較的直に近いが、南辺は段を形成するような形となっていて、入り口部ではないかと推定される。床面の南東隅部で平面梢円形の焼土面が検出された。長軸115cm、短軸100cmの規模を測り、住居址床面の4分の1近くの面積を占めていて、焼土面の周辺部分の床面が高く踏みしめられた状態となっていた。床面では壁溝、柱穴などは検出されなかった。段を形成している南辺のコーナーに挙げた標が床面に付いて出土している。覆土は水平堆積に近く、上層に濁黑褐色土が約18cmほど堆積し、その下に暗茶褐色、濁茶褐色砂質土が約10cmの厚さで堆積している。覆土での遺物の出土状態は、最下層が堆積した後に混入するという状態となっていた。上層の濁黑褐色土では相対的に少なくなる傾向にある。南東隅には第9号掘立柱建物跡を構成する柱穴が掘り込まれている。

第4号住居址（第10図）

調査区の最も南東端で検出した竪穴式住居址で、長軸方向を第1号住居址と同じ南西方向に置く小型のタイプである。北西方向約2.7mで第2号住居址、北東方向約0.9mで第7号住居址、南西方向約8.8mで第8号住居址が配置され、住居址の南西半分近くが第7号掘立柱建物跡の範囲に含まれている。平面形は南隅が不整形であるが、他は遺存状態の良好な長方形で呈し、長軸292cm、短軸240cm、深さ42cmの規模を測る。住居址検出面から約25cm下がったレベルで床面は二段掘りの形態を取っており、拡張を示すものと考えられる。壁の立上がりは下位では緩やかな傾斜を示すが、上位の壁は直に近い形となっている。壁溝、柱穴は検出されなかった。下

III 第5次調査の概要



第10図 第1～5号住居址 (1/60)

位の住居址は長軸 230 cm、短軸 192 cm、深さ 14 cm を測る。床面は平坦ではなく不規則な凹凸が目立ち、覆土からの出土遺物も少量であった。南コーナーでは、140 cm × 113 cm の範囲で炭化物層が堆積し、下位の竪穴にまでおよんでいた。覆土は暗茶褐色土、濁茶褐色土がほぼ同等の厚さで堆積していた。西隅には第 4 号掘立建物に付く、柱穴が壁を切り込んで作られている。

第 5 号住居址（第 10 図、図版 7）

住居址群の中で最も北に位置している竪穴式住居址で、コーナーが立っている平面正方形に近いプランとなっている。東の壁は第 6 号住居址に接し、南西方向約 1.2 m には第 3 号住居址が位置している。北東方向では 300 cm、北西方向では 305 cm、深さは 33 cm の規模を測る。壁は直に近き形で立ち上り、床面は平坦に整えられている。壁溝および柱穴は検出されなかった。覆土は濁茶褐色土、茶褐色土が 10~20 cm の厚さで堆積しているが、出土遺物は他の住居址と同様に小片が少量出土しただけであった。東コーナーには土器を含んだ焼土面が、床面がやや高い位置で検出されかまど跡と推定される。位置が隅からやや外れているのが注意される。床面の西隅では平面方形プランの掘り込みが見られ、住居址に伴うものと推定される。

第 6 号住居址（第 11 図、図版 4）

住居址群の中央に位置している竪穴式住居址で、西隅で第 3 号住居址のコーナーに接し、北西辺では第 5 号住居址の掘り込み線と接している。南東方向約 1 m では第 7 号住居址が位置している。平面形は台形状を呈し、北東辺 304 cm、南西辺では 240 cm を測り、長軸は 336 cm である。覆土は住居址群の中では薄い方に含まれ、15 cm 程度である。壁の立上がりは緩やかで、北西辺では段状の作りだしが見られる。段の高さで茶褐色土が厚さ約 5 cm ほどで住居址全体に広がっていて、他の住居址と異なる堆積であることから、住居址が改築されているか、貼床である可能性を考えられる。南東隅部には壁に接して、径 60 cm の焼上面が検出されている。床面は焼上面に周辺部分で固くなっている状態が認められたが、壁に近づくにしたがってやや軟質になっていく。

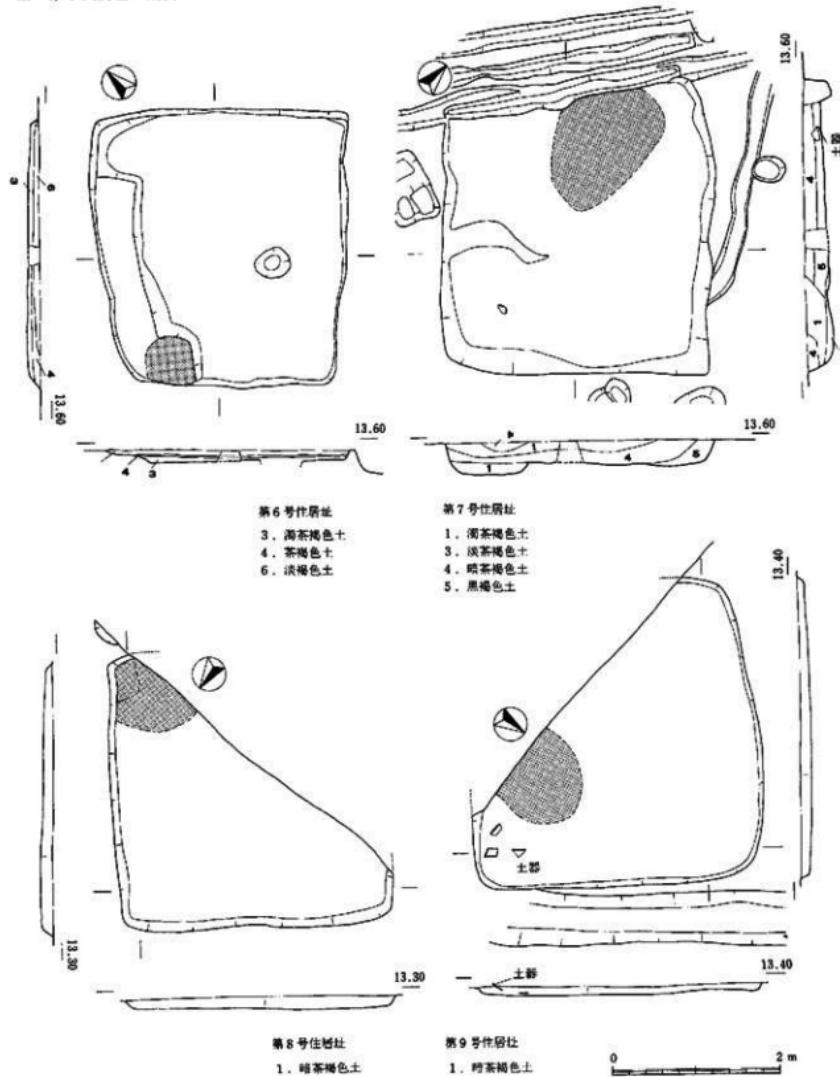
第 7 号住居址（第 11 図、図版 5）

住居址群の東端に立地している竪穴式住居址で、平面形は長方形プランを呈し隣接している第 4 号住居址とは超軸方向を交差させている。北西方向の約 1 m には第 6 号住居址が、南西方向の約 0.9 m には第 4 号住居址が配置されていて、不確定ではあるが、第 10 号掘立柱建物跡の中にほとんどが含まれるという状況となっている。北西辺を切り込むような形で、平行する 3 本の溝が後出して置かれている。この 3 本の溝によって擾乱されているために北西辺の位置を確定するのを難しくしているが、北東部分でのコーナーの状況から長軸 357 cm、短軸 321 cm、覆土の厚さ 25 cm を測る。覆土は濁茶褐色土、暗茶褐色土が南半部分で見られ、一方北半部分では床面近くで礫と土器を包含した黒褐色土が床面を覆うような堆積状態となっている。南半部分に擾乱が入っている可能性が高く、床面全体が低くなる状態が土層の変化と対応していると考えられる。床面は不規則な凹凸が見られ、焼土面あるいは北半部分ではやや固くなっている。焼地面は平面横円形をなし、長径 160 cm、短径 115 cm の範囲を認められた。指示の北東辺に切り込んでいる溝は住居址に係る部分でのみ二段掘りとなっていた、須恵器の完形品が 1 点出土している。

第 8 号住居址（第 11 図）

調査区南端部で検出した住居址で、住宅団地の周辺を巡る排水路工事に係る部分の拡張によって住居址の規模が確定することとなった。第 1~7 号住居址群が構築されているレベルから約 30 cm 程度下がった位置での検出となっているのは暗茶褐色土のなかで掘り込まれているために検出面が下がったからである。第 8・9 号住居址の位置から西方向では地山面が上がり気味となり礫層が現われ、住居址群側及び伸びて東方向へも黄褐色の砂層であるが同じような状態で高くなっていく。北東方向約 4.9 m で第 2 号住居址が、西方向約 1.3 m で第 9 号住居址が

III 第5次調査の概要



第11図 第6～9号住居址 (1/60)

配置されていて、先の群とは離れ第9号住居址と群を構成するものと推定される。住居址の半分近くは調査区外に伸びていくが、平面形は正方形で、329cm×336cm、覆土は13cmを測るが、掘り込まれた面は第1～7号住居址群と同様に覆土は約30cm程度に想定される。床面は座地状の地形の中にあるためか凹凸が目立つ、固い面は焼土面の周辺に限定される。覆土からの出土遺物は少量であった。焼土面は南東コーナーに検出され、径80～90cmを測る。

第9号住居址（第11図）

第8号住居址に隣接した竪穴式住居址で、同一の主軸方向を取るものである。北東辺に隣接して第13号溝が先行して掘り込まれている。平面形は長方形プランをとるものと推定され、北東方向の長軸は336cm、北西方向の短軸は350cm、深さ10cmの規模を測る。床面の状態は第8号住居址と同様に凹凸が目立っている。床面では柱穴、壁溝などは検出されなかった。焼土面は南西隅からやや離れた位置で見られ、平面形は不整橢円形をなし、100cm×(90)cmの範囲である。南東コーナーでは土器片がやまとまるような状態で出土したが、異個体の断片であった。

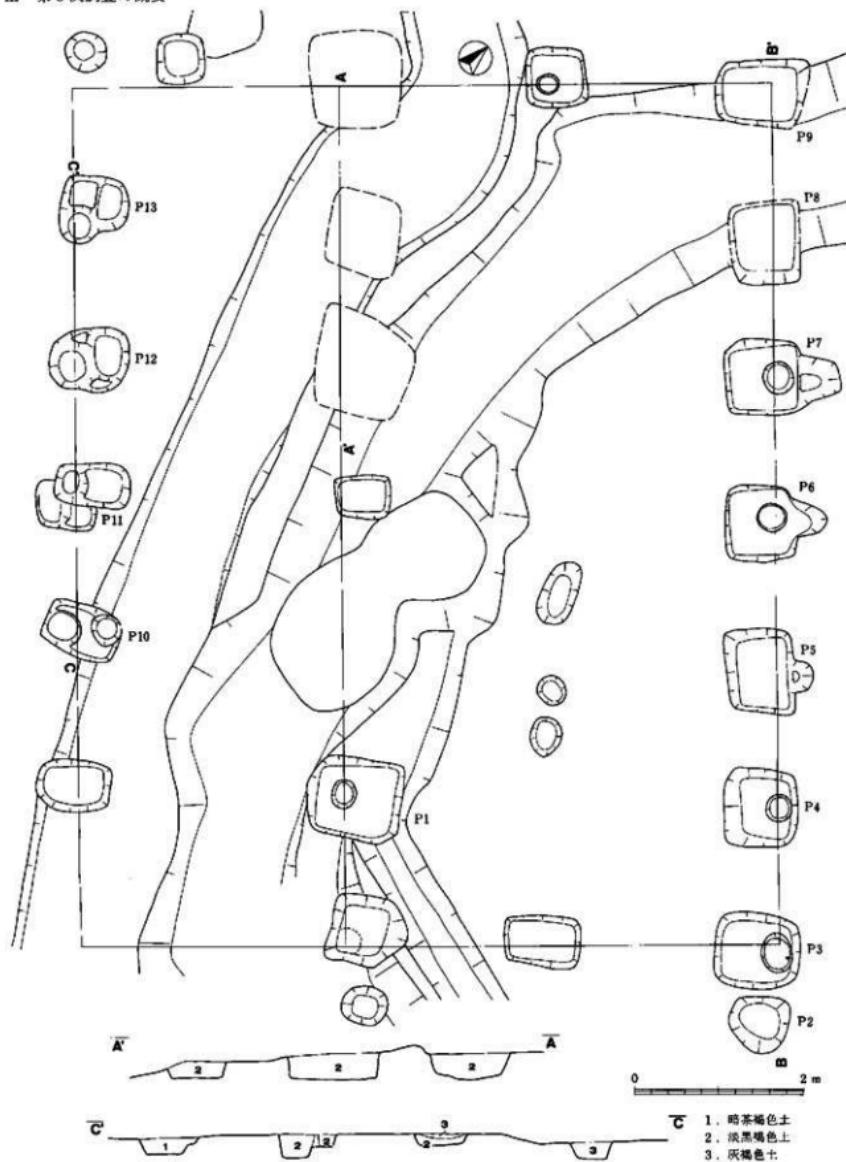
第1号掘立柱建物跡（第12・13図、図版8・10・11）

調査区の北西地区で検出された掘立柱建物跡で、当初の発掘調査区の端に柱穴群が見られたことから全体形を掴むために西側に拡張し、遺構の伸びを確認したものである。南東方向には梁行を接して第2号掘立柱建物跡が、西方向には梁行の端に重複するような形で第3・4号掘立柱建物跡が配置されていて、本掘立柱建物跡がこれらの中心的建物であることを理解される。建物跡は地表面が西側に傾斜を強めていく変換点に位置していて、現代と想定される第1・2号溝が変換点に沿うような形で北西方向に入り込んでいる。その為に一部の柱穴が検出できないような状況となっていた。桁行6間、梁行2間に庇が付属するもので、桁行方向を北西方向に置き、南北から46度に振り込んでいる。桁行の柱間は173cmの等間隔で計約1,040cm、梁行の柱間は260cmの等間隔で計520cm、面積54m²(16.38坪)の規模となる。庇部分は南東端と北西端の2個が確認できず、後者を検出できないことから端部を外した4間で終わっていた可能性も考える必要があり、また、新旧の柱穴が複合していることから別個の建物跡を構成することも考えねばならないが、ここでは、底部として取り扱っていく。梁行は320cmを測り、4間の桁行では670cmの規模となる。各柱間の新旧の柱穴を確定できないことから等間隔とはなっていない。北東辺の梁行はP4、P10のラインで測ると320cmの間隔を測る。柱穴の掘り方は平面方形ないしは長方形を呈し、一辺の長さは90～100cm程度で、深さ約60cmを測り、柱根部分は径35～45cmの規模でピットとなっていて、建物の外側方向に柱根を置いた状態がうかがえる。本建物跡で特徴的なものは、P5～7で見られるように建物の外側に向いた抜き取り穴が付属していることで、土層断面にも明確にその状況が遺存していた。柱を建てるときは内側に柱を置き、抜き取るときは外側に柱を持っていったことが推定される。柱穴の覆土は埋め土の状態がそのままの形で残っていて、P3・5・6の上層断面に明確に認められる。柱根部の周囲に均質な土が、地山ブロックを混じえて廻されている。断面図A-Aのラインでは、傾斜変換線上にある事から、柱穴の下部がかろうじて遺存していたものの、調査中の長雨と水没によって崩壊し、検出部分からはやや大きな平面形となっている。庇部分の柱穴は略長方形を呈した二段掘りで、径90cm×60cm、深さ15cmの規模を測る。各柱穴からの出土遺物は小片のみにとどまり、埋納品などの特殊遺構は検出されなかった。また、柱根の遺存は認められなかった。

第2号掘立柱建物跡（第14図、図版8）

第1号掘立柱建物跡の南東方向に隣接して検出した掘立柱建物で、周辺部には他の建物遺構は配置されていない。建物の中央部分に現代の大溝が掘削されている為に、柱穴の一部が損壊を受けている。規模は第1号掘立柱建物跡を延長したような形であり、それを考慮すれば桁行、梁行の判断がやや難しい。2間×1間の規模で、桁

III 第5次調査の概要



第12図 第1号掘立柱建物 (1/60)

行1間450cm、梁行2間390cmを測り、桁行は磁北から45度東に置いている。柱穴の掘り方は略方形プランを呈し、径70cm、深さ35cmを測り、南東隅の柱穴では柱根部分が二段掘りの形状を残しているだけで、他は素掘りの状態となっていた。柱穴からの出土遺物は小片に止まる。

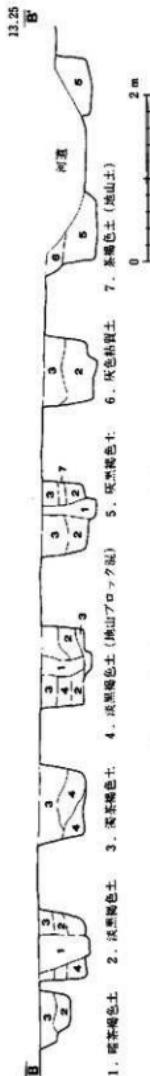
第3・4号掘立柱建物跡（第15図、図版9）

調査区の北西端部で検出した掘立柱建物跡で、第1号掘立柱建物跡の北西側の梁行に隣接して構築されている。2間×3間の規模で、南東側の梁行の中柱は検出されなかった。梁行の芯々間は220cm+220cmで合計440cm、桁行の芯々間は等間隔の230cm、合計690cm、建物面積30.36m²(9.2坪)の規模を測る。桁行方向は磁北から56度東に置いている。柱穴の平面形は略方形プランを呈し、長軸75~85cm、短軸65~70cm、深さ25~45cmを測るが、北側の梁行の中柱の柱穴はやや小振りで、45×55cmの方形プランとなっている。また、北端の隅柱を除いて、他の3本の柱穴の平面プランが略楕円形を呈しているのが注意される。なお、北側の隅柱の柱穴は、第1号掘立柱建物跡の不鮮明となった柱穴と同様に冠水を受けた為に崩落してしまったものである。柱根の遺存は認められなかったが、底面が二段掘りとなっている柱穴が1箇所見られ、上場での径は20cmを測る。

第4号掘立柱建物跡は第3号に重複するような形で推定されるが、桁行、梁行方向の全ての柱穴を確認できたものではなく欠落がある。東側の桁行全てが遺存していることから推定したもので、桁行方向を磁北から49度東に置いていて、第1号の梁行方向と合致している。計画的な配置であるならば同一時期の建築で、第1号の底部分が4間であった可能性を考慮しなければならないと言える。芯々間は等間隔ではなく北から200cm+160cm+190cm+220cmの合計770cmを測り、梁行では570cmの距離があり、面積は43.9m²(13.3坪)を測る。柱穴は略方形プランを呈し、長軸60~100cm、短軸58~70cm、深さ35cmを測る。覆土からの出土遺物は小片のみであった。

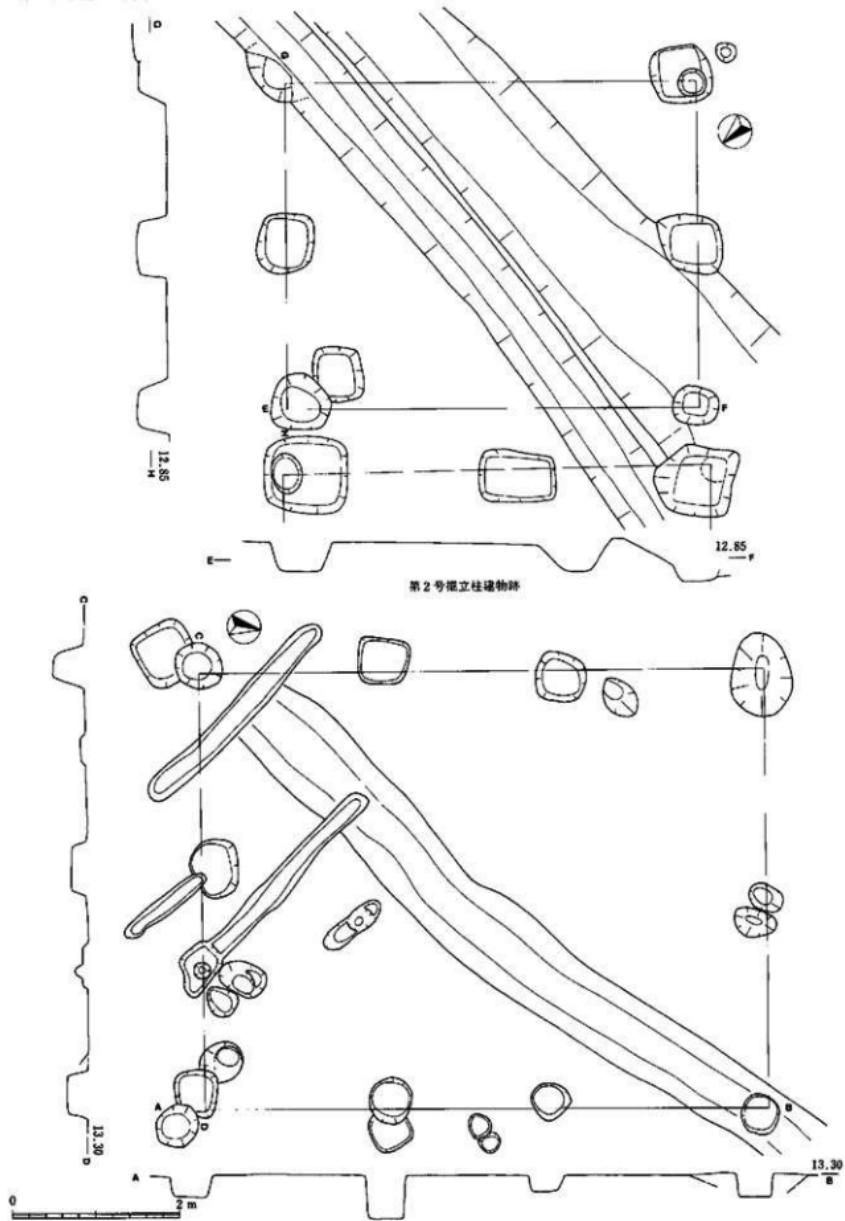
第5号掘立柱建物跡（第14図、図版9）

調査区の南西地区で検出した掘立柱建物跡で、第1~4号の群からは南方向で約55mの距離を置いている。竪穴式住居址群からは西方向約15mの位置に当たり、第6号の柱穴と切り合う関係を持っている。本掘立柱建物跡の方が、後に構築されている。掘立柱建物跡の西側地区は、現代の溝跡が掘り込まれている為に確定はできないが、第1~4号建物跡の立地状況から推定すれば、西側方向へは緩傾斜となっているものと考えられる。南北方向には先行する第7号溝が南北方向に斜め継続の形で走っている。2間×3間の建物で、桁行の柱間を東側辺で見ると、北から260cm+200cm+220cmの全長680cmで、梁行の柱間は南側辺で見ると300cm+220cmの全長520cmを計測する。面積は35.36m²(10.71坪)となる。桁行は磁北から12度西に置いていて、第5次調査区内では独自の主軸方向を取っていると言える。松任市教育委員会が担当した第7次調査区内で発掘されている掘立柱建物との主軸方向の類似が指摘できる。柱穴の平面形は方形、円形、楕円形と個々に形態が異なり、深さにおいても個々によるばらつきが目立ち、先行する第6号掘立柱建物跡の方形プランの柱穴が多い在り方からの変化を見て取ることができる。径は50~100cm、深さ25~53cmを測る。



第13図 第1号掘立柱建物断面図 (1/60)

III 第5次調査の概要



第14図 第2・5号掘立柱建物 (1/60)

第6号掘立柱建物跡（第16図、図版9）

調査区の南西地区に立地している掘立柱建物で、第5号掘立柱建物跡の南に隣接している。東方向及び南東方向約13~18mに竪穴式住居址群、掘立柱建物群が配置されている。第5・6号掘立柱建物群は、第1~4号掘立柱建物群と同様に竪穴式住居址からの発展的変化でなく、掘立柱建物に代わる段階に出現していることに留意しなければならず、第5次調査区だけでなく、第6・7次調査区での検出状況を見ても指摘される事である。建物跡には第7・13号溝が先行して掘り込まれている。2間×3間の建物で、桁行の柱間は北西側の辺で北から210cm+200cm+200cmの計610cmを測る。梁行は南東辺で260cm+150cmの計410cmとなるが、北西辺では柱の位置が違った形となっている。面積は25m²(7.57坪)となる。建物の主軸方向は、磁北から41度西に置いている。柱穴は平面方形プランとなり、長さ約70cm、深さ35~55cmを測り、覆土からの出土品は小片のみであった。

第7・8号掘立柱建物跡（第17図、図版7）

調査区の南東隅で検出した建物跡群で、竪穴式住居址群に複合する形で構築されている。北西方向約65mの距離を置いて第1~4号掘立柱建物跡群が位置している事になり、東方向約15mに位置している第6次調査区での掘立柱建物との関係が重視される。第7号掘立柱建物跡は2間×3間の規模で、柱穴が3個複合している事から同一地点で、同一規模である事は、他の掘立柱建物では見られないことであり注目される。主軸方向は磁北から38度西に置き、桁行の南西側の北からの柱間は230cm+170cm+200cm、桁長600cm、梁行の南西側の東からの柱間は220cm+180cmで、梁長400cmを測り、面積は24m²(7.27坪)である。柱穴の平面プランは方形で二段掘りとなっている。長さ50~60cm、深さ10~45cmの幅がある。

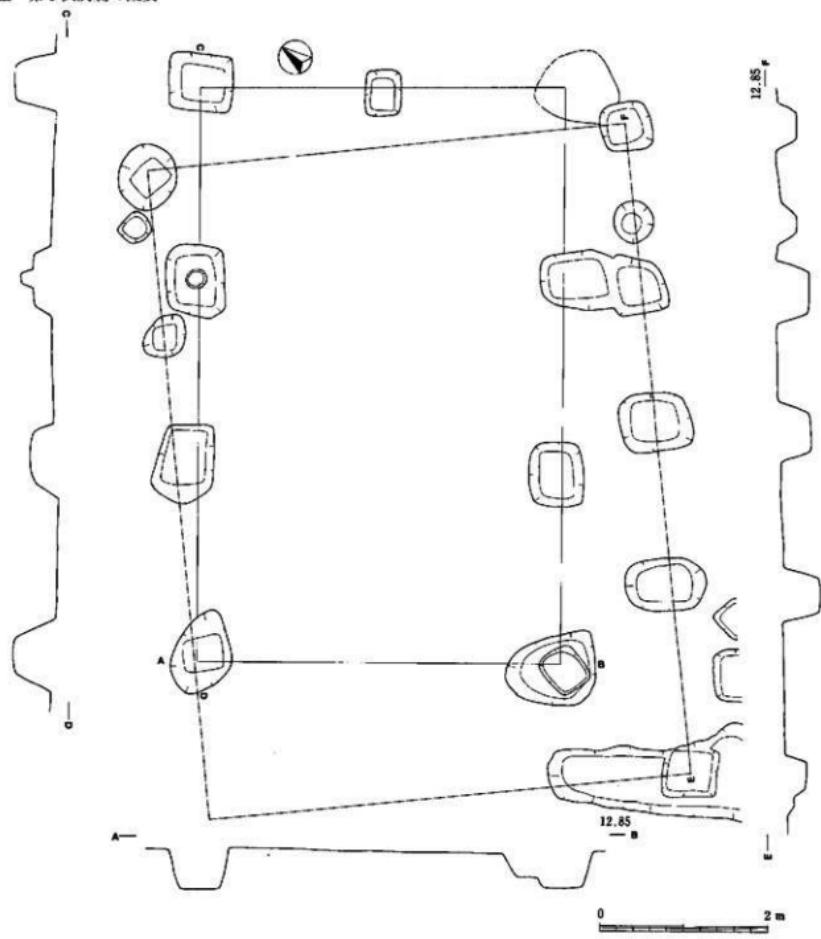
第8号は第7号と同一主軸方向を持ち、第7号の梁柱の中軸線間は約70cmの距離を置くのみで北西側に隣接している掘立柱建物跡である。両者が同一時期に建てられていた可能性が高い。2間×2間の方形の建物であるが、中柱を検出できないことから倉庫とは確定できない。芯々間は190cmで、計380cm、面積14.4m²(4.37坪)の規模を測る。柱穴の平面プランは長方形を呈した二段掘りで、長さ55~65cm、深さ25~35cmを測る。一段掘りとなった柱穴底面の上場の径は20cmほどである。

第9・10号掘立柱建物跡（第6図の全体図）

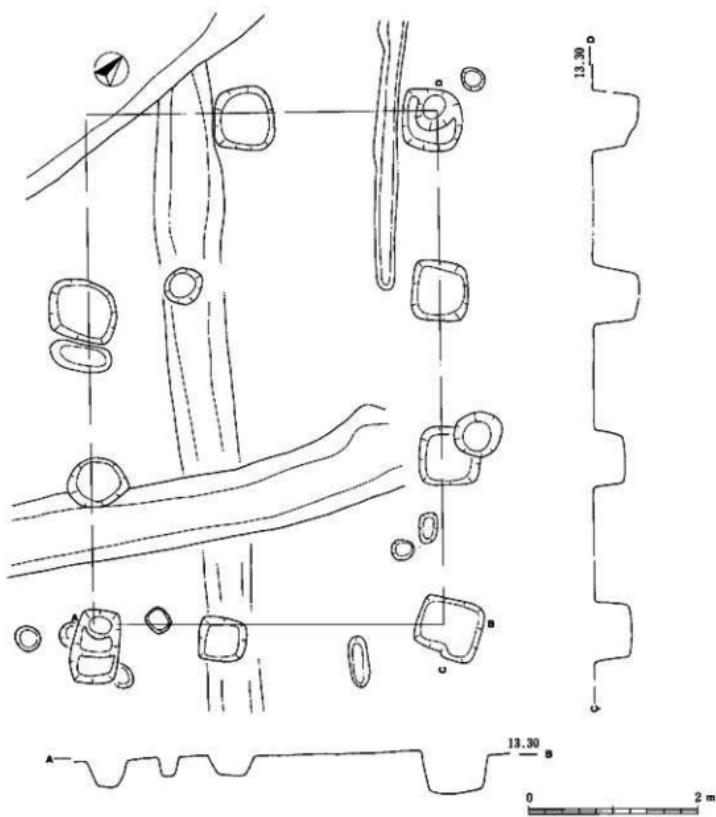
調査区南東端で検出した建物跡で、第6次調査区へ一部が伸びていく。第7・8号とは約6mの間隔を置いて、北東側に相対した形で構築されている。3間×4間の規模で、北側の桁行と東側の梁行の柱穴が検出された。桁行の柱間は北端から210cm+240cm+200cm+200cmの計850cm、梁行は南端から150cm+120cm+150cmの計420cm、面積35.7m²(10.8坪)の規模を持っている。主軸方向は磁北から46度西に置いている。

第10号掘立柱建物跡は2間×3間の一般的な建物跡で、第9号の南東側に梁行部分を隣接させて構築している。主軸方向は磁北から34度西に置き、桁行の柱間は北端から160cm+160cm+190cmで、計510cm、梁行は西端から180cm+190cmの、計370cmを測り、面積は18.8m²(5.7坪)の規模である。柱穴の平面プランは円形、方形、橢円形が混じるような形となり、統一が取れていない。柱穴覆土からの出土遺物は皆無であった。

III 第5次調査の概要

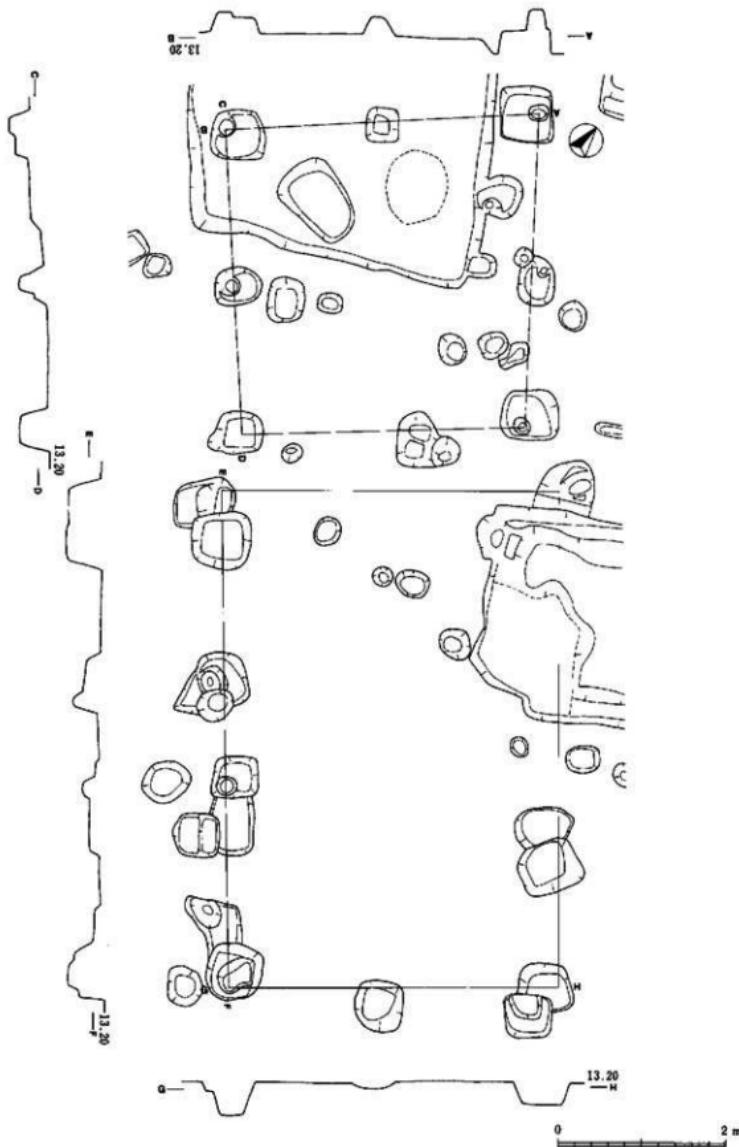


第15図 第3・4号掘立柱建物 (1/60)



第16図 第6号掘立柱建物 (1/60)

III 第5次調査の概要



第17図 第7・8号掘立柱建物 (1/60)

3. 出土遺物

住居址出土土器（第 18・19 図、図版 15）

住居址からの出土土器で一括性を持つものや量的にまとまって出土したものはなく、覆土からの出土に限られ、器種を網羅しているような状況は認められなかった。以下、各住居址からの図示に耐えたものを個別に記述していく。

第 1 号住居址からは、土師器甕の体部片、赤彩杯や須恵器甕の体部片などが出土していて、1・2 の 2 点が図示できた。口径 12.2 cm、器高 3 cm に復元できた 1 の杯は、淡灰褐色を呈し、焼成はやや甘いようだ。内面に成型の凹凸が顕著に認められる。胎土は精選され、砂粒が全く認められない。2 は口径 22.6 cm に復元できた長甕の口縁部で、口唇が突出するように整形されているのが特徴的である。図示できなかった胴部を見ると、内外面共に横方向のカキ目調整が施され、底部近くの下半では外面平行叩き目、内面では同心円文叩き目が認められる。淡茶褐色を呈し、胎土には若干の砂粒が混和され、焼成は良好である。

第 2 号住居址の覆土からは、須恵器の甕、蓋、長甕甕、土師器の長甕甕、小甕、赤彩杯が出土し、量的には長甕甕の胴部片が多い。3・4 を図示した。3 は口径 21.8 cm に復元され、頸部の内面では接線を持たずに屈曲しているのが特色である。頸部以下には内外面ともに横方向のカキ目調整が施されている。図示できなかった同器種の口縁部では口唇に至るまでカキ目が認められ、口縁端部の整形がカキ目によって平坦になっているのが注意され、口唇部の摘み上げるような整形が、時期差ないしは産地の違いを示している可能性が高いと推定される。4 は口径 23.8 cm に復元できるもので、淡橙色を呈し、胎土、焼成とも良好である。

第 3 号住居址からは 5 の蓋 1 点を図示したが、他には須恵器の杯、甕、蓋の断片、土師器の蓋つまみ部、小甕、長甕甕が出土していて、長甕甕の破片の量が多い。5 は自然釉が全体に掛かったもので、器肌面は荒れた状態となっている。天井部は平坦で口縁部へは稜を持って続く、摘み部は偏平に成型されているのが特徴的である。図示しなかった蓋の口縁部では段が形成され、口唇が嘴状に踏ん張るような形となっている。土師器の小甕は内外面共に細かなカキ目調整で、底部の外表面は鉈削り調整が施されている。

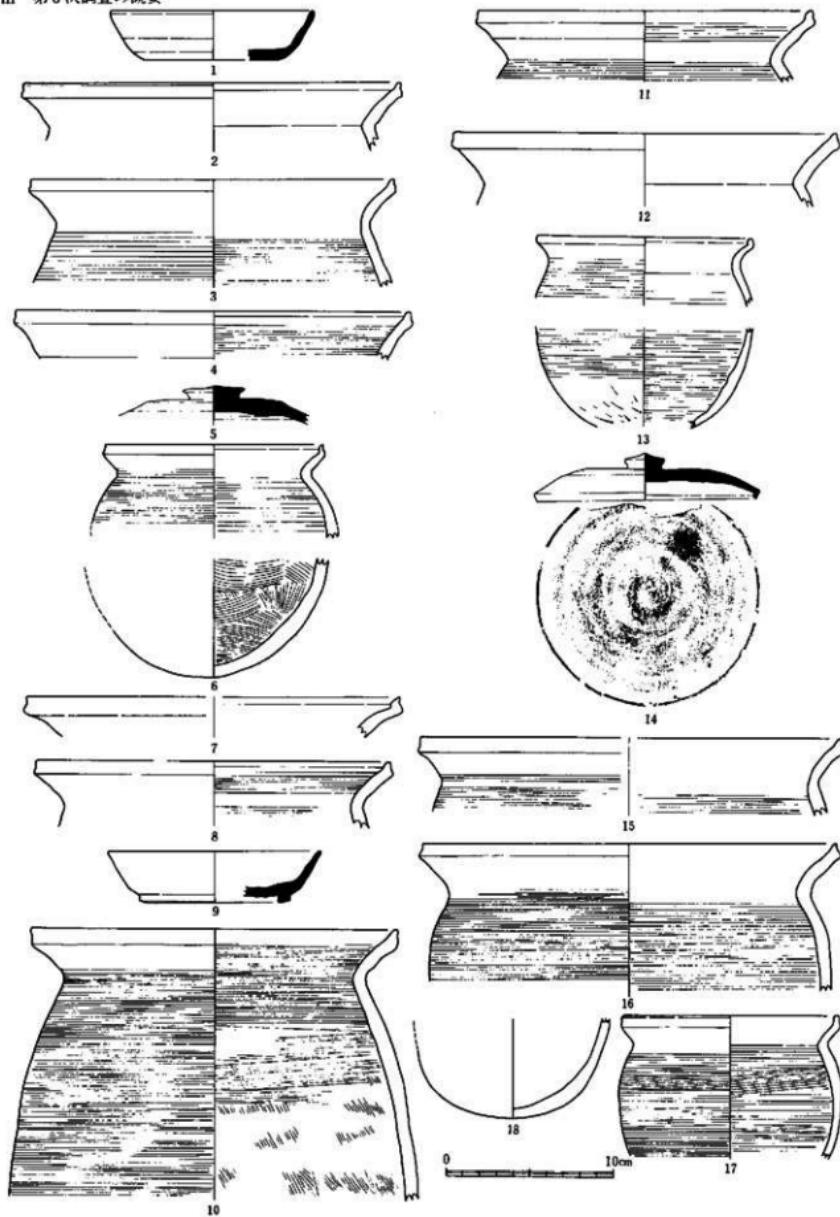
第 4 号住居址からは、須恵器の蓋、土師器の長甕甕、小甕が出土していて、6～8 の 3 点を図示した。6 は口径 13.2 cm に復元されるもので、体部との接合点は見出せなかった。外傾する口縁を持ち、口唇部分を摘み上げて口縁帯としている。図示できなかった同器種には、摘み上げの度合いが小さく、長甕甕の口縁部に類似するものも見られる。体部は横方向のカキ目調整が施され、丸底となる底部の外表面は荒い撫で調整で止めていて、底部と口縁部は別々に成型されていることが判別できる。色調は暗茶褐色を呈し、外周には口縁部、底部ともに煤の付着が顕著である。なお、底部片は住居址の焼土内から出土している。7・8 は長甕甕の口縁部で、外周に煤が付着している 8 では口径 21.2 cm を測り、淡黄褐色を呈し、胎土、焼成とも良好である。7 とは口唇部の成型が大きく異なっているのが注意される。

第 5 号住居址からは須恵器の杯、小甕、高台杯、土師器の長甕甕、小甕、赤彩杯が出土し、9・10 を図示した。9 は口径 12.8 cm、器高 3.1 cm に復元できたもので、大きく外傾する口縁部は低く押さえられ、高台も幅広の低いものである。内面は釉がかかり荒れていて、焼き歪みを生じているようだ。10 は口径 22 cm、現器高 16 cm、胴部最大径 24.4 cm を測るもので、内外面ともに炭化物が付着している。

第 6 号住居址からは須恵器の杯が 1 片あるだけで、他は土師器であった。長甕甕の破片が多く、小甕の断片が少量混じる。11～13 までが本住居址からの出土土器で、12 は口径 22.8 cm に復元される口縁部で、全体に磨滅が進行しているために調整は不明である。長甕甕の底部近くの破片では、内面に平行叩き文と同心円文の 2 種類が認められる。13 は口径 13 cm に復元される小甕で口唇部を丸味を持って小さく立ち上がらせている。底部は丸底と推定でき、外周は窓けずりで調整している。暗茶褐色を呈し、胎土には粒の大きい砂粒が混和されているが、焼成は堅硬である。器表面には煤が付着している。

第 7 号住居址からは須恵器の蓋、杯、甕、土師器の長甕甕、小甕が出土していて、土師器の破片が大部分であ

III 第5次調査の概要



第18図 住居跡出土土器 (1/3)

る。14~18までが本住居址出土土器の図示できたものである。14は口径 13.2 cm、器高 2.8 cm、つまみ部の径 2.4 cm を測る、口縁部を一部を欠いていただけのものである。口唇部分は小さく突出させて成型していく、内面には刷毛撫でが施され、へら記号が入れられている。天井部分は直徑 7 cm の範囲で削り調整が入れられている。灰青色を呈し、胎土は精選されていて、焼成は並である。17~18は小甕であるが、別個体と推定される。17は口径 12.8 cm を測り、口縁部を含めて全体に横はけ目調整がなされ、口縁部のみをさらに撫で調整を施して整えたものである。18は全体に磨滅が進行していて、調整は不明である。胎土には砂粒が混和されている。

第 8 号住居址では、19~21 の 3 点が図示できた。この他に須恵器の大甕の破片が出土している。第 7 号住居址の覆土から出ているものと同一個体である。19は口径 15 cm、器高 4.2 cm に復元される高台杯で、体部と口縁部との境界が明確な成型で、強く外に踏ん張る高台の形状と共に丁寧な作りである。20は全体の 3 分の 1 を欠損していただけの須恵器の小甕である。口径 6 cm、器高 7.6 cm、底径 5.8 cm を測るもので、頭部には自然軸が掛かっていて、さらに輪が飛んだ状態となっていて、器皿面は大きく荒れている。

第 9 号住居址からは 22~23 の 2 点が図示できた他、須恵器の杯、土師器の長胴甕、小甕、赤彩杯が出土している。22は口径 13.8 cm に復元されたもので、全体にカキ目調整で整えられ、口唇部の突出がなく長胴甕の成型手法に似ていると言える。23 の長胴甕の口縁部は撫でによってカキ目が消されている。

掘立柱建物跡出土土器（第 19 図、図版 15）

第 1 号掘立柱建物跡の柱穴から出土した中で、24~31 までが図示できた。24は天井部分に X 印の窓記号が刻まれている。明灰色を呈し、胎土、焼成とも良好である。26は口径 18.6 cm に復元される蓋で、口唇部分が小さく伸びて内屈する成型となっている。明灰色を呈し、胎土、焼成とも良好である。30は口径 17 cm、器高 2.1 cm の皿で、底部に一印の窓記号が入れられている。体部、口縁部とともに薄手の作りで、薄茶灰色を呈している。31は底径 8 cm の平底で、内面に明確なカキ目調整痕が見られるが、外周は磨耗が進行している。

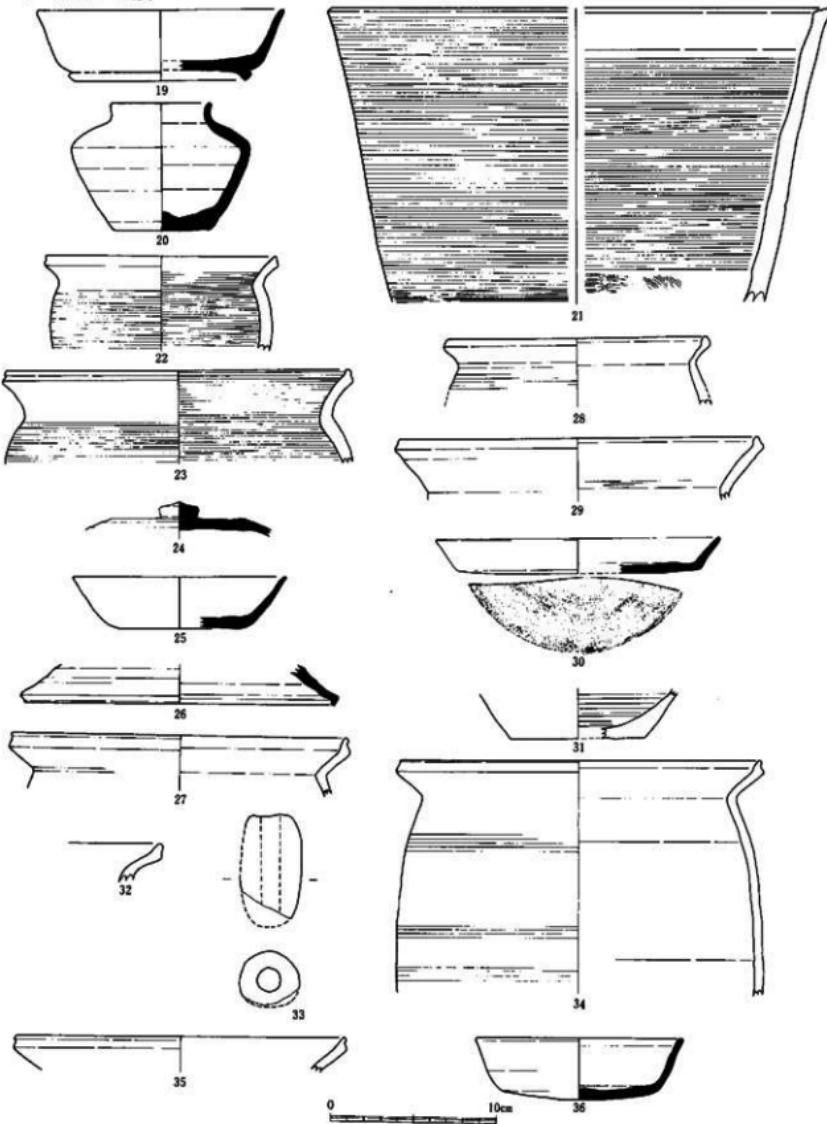
32~36 は第 3・4 号掘立柱建物跡の柱穴から出土したもので、33は土鍤である。器高約 7 cm、径 3.6 cm を測り、内部の筋は丸く整えられているが、器表面は剥落によって磨耗している。34は口径 21.4 cm、現器高 14 cm まで復元できたもので、頭部が棱を持つように強く扇曲している。外周にはかすかにカキ目調整痕が認められるが、内面は平滑に整えられている。薄茶褐色を呈し、胎土に若干の砂粒が混和されている程度で、焼成も堅緻である。36は口縁の一部を欠いているだけの殆ど完形品としてよいもので、口径 12.4 cm、器高 3.7 cm を測る。口縁部の立ち上がりは緩やかで、底部との境は丸味を持っている。内面は撫で調整痕が、底部は窓切り痕が明瞭に残っている。明灰色を呈し、胎土、焼成とも良好である。

溝跡出土土器（第 20~25 図、図版 16~20）

第 1 号溝からは昭和年代に推定できる遺物の出土が見られ、図示したものもあるが後述する。

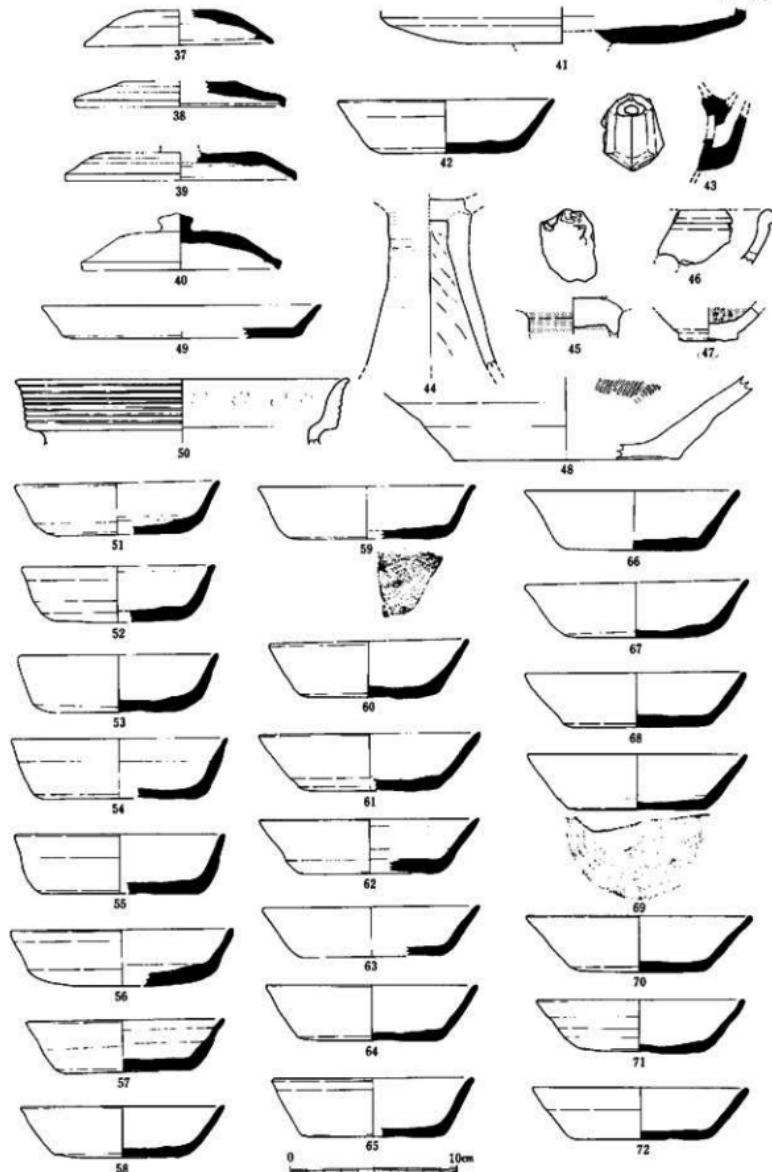
第 2 号溝跡からは須恵器の各器種、土師器の長胴甕、小甕、赤彩杯、土鍤の他に、中世の土師質土器、珠洲焼、越前焼の断片や鉢津、近世陶磁器が出土している。出土品は流水にもまれ磨耗が進んでいるものが目立ち、接合できる資料は殆ど認められなかった。37~49 までが第 2 号溝から出土して図示したものである。37は口縁部の内面に返しが残っていることから古墳時代に遡る可能性がある。38は口径 12.6 cm に復元できるもので、口縁部の立上がりが内屈の度合いを弱めているのが見られ、天井部分は削りによって面が作られ、体部との境に棱ができる。39は口径 12 cm、器高 3.2 cm を測るもので、天井部分では削り調整が省略されている。40は口径 13 cm、器高 3.2 cm を測るもので、口縁部が外傾気味に立ち上がり、内面での体部と口縁の境が不明瞭な成型となっている。重ね焼きの痕跡が認められる。41は高杯の受け部の断片で、蓋形土器を逆位置にした形となり、脚部との接合部周囲は撫で調整が顕著に見られる。43は淨瓶の水差し部分である。接合面では穴の位置がずれこんでいる。全体に濃緑色の自然軸が掛かっている。44は赤彩が施された土師器の高杯脚部で、接合部の径は 4.8 cm を測る。地肌は明褐色で、胎土に細かな砂粒を混和しているが精良で、焼成も良好である。45は P 18 グリッドから出土し

III 第5次調査の概要



第19図 住居跡・獨立柱建物跡出土土器 (1/3)

3 出土遺物



第20図 溝跡出土土器(1) (1/3)

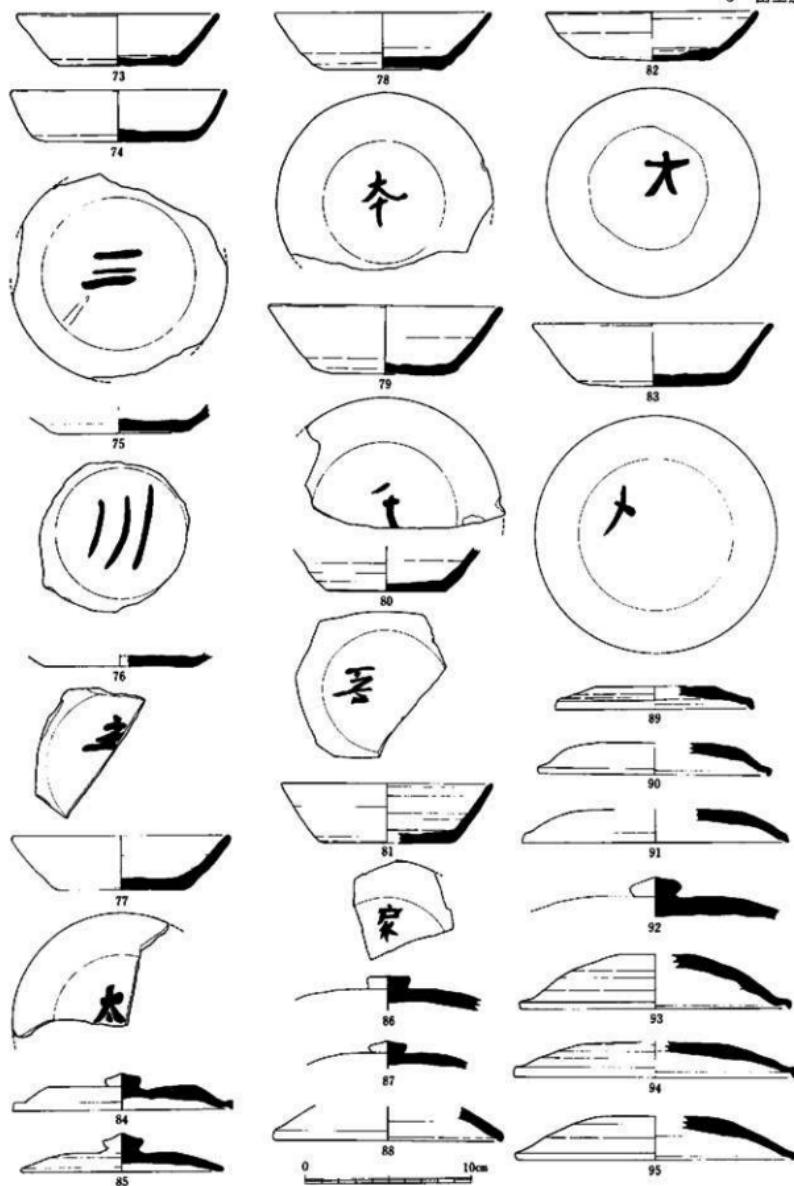
III 第5次調査の概要

た青磁の底部片である。見込みに文様が掘り込まれているようだが判然としない。46はQ 9から出土した瓦質土器で、全体に黒色をなしてて、体部に穿孔が入れられている。47はP 18から出土した天目茶碗である。底部の外周部分には面を持って削り調整が施されている。現況では胎糞は内面だけに認められ、器表面は灰色を呈したままである。48はP 15から出土した擂鉢の底部に推定したが、底面にまではカキ目がとどいていない。焼き締めの製品で、全体に茶褐色を呈している。近世のものであろうか。

第4号溝跡からは、本調査地点の中で最も多くの遺物が出土してて、時期的にも掘立柱建物跡群が展開していた段階のもので占められていた。出土位置はQ 12、R 11、P 13 グリッドでの出土が目立ち、溝跡全体に均質な形で包含されている状況ではなかった。50~161に示したものが本溝からの出土品で、須恵器の量が圧倒的である。50は弥生時代月影期の甕口縁部で口径 20 cm を測る。擬凹線は比較的明確に引かれ、尖り気味の口縁の内面には指頭圧痕が残されている。全体に赤褐色を呈し、胎土に微砂粒が多量に混和されている。杯は大きく分けて 2 類が認められ、52・53・55・56 の 1 群とその他である。前者は底部が比較的厚手になり、口縁部は腰の入ったカーブを描いて立ち上がるタイプで、量的には少數の出土にとどまる。後者は底部と口縁部の器壁の差が相対的に小さく、口縁部が外傾して立ち上がっていいくもので、墨書き器を含めて大半が含まれ、時期的にも後出するものである。52は口径 11.6 cm、器高 3.4 cm を測る。内面は使用によるものか滑らかな状態になっている。胎土には長さ 0.6 cm にもなる砂粒があるなどや難があり、焼成も重ね焼きの状態を反映して、口縁部と底部では大きく色調が異なっている。口縁部は灰色を呈し、底部は生焼け状態の茶褐色をなしている。53でも同じような色調を呈してて、口径 12 cm、器高 3.4 cm を測る。内面は使用によるものか滑らかな状態になっている。58は口径 12.2 cm、器高 3.1 cm を測る。大きく 2 片に破損していたもので、内面の撫で回しの状態が明確に遺存してて、口縁部への立上がり部分で強く押さえている状態が見られる。底部は籠きりによって作られている。色調は重ね焼きにより、淡灰褐色を呈し、胎土への砂粒の混和は少ないようだ。60は口径 12 cm、器高 3.4 cm を測る復元完形品となったものである。内面では底部と口縁部との境を明確にしないで立ち上がっていくが、底面では明瞭な形で境界が作られている。胎土には微砂粒の混和が多く、焼成は並である。62は口径 13.2 cm、器高 3.3 cm に復元されるもので、底部と口縁部との境の器壁が厚くなり突帯状になっているのが特徴的である。灰色を呈し、胎土、焼成とも良好である。66は口径 12.8 cm、器高 3.6 cm を測るもので、外傾度の強い口縁部の端部をさらに外反気味におさめている。灰褐色を呈し、胎土は並であるが生焼け状態である。67は完形で出土したもので、口径 13.2 cm、器高 3.3 cm を測る。内面の口縁部と体部との境は強く押しつけていて、凹線状の溝となっている。窯記号は一印のものが内面に入れられている。胎土には微砂粒が均一に混和され、灰青色を呈し、焼成は良好である。69の底面には×印の窯記号が見られる。70は生焼けの製品で、口径 13.4 cm、器高 3.4 cm を測る。体部と口縁部との器壁の厚さに変化は小さく、口縁端部にまでは同じ状態を保ち小さく外反する。71は口径 12.3 cm、器高 3.1 cm を測るもので、暗灰色を呈し、胎土には多量の砂粒が混和されていて、杯類の中では最も良くな。

墨書き土器は杯に限定される形で出土したが、須恵器に墨書きされているために明瞭さに欠ける。74は口径 13.1 cm、器高 3.1 cm を測るもので、底部の器壁が厚く、腰の入った口縁部の立上がりは古式の様相を持っている。底面に三本の線がかすかに認められる。75は先のものよりははっきりとした形で三本の線が認められる。77は「太」の字が明瞭に読み取れるもので、口径 13.2 cm、器高 3.3 cm を測る。底部と口縁部との境は明確で、器壁の変化は小さい。78は口径 13.2 cm、器高 3.4 cm を測るもので、底面に「大」と「十」が墨書きされているが、一文字の可能性も推定される。底部は切り成型の後に粘土が足され、平坦になるように撫で調整が施されている。79・80は全体的に不鮮明で、墨書きを特定することはできない。81は口径 12.7 cm、器高 3.6 cm に復元できたもので、灰色を呈し、胎土、焼成とも良好である。墨書きはやや不鮮明で、底面の端近くに認められ、「戸」と「水」と読めるが、一文字の可能性も考えられる。82は完形品で出土したもので、口径 12.6 cm、器高 2.9 cm を測る。焼成は良好であるが、胎土には多量の砂粒が含まれている。墨書きは肉眼では判然とは読み取れない。83は復元完形となったもので、杯の中では大きな類である。口径 14.2 cm、器高 3.8 cm を測る。底面の端にある墨書きは判然

3 出土遺物



第21図 溝跡出土土器(2) (1/3)

III 第5次調査の概要

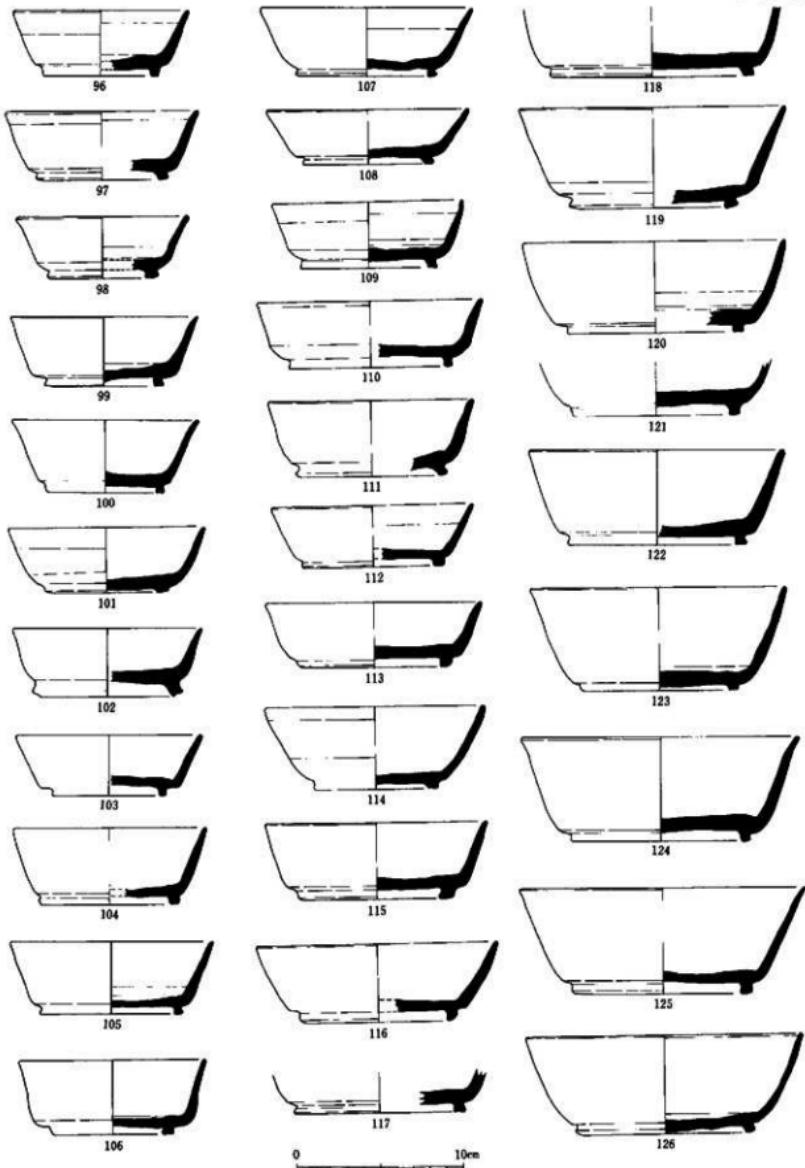
とは読めない。

84~95までは須恵器の蓋を図示した。85は口径12.2cm、器高2.3cmに復元されるもので、口縁端部に屈曲がまったく作られずにおさめ、肩部には幅は狭いものの範削りが入れられている。内外面ともに重ね焼きの痕跡が顕著で、青灰色を呈し、胎土、焼成とも並である。92は口径が20cmを超えると推定される大型品の蓋である。肩部に一条の線が入ったような形となっていて、天井部分に粘土が継ぎ足された境かと推定される。内面は平滑に整えられている。胎土には砂粒の混和は認められず、胎土そのものがやや砂っぽ気を持った状態となっていて、他の須恵器とは判然とした違いが指摘される。93・94は口縁端部の上面に狭い面が巡らされて、端部が嘴状に伸びて屈曲して納めているもので、他の類に比較して古い形態をとっていると言える。94は口径16.8cmに復元できるもので、口縁端部のみが色違いとなっていて、重ね焼きの状況が窺える。肩部には範削り調整が施されている。灰色を呈し、胎土、焼成とも良好である。

96~117に図示したものは高台杯の通有品で、杯の時期差と同様の形態差が認められる。口縁部の外傾度は杯のように明確なものではないが、体部と口縁部との器壁の差が顕著なものが古手のものと考えられる。99は口径11.3cm、器高4.2cmを測る復元完形となったものである。底部と口縁部との境は明瞭で、底面の範切り後に高台が取り付けられ、その周辺が撫でによって整えられている。暗灰色を呈し、胎土に若干の砂粒が混和されている。100も復元完形になった資料で、口径11.3cm、器高4.3cmを測る。口縁部は直線的に伸びて尖り気味に整形され、内外面共に境が明確な棱となっている。底面は範切りが痕が見られないほどに丁寧に撫でが施されている。暗青灰色を呈し、胎土、焼成とも良好である。101は底部と口縁部との器壁の差が大きなタイプで、幅が広く、背の低い高台が取り付けられている。102は口縁端部を外反気味に成型するもので、口径11.4cm、器高4.1cmに復元される。高台は外に踏ん張る形で取り付けられ、器体に比較して不釣合な大きさである。104は11.6cm、器高4.6cmを測るもので、器表面は自然釉が掛かり、暗褐色をなしているが、内面は灰色で、胎土に細かな黒点が無数に見られ、窯の内部で掛かったものと推定される。106は口径11.2cm、器高5cmを測るもので、口縁部が直立気味に立ち上がっていて、内面の境は明確となっている。高台は粘土紐が巡らされ接合した位置が幅の差となっているのが認められる。範切り痕は遺存しており、高台周辺のみの撫で調整で止められている。108は口縁部の外傾度が強く、丈の低いタイプで明らかに後出的な形態を示しているものである。口径13cm、器高3.3cmを測る。底面には一印の窯記号が認められる。109は口径11.6cm、器高4cmを測るもので、内面の口縁部と底部の境には強く押圧がなされ、口縁端部では内凹する形でおさめられているのが特徴的である。高台の取り付けでは、内側は撫でが施されているものの外周は全く手が入っていない。また、高台を接合する際に付いた爪跡が明確に遺存している。115は口径13.2cm、器高4.6cmを測る中型品で、底面が傾斜を持たないように成型されている。116は口縁部の外傾が強く表れているタイプで、口径14.4cm、器高4.7cmを測る。117では、底面に一印の窯記号が見られる。

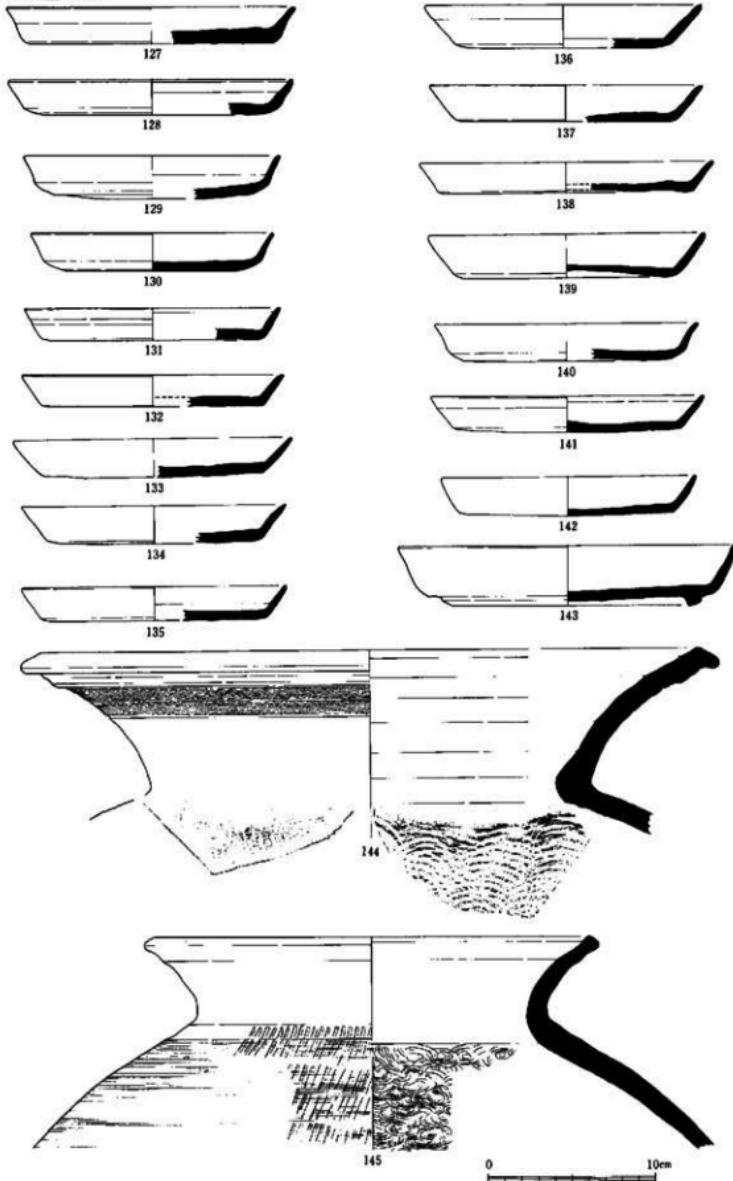
118~126までは大型品で、口径15~17cm前後を測る。内面の底部と口縁部との境が、不明瞭な121・122、凹線状に溝んでいるもの120・123・125、底面と口縁部が直線的に成型しているもの118・119・126に分類することができるが、体部の状態を考慮した上でなければ厳密には分離することはできないようだ。123は口径15.2cm、器高6.2cmを測る復元完形品である。底面および口縁部では微妙な凹凸が認められる。灰色を呈し、胎土には砂粒の混和が見られ、焼成は並である。125は口径17cm、器高6.4cmを測るもので、小さく外反する口縁端部が接合面で剥落している部分がある。底部は範切り部が見えなくなる程に撫でが入れられ、平坦な状態となっている。器表面には自然釉がかかつて剥落したようになっていて、暗青灰色を、内面は暗灰色を呈している。126は口径16.4cm、器高6cmを測り、底部から外傾を強めて立ち上がり中途から内窓気味におさめる口縁部を持っていている。底面には爪痕が明確に残っている。色調は内面と外周が大きく異なる状態となっていて、器表面は暗青灰色、内面は暗灰色を呈している。

127~142は皿形器形のもので、完形品での出土は見られなかった。杯、高台杯と同様に体部と口縁部との器壁の厚さの差が時期差を示しているものと考えられる。127は口径17.6cm、器高2.2cmに復元されるもので、内



第22図 溝跡出土土器(3) (1/3)

III 第5次調査の概要



第23図 溝跡出土土器(4) (1/3)

面には凹線状の窪みが巡るように成型され、底面は全体に丁寧な範削りが施され、さらに、体部と口縁部との境にも面取の範削りが入っている。内底面は回転撫で調整が施され、器表面には重ね焼きの痕跡を明瞭に見ることができる。133は口径 16.8 cm、器高 2.4 cm を測るもので、全体的に丁寧な作りとなっている。内底面は静止状態での撫でが入れられている。青灰色を呈し、胎土、焼成とも良好である。136の口径は 16.6 cm、器高 2.5 cm に復元できるもので、内外面ともに底部と口縁部との境に接線はできないように湾曲した形で成型されている。胎土には砂粒が混和され、焼成は並である。

盤の出土は少なく、143を図示し得たに止まる。143は復元完形品となったもので、口径 20.4 cm、器高 3.6 cm を測る。底部には高台の接合に伴う形での爪痕が一覗するような状態で残っている。色調は灰色を呈し、重ね焼きで外に出ていた部分は暗青灰色を呈している。胎土には若干の砂粒が混和され、焼成は並である。

144は人甕の口縁部で、口径 42 cm に復元される。強く外反する口縁部の上位置に波状文が丁寧な形で施されている。3本平行する沈線を巡らした後に、幅 1 cm で歯が 5 本の工具で細かく波状文を描いていく。頭部以下の外周は刻みの入った平行叩きが、内面では同心円文の叩き工具が使用されていて、底部近くでも変化はないようだ。明青灰色を呈し、胎土に砂粒は見られないほどに精選され、焼成も良好である。145は口径 27.5 cm に復元できるもので、強く外反する口縁部が内面へ肥厚するような形で突帯状に成型している。外周は平行叩き文の後にカキ目調整が施され、内面では直径が約 3 cm の同心円文を持つ叩き具が、細かく使用されている。色調は暗青灰色を呈し、胎土に微砂粒を含むものの精選されたもので、焼成は並である。

146は口径 16 cm、胴部最大径 24.6 cm、現器高 15 cm に復元できた蓋で、頭部以下の内外面共に丁寧なカキ目調整が、底部周辺では叩き成型が施されている。肩部には淡緑色の自然釉が掛かり、焼成は良好である。147は口縁部の外反傾向が弱くなっているもので、口縁端部は外側に肥厚している。口径 15.2 cm、胴部最大径 25.4 cm、現器高 22 cm を計測する。頭部以下は内外面共にカキ目調整が、底部近くでは叩き調整が見られる。カキ目は幅 1.5 cm 程度の工具が使われているようだ。叩きはカキ目成型の後に入れられている。暗青灰色を呈し、胎土、焼成とも良好である。

148は長頸瓶の口縁部で、最小径は 4.8 cm、現長 9 cm を測る。口頭部には 2 条の沈線が巡らされている。

149~151は赤彩された土師器で、149は高杯脚部片である。器表面は全体に赤彩が施されている。器表面は回転撫で調整が入れられ、内面でも調整は丁寧である。色調は淡茶褐色を呈し、胎土、焼成とも良好である。150は口径 13.8 cm、器高 3.1 cm を測るもので、内外面とも丁寧な範磨き調整が入れられ、底面は範削りによって平坦に整えられている。151は復元完形品となった口径 16 cm、器高 5.7 cm を測るもので、器表面が荒れているために細部の調整は不明である。152も復元完形品となった内黒土器で、口径 13.1 cm、器高 3.5 cm を測る。器表面は底部を含めて赤彩が施されている。体部は下半まで蓋削りによって整形し、口縁部分は横撫で調整である。淡黄褐色を呈し、胎土に若干の微砂粒が混和されているが良好で、焼成も良い。

155~157は土師器の鏡形土器で、155は口径 30.4 cm に復元される。全体的に粗雑な調整で、器表面には凹凸が目立った状態となっている。淡黄褐色を呈し、胎土には微砂粒が混和され、焼成は良好である。157は復元完形品となったもので、口径 40 cm、器高 15.3 cm を測る。内面の口縁部は横撫でが、底部は径 4 cm 強の同心円文の叩き調整が、外周はカキ目調整で整えられ、底面は平行叩きが入れられている。器表面は全体に煤の付着が顕著である。色調は淡黄褐色であるが、口縁の端部は火熱を受けて淡橙色を呈している。胎土には微砂粒が混和され、焼成は良好である。

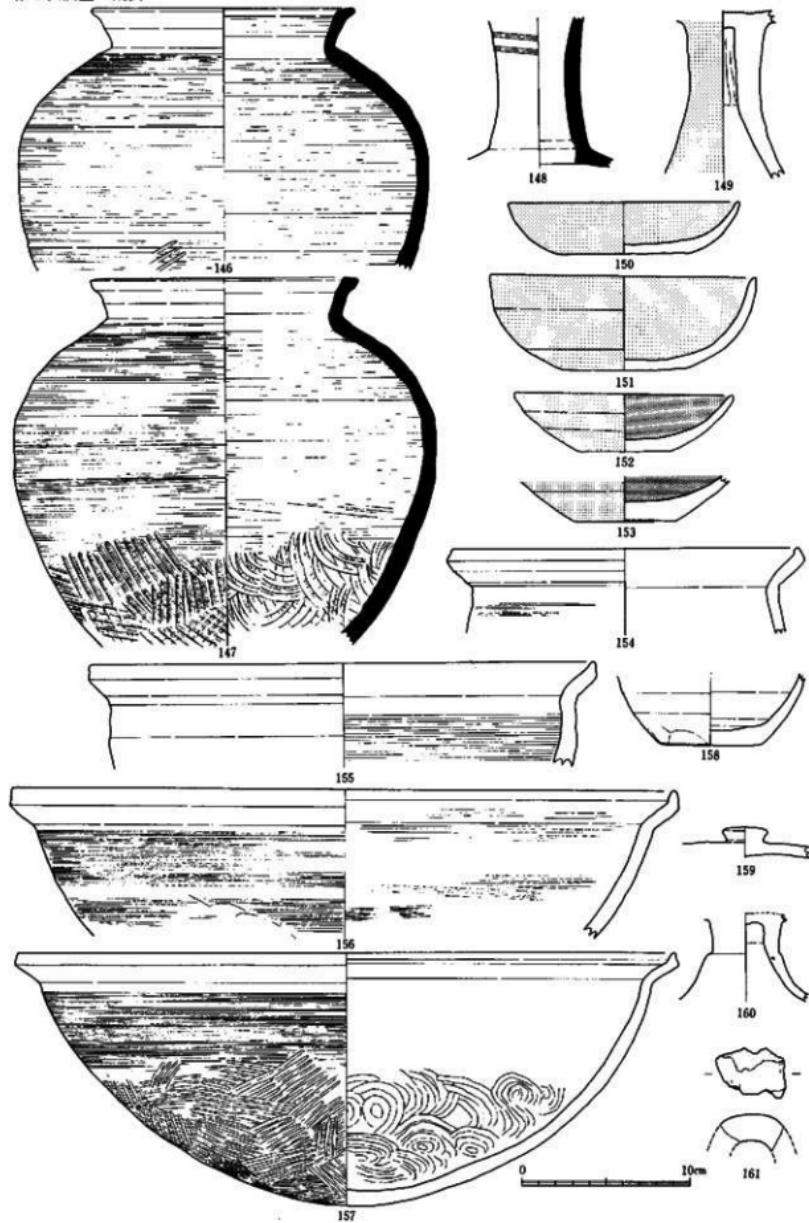
159は土師器の蓋形土器で、全体に磨耗が進行している。

160は須恵器の胎土を持ってる高杯の脚部片である。生焼けのものであろう。段を持つ器表面や内面でも横撫で調整痕が顕著で、器表面の色調は淡灰色を、内面は淡茶褐色を呈している。胎土は微砂粒も含まず均質になっている。

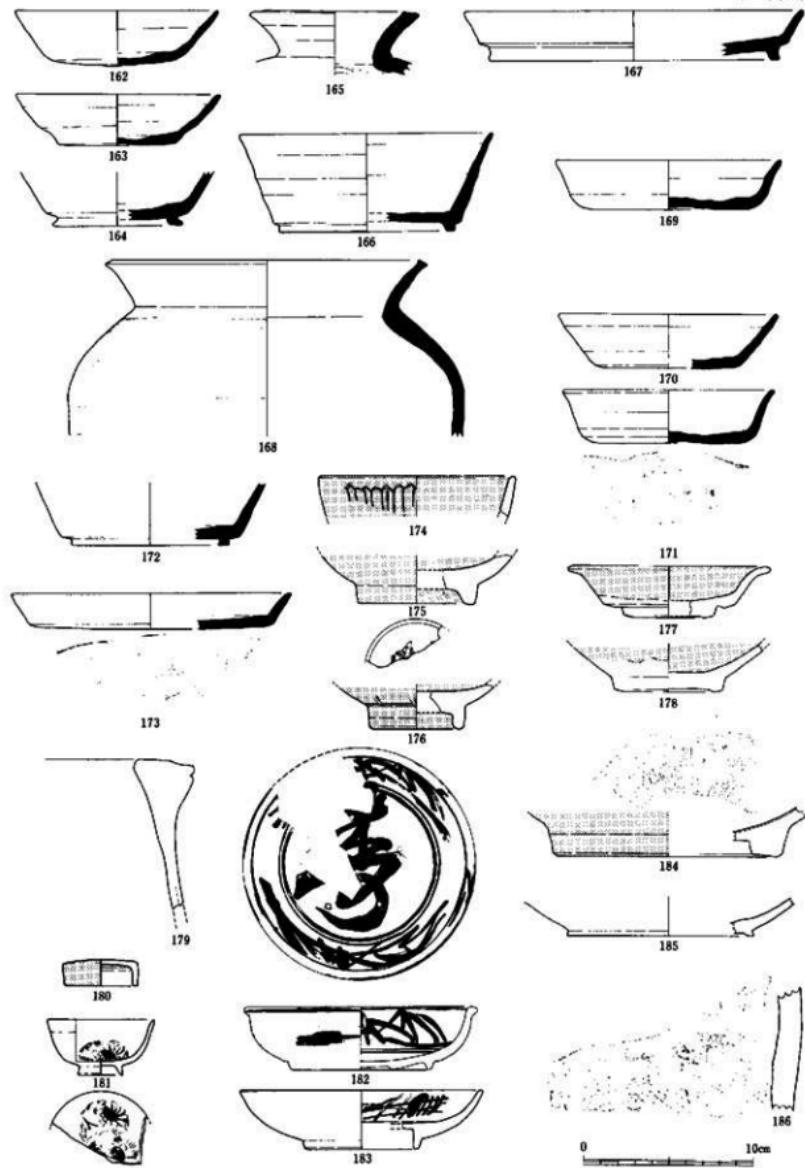
161はフイゴの羽口の断片で、径約 5.5 cm に復元される。

第 5 号溝からの出土遺物は少量で、162~167までを図示した。162は口径 12.2 cm、器高 3.3 cm に復元できた

III 第5次調査の概要



第24図 溝跡出土土器(5) (1/3)



第25図 满勝出土土器(6) (1/3)

III 第5次調査の概要

もので、粘土輪積の痕跡を残したままで撫で調整がなされ、底部の切り離しも範切痕をそのままの状態であり、手抜きがかなり進んだ状態となっている。青灰色を呈し、胎土、焼成とも良好である。163も同様の手抜きが認められる復元完形品である。口径12.3cm、器高3cmを測り、底部が突出したような形で成型されているのが特徴的である。164では底部内面が中央部に窪むような成型となっている。165は横瓶の口縁部で、口径10.4cmを測る。166は口径15.4cm、器高5.9cmを測る大型品で、口縁部では輪積痕跡が凹凸となって残っている。167は盤型土器で、口径20.2cm、器高3cmを測る。底面と腰部とでは器壁に差が見られ、高台の内側が盛り足して厚めに成型されている。腰部は面取によって稜線が引かれるが、内面は稜を持たずに口縁部へと移行している。

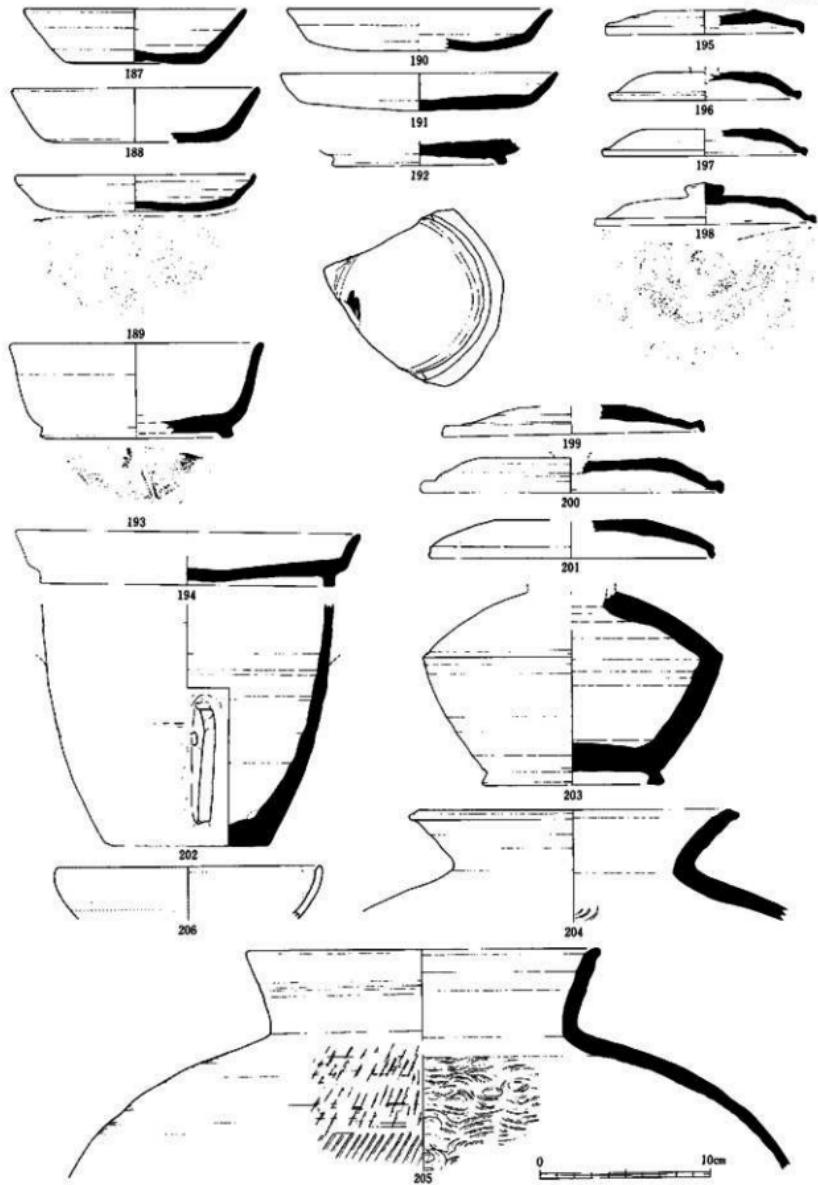
第6号溝からの出土品は少なく、図示できたのは168の壺型土器だけである。口径19.3cmに復元され、肩部には濃緑色の自然釉が厚く掛かり、内部にまで釉が飛んでいる。器表面には細かなカキ目調整が、内面には撫で調整が施され、丁寧な仕上がりとなっている。第7号溝跡からも出土土器は少なく、169の1点を図示したに止まる。口径13.4cm、器高2.1cmを測る。口縁端部には灯心油痕が2ヶ所で認められ、本遺跡では唯一の出土である。

第1号溝からは各段階の出土遺物があり、最も新しいものは昭和30年代頃かと推定される。出土品は流水にもまれた為に、角が取れている甕の破片が目立つ。170~186までを図示した。170は口径13.1cm、器高3.3cmに復元されるもので、青灰色を呈し、胎土、焼成とも良好で、重ね焼きの痕跡が認められる。171には底面に一印の窯記号が見られる。173は口径16.7cm、器高2.2cmの皿で、底面にX印の窯記号が刻まれている。174~176は中国製の青磁碗で、淡緑色を呈し、口径11.8cmに復元できる。口縁部に蓮華文が線刻されている。175の青磁碗は淡青色を呈していて、釉薬が高台部に厚く掛かるような状態となっている。割れ口には漆膜が若干付着しているのが認められ、補修を行ったものと推定される。177は瀬戸の製品で、口径12cm、器高3.2cmに復元される。内面および口縁部の大半まで灰釉が掛けられ、底部では削り調整痕が認められる。178~185までは近現代の陶磁器に推定されるものである。179は大甕の口縁部、186は大甕の肩部片で、格子目文の押印がつけられている。

包含層出土土器

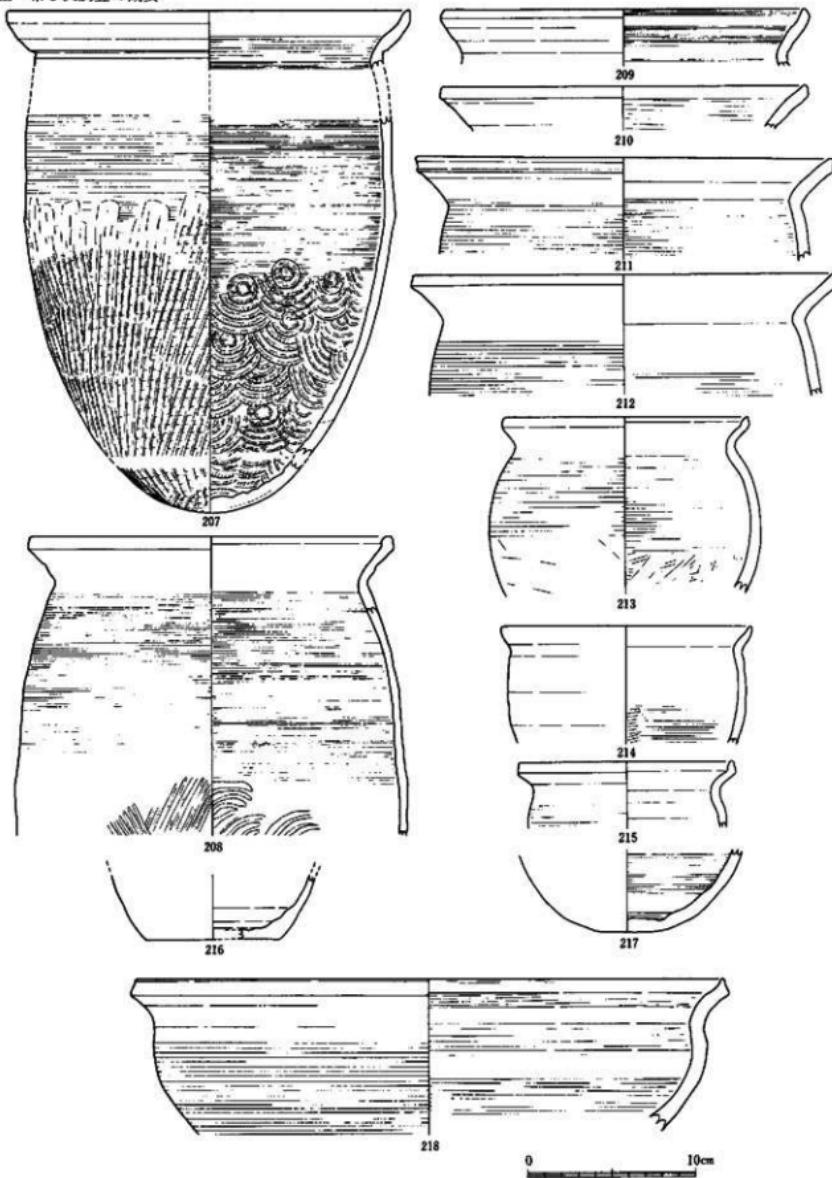
187から292までは包含層から出土したものを図示した。187はR 18グリッドから出土したもので、口径13.4cm、器高3.4cmを測る。全体に薄手に成型され、撫で調整で整えられている。淡青灰色を呈し、胎土、焼成とも良好である。188は体部と口縁部との境部分で器壁が厚みを増す成型となっていて、角を持たない立ち上がりっている。189はB 11グリッドから出土したもので、口径14.4cm、器高2.1cmに復元される。口縁端部を内屈気味にしておさめ、内面に段が付いたような形となっている。底面に一印の窯記号が入れられていて、重ね焼きの痕跡が認められる。190はP 10グリッド、191はR 9グリッドから出土していて、後者は復元完形となり、口径16.6cm、器高2.1cmを測る。底部は口縁部に比較して厚手に成型されていて、短い口縁が立ち上がっている。色調は暗灰色を呈し、胎土は良いが、焼成は不良である。192はR 10から出土したもので、内底面は静止状態での撫で調整が入れられている。底部は一印の窯記号と高台近くに墨書が認められる。193はO 11グリッドから出土した大型の高台杯で、口径15.1cm、器高5.7cmに復元された。淡茶色を呈し、焼成はやや甘いようだ。194はR 9からの出土品で、復元完形となった。底部の中央部分が窪むような成型で、口径20.6cm、器高3.2cmを測る。内底面は撫で調整、外底面は削り調整が、高台周辺部は撫で調整が施されている。195はN 10グリッドから出土したもので、口径11.7cmを測る。天井部は窪むような形で削りが入れられている。198はR 9グリッドから出土したもので、口径13.1cm、器高2.5cmに復元された。口縁端部は幅の狭い平坦面を巡らし、嘴状に伸びる口縁が付く。内面には一印の窯記号が入っている。200は口径18cmの大型の蓋で、198と類似した器形となっている。天井部は削りの後に撫でが、内面は撫で調整が入れられている。202は三耳壺の体部で、O 11グリッドから出土した。底径9.8cm、胴部径17.5cm、現器高14.5cmを測る。耳部は長さ7.3cm、面取された端部で0.7cmの厚さで、上端近くに1個穿孔が入れられ、体部に沈線が浅く巡らされている。下位の耳が角度にして90度の位置に両耳が取り付けられていて、その端部を認めることができる。青灰色を呈し、胎土には微砂粒が混和されていて、器表面はややざらついているが焼成は良好である。203はD 17グリッドから出土した長頸瓶である。

3 出土遺物



第26図 包含層出土土器(1) (1/3)

III 第5次調査の概要



第27図 包含層出土土器(2) (1/3)



第28図 包含層出土土器(3) (1/3)

III 第5次調査の概要

底径 10.8 cm、体部径 17.8 cm、現器高 11.6 cm を測り、口縁部を欠損している。体部下半の中途から範削り調整が施され、肩部には 2 本の沈線が間隔を置いて浅く巡らされている。灰色を呈し、胎土に砂粒が混和されているが、焼成は良好である。205 は C 1 グリッドから出土した甕の口縁部で、口径 21.2 cm を測る大型品である。肩部には灰釉が掛かり、さらにそれが飛んでしまったように荒れた肌面となっている。直立気味に立ち上がる口縁部には、2 条の沈線が巡らされているが、一部で複合し 1 条になっている箇所もある。

207~218 は土師器の甕、鍋器形となるもので、207・208 は L 16 グリッド、南北に別れた掘立柱建物跡群の中間当りになる位置で、一括土器として出土したものである。周辺には焼土面が認められ、竪式住居址が所在していた可能性が考えられるが、焼土面が周辺地域からやや高いレベルに当ることから検出することができなかつた。207 の各破片は直接的には接合できなかつたが、図上復元したものである。口径 24.4 cm、推定器高約 30 cm となるもので、茶褐色を呈し、器表面には煤が付着している。209 は Q 9 グリッドから出土しているもので、口縁部外側はカキ目その後に撫でが入れられている。211 は D 17 グリッドから出土したもので、口径 25 cm に復元される。淡茶褐色を呈し、胎土には微砂粒が混和され、焼成は堅密に上がっている。213 は C 17 グリッドからの小甕で、口径 14.7 cm、体部径 10.2 cm に復元される。口縁部は撫で、体部の内外周はカキ目、体部下半は削り調整が入れられている。白黄褐色を呈し、器表面は荒れている。214・215 は共に茶褐色を呈し、遺存状態は良好である。216 は糸切り跡が見られる底部で、K 14 グリッドから出土した。218 は D 17 グリッドから出土した鍋形土器で、口径 35.3 cm に復元される。内外周ともに幅のあるカキ目調整で整えられ、口縁部は撫でによってカキ目が擦り消されている。灰黄褐色を呈し、胎土には砂粒が混和されているが、焼成が堅密に上がっているために目立たない。

219 は D 17 グリッドから出土したもので、製塙土器に推定される。器表面は粘土紐輪積痕が明確に見られ、板状になった粘土を外側に向ける形で積み上げ、口唇部は尖り気味に成型されている。器表面には指頭圧痕と推定される列点が連なっている。内面はカキ目調整が細かく入れられている。淡茶褐色を呈し、胎土は精選されているのか砂粒の混入は見られない。

221 は P 18 グリッドから出土した珠洲焼の鉢である。222~227 は近現代の陶磁器である。

228 は P 11 グリッドから出土した輝石安山岩質の完形品の削器で、長さ 8.3 cm、厚さ 0.9 cm、重さ 20 g を測る。刃の先端部での剥離は殆ど行わず、括れ部では両面で調整を行っている。東部の側面に一部自然面が残っている。229 は第 4 号溝跡から出土した中粒砂岩質の凹石で、片面に 2 個の窪みが見られる。端部が欠損していて、現況での長さ 14 cm、幅 10.9 cm、厚さ 4.9 cm を測る。縄文時代の遺物としては、上記の 2 点に加えて、打欠石錐が 1 点出土している。第 4 号溝の P 13 グリッドからで、角礫凝灰岩質のもので長さ 8.8 cm、幅 6.8 cm、厚さ 3.1 cm、重さ 151 g を測る。

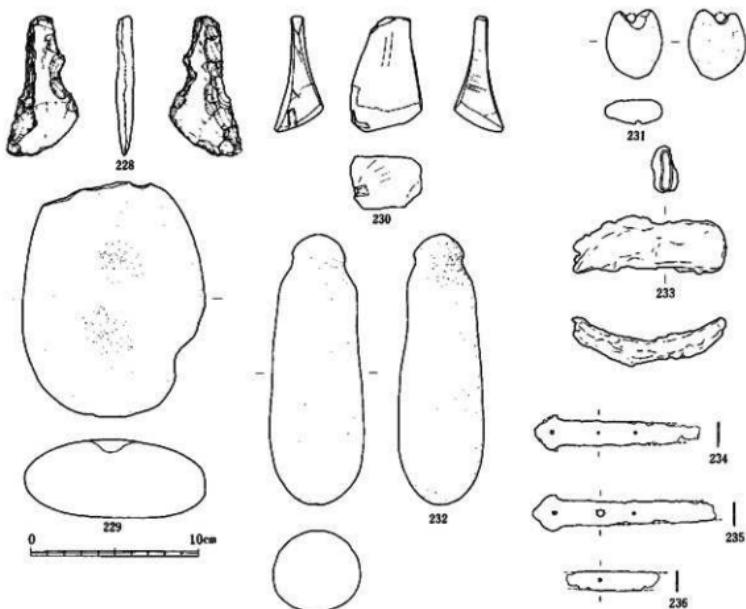
230 は第 4 号溝から出土した砾石で、231 は E 17 からの穿孔されている軽石である。

232 は第 1 号掘立柱建物の柱穴から出土した石錐で、頭部に括れ部を巡らしている。長さ 16.3 cm、径 5.1 cm を測る。

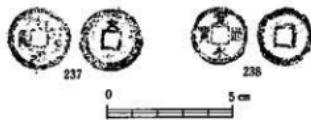
233 は第 4 号掘立柱建物の柱穴から出土した鉄製品で、鎌に推定される。

234~236 は包含層から出土した飾り金具である。寛永通宝と共に出土しており近現代のものであろう。

237・238 は銅錢の拓影である。E 10 グリッドの溝跡から寛永通宝が 10 枚、鏽着したもの 2 点（4~5 枚か）が出土している。すべてが寛永通宝と断定はできないが可能性は高い。



第29図 石器他実測図 (1/3)



第30図 古錢拓影 (1/2)

IV 第6次調査の概要

1 竪穴住居址

第1号竪穴住居址（第32図、図版23・24・25）

調査区の南西地区、A—2区に位置している住居址で、2棟が切り合っているものと推定される。南東方向約10mに第2号竪穴住居址が位置している。西方向約25mには昭和63年度調査区の第7号竪穴住居址、第6号竪穴住居址などから成る住居址群が位置している。長軸方向が同一の竪穴住居址は昭和63年度、平成元年度いずれの調査区内にもない。唯一第2号住居址がほぼ90度長軸がふれているのみである。平面プランは方形で、正方形に近い。南北方向約300cm、東西方向約320cm、深さ約35cmを測る北側の住居を一時廃して、南北方向約350cm、東西方向約320cm、深さ約35cmを測る住居に、約1m南へ移動して建て替えをしているようである。他の遺構と大きく切り合うことはなく、遺存状態は良好であった。覆土は暗茶褐色土を基本とし、黄色の地山ブロックや炭化物の微妙な混入具合で見分けるしかなかった。切り合関係は、東西セクションでははっきりと確認できるものの、南北セクションでは壁の位置は確認することができなかった。先行する北側の住居床面には、焼土、炭化物などは検出されなかったが、南側床面には、南北隅にU字形の焼上面を検出した。更にそれを覆い隠すようにして炭化物が床面の約半分に広がっていた。住居址南辺の西端には煙出しとみられる掘り込みが見られ、その先に付属すると考えられるピットがある。遺物の出土は少ないが、出土地点はそのほとんどが南よりである。また、炭化物上面では鉄器が1点出土している。

第2号竪穴住居址（第32図、図版26・27）

調査区の南端、A—3区に位置している竪穴住居址で、南半分は昭和63年度の調査区にかかっている。平面プランは隅丸の長方形で、北西及び南西側の隅は、第5号掘立柱建物の柱穴に切られている。長軸は東西方向で約280cm、短軸は南北方向で約220cm、深さは約45cmを測る。覆土は第1号竪穴住居址と同様暗茶褐色土が基本で、それに黄色の地山ブロックや炭化物、さらには砂などが混入するものである。床面には柱穴や焼土は確認できなかった。遺物の出土も少ない。

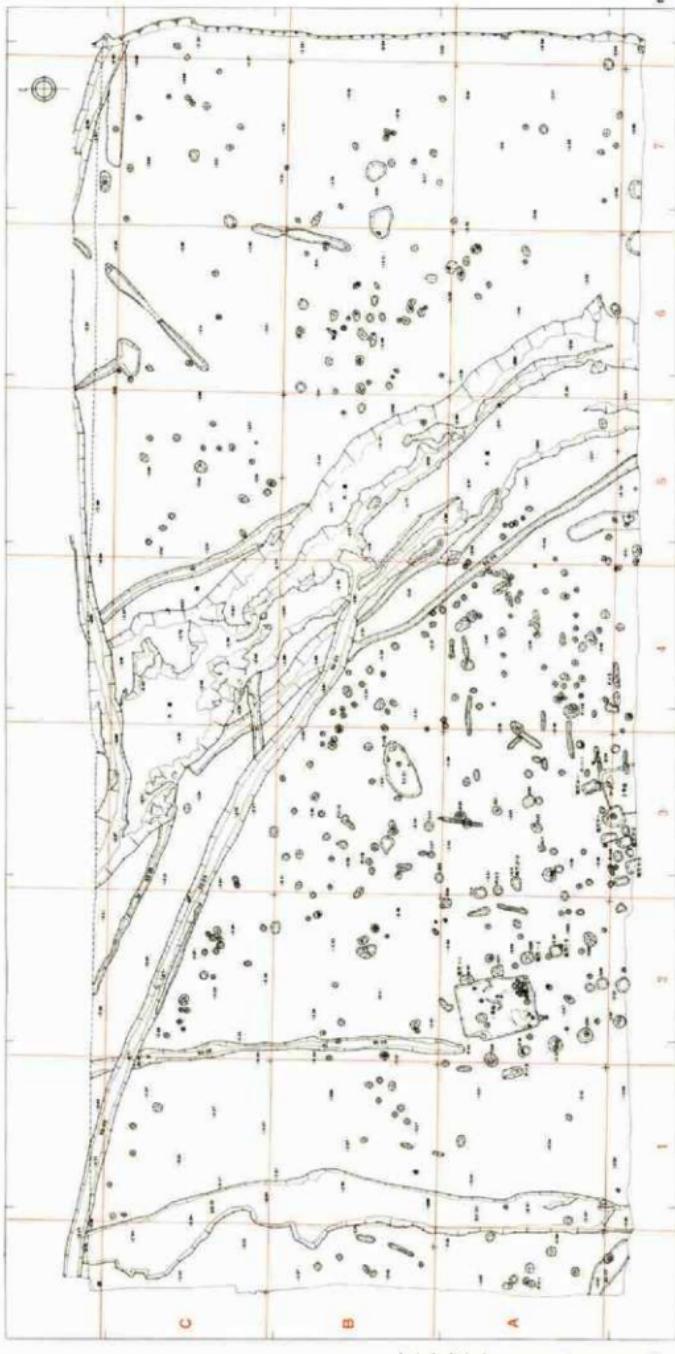
2 掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡（第33図、図版25）

調査区の南西地区、A—2区を中心にして検出した掘立柱建物跡で、第1号竪穴住居址と重複している。桁行方向を南北方向におき、磁北から約16度西にふれている。桁行4間梁間2間の建物で、桁行の柱間は西辺で、北から190cm+215cm+185cm+200cm（合計790cm）、梁間の柱間は南辺で西から250cm+265cm（合計515cm）を測る。柱穴は概ね方形もしくは隅丸の方形を呈しており、70~90cm四方を測る。また柱穴の中には2段掘りになっているものも見られ、深さは25~60cmを測る。柱穴からの出土遺物は土器の細片だけであった。

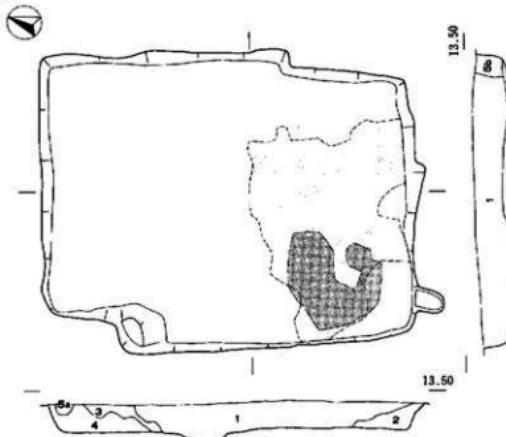
第2号掘立柱建物跡（第34図、図版29）

調査区の中央南よりの地区、A—3区を中心として検出した掘立柱建物跡で、第1号掘立柱建物跡の東方向約4.5mに位置する。桁行方向を南北方向に置き、第1号掘立柱建物跡とほぼ平行に配置されており、それぞれの梁間北辺が一直線上に並んでいる。桁行3間、梁間3間の建物で、桁行の柱間は西辺で、北から210cm+220cm+210cm（合計640cm）、梁間の柱間は北辺で、西から155cm+145cm+170cm（合計470cm）を測る。柱穴は概ね不整形な円形を呈し、四隅の柱穴が若干大きく、径60~80cm、深さ30~40cmを測る。その他の柱穴は、径40~70cm、深さ25~40cmを測る。柱穴からの出土遺物は、土器の細片だけであった。また、桁行西辺中央に径約50cm、深さ約20cmのピット3が位置している。建物内側に向かって傾いており、梯子穴の可能性もある。



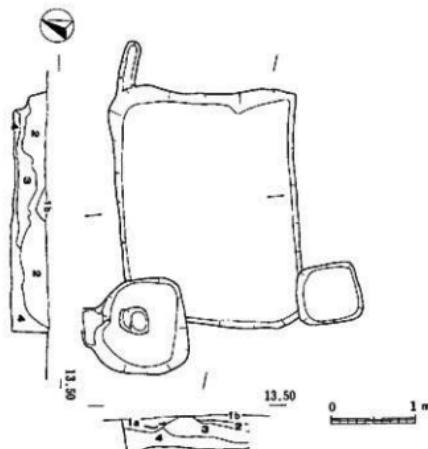
第31図 法仏遺跡（平成元年度）遺構図 (1/300)

IV 第6次調査の概要



第1号住居址

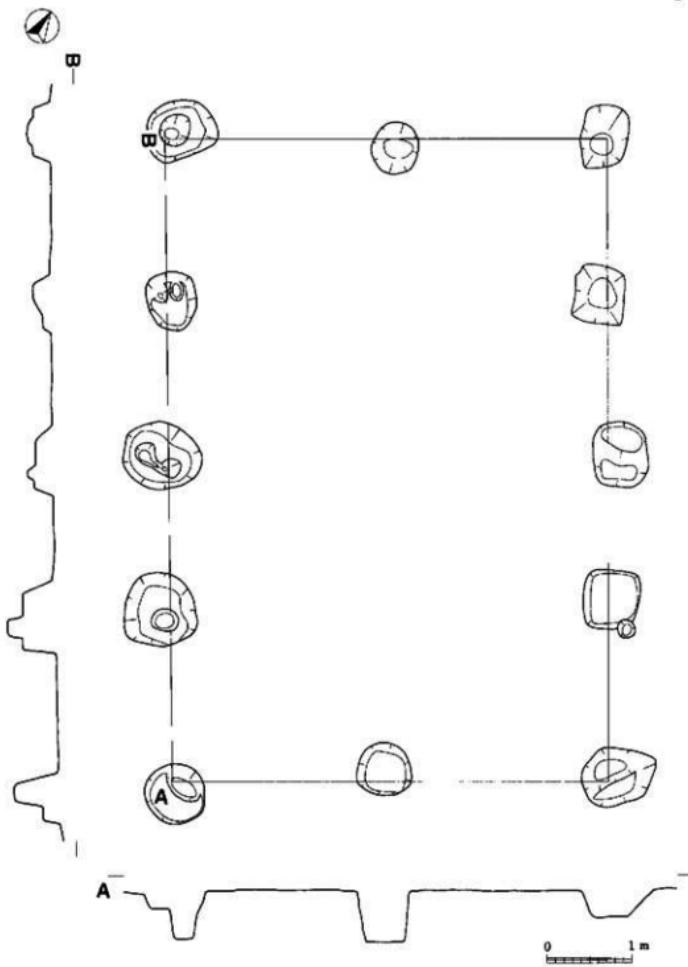
1. 單茶褐色土（黄色ブロック混、炭化物少量）
2. 黒茶褐色土（淡茶褐色ブロック混、炭化物少量）
3. 晴茶褐色土（1.より細い、黄色ブロック少量、炭化物少量）
4. 晴茶褐色土（黄色ブロック混、炭化物なし）
- 5a. 單茶褐色土
- 5b. " (黄色ブロック少混)
6. 晴茶褐色土（黄茶褐色ブロック多混）



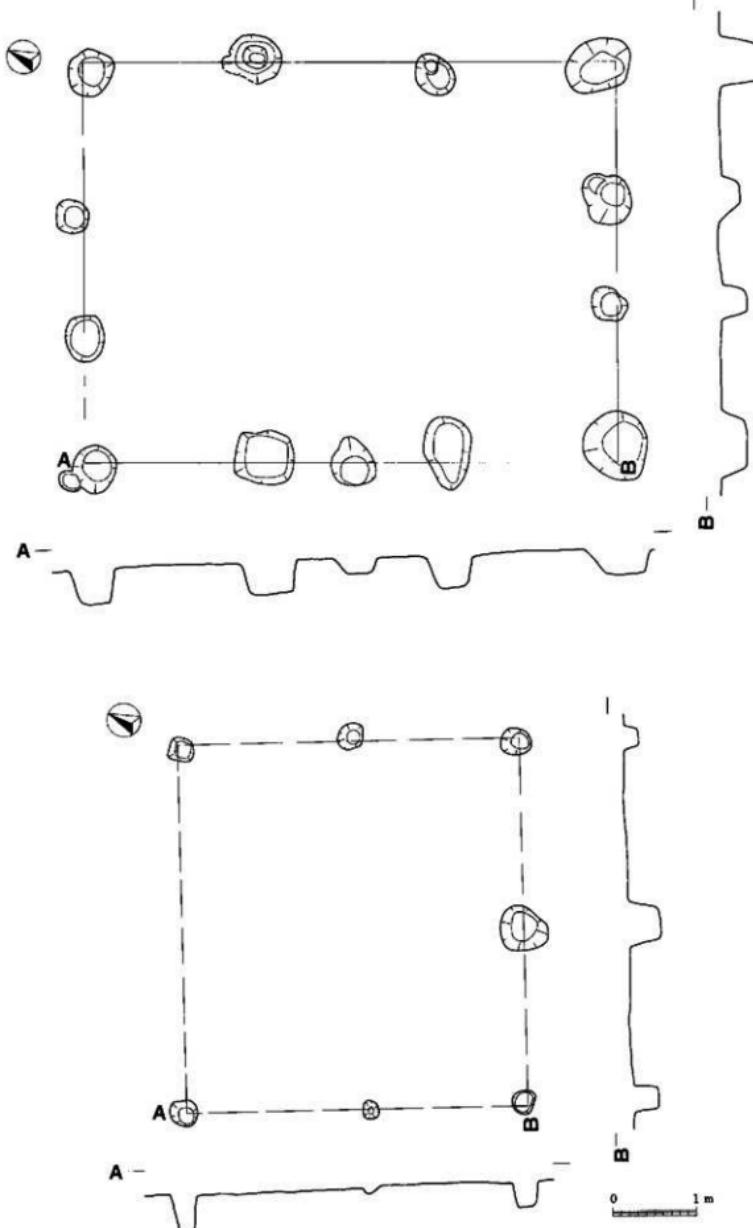
第2号住居址

- 1a. 晴茶褐色土（炭化物少量、砂まじり）遺物混
- 1b. 單茶褐色土（炭化物少量、砂まじり、黄茶色ブロック混）
2. 晴茶褐色土（炭化物なし、砂まじり1.より多い、黄茶ブロック少混、黒茶ブロック少混）
3. 晴茶褐色土（炭化物なし、砂まじり2.より多い、黄茶ブロック多混、黒茶ブロック少混）
4. 單茶褐色粘質土（炭化物少量、砂まじり、黄茶色ブロック少混、黒茶ブロック多混、焼土少混）

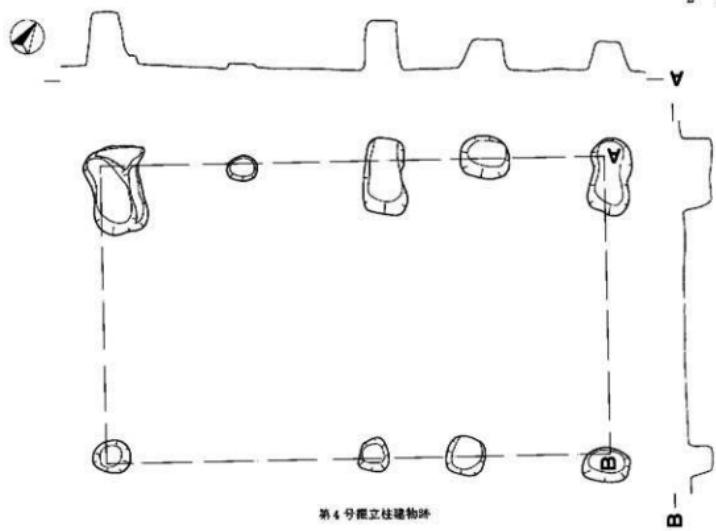
第32図 第1・2号住居址 (1/60)



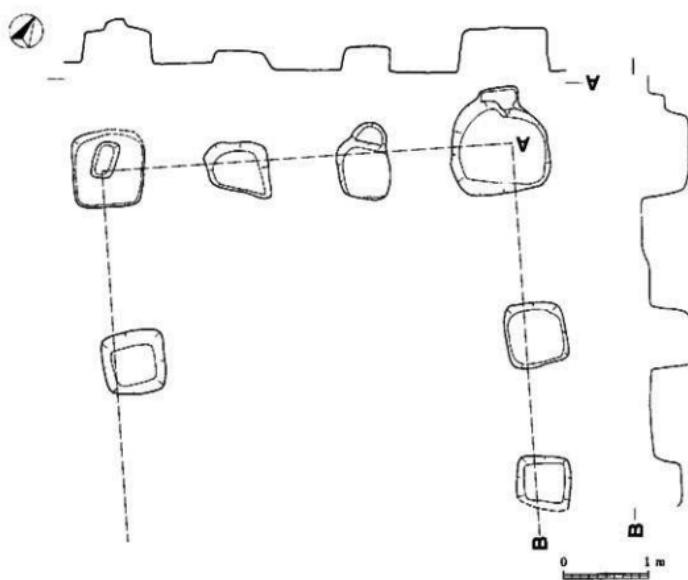
第33図 第1号据立柱建物跡 (1/60)



第34図 第2・3号据立柱建物跡 (1/60)

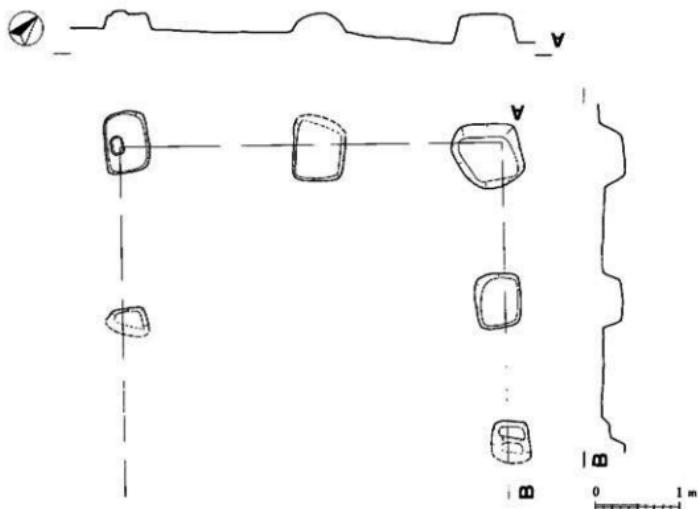


第4号掘立柱建物跡



第5号掘立柱建物跡

第35図 第4・5号掘立柱建物跡 (1/60)



第36図 第6号掘立柱建物跡 (1/60)

第3号掘立柱建物跡（第34図）

調査区の南西地区、A—2区で検出した掘立柱建物跡で、第1号竪穴住居址及び第1号掘立柱建物跡と重複している。桁行方向を南北方向に置き、磁北から約14度西に振れている。桁行2間、梁間2間の建物で、桁行の柱間は、西辺で北から225cm+185cm(合計410cm)、梁間の柱間は南辺で西から210cm+225cm(合計435cm)を測る。柱穴のプランは円形で、径約50cm、深さ約35cmの棟持ち柱と思われる2つを除き、径20~40cm、深さ10~50cmを測る。柱穴からの遺物の出土はなかった。

第4号掘立柱建物跡（第35図）

調査区の中央南よりの地区、A—3区で検出した掘立柱建物跡で、第2号掘立柱建物跡の南に隣接している。桁行方向を東西方向に置き、第1号、第2号の各掘立柱建物跡の主軸とほぼ直交する。桁行4間、梁間1間の建物で、桁行の柱間は南辺で西から150cm+120cm+175cm+160cm(合計605cm)、梁間の柱間は西辺で約370cm、東辺で約335cmを測る。柱穴は桁行南辺の東西及び中央のものだけが、隅丸の長方形を呈し、その他は概ね円形を呈する。前者は約70cm×50cm、深さ30~60cm、後者は径30~60cm、深さ10~30cmを測る。柱穴からの出土遺物は、土器の細片だけであった。

第5号掘立柱建物跡（第35図）

調査区の中央南よりの地区、A—3区を中心に検出した掘立柱建物跡で、第4号掘立柱建物跡の南に隣接している。南半部分は調査区の外にあり、全体の規模は不明であるが、東西方向に3間、南北方向に2間以上の建物である。柱間距離から、おそらくは桁行方向が南北方向、梁間方向が東西方向になると考えられる。桁行方向は磁北から西へ約20度振れている。桁行の柱間は東辺で北から230cm+180cm、梁間の柱間は北辺で西から160cm+150cm+170cm(合計480cm)を測る。柱穴は方形を呈し、70~90cm四方、深さ20~50cmを測る。柱穴からの出土遺物は土器の細片だけであった。

第6号掘立柱建物跡（第36図）

調査区の南西地区、A-2区の南に検出した掘立柱建物跡で、第1号掘立柱建物跡の南に隣接し、第5号掘立柱建物跡とは、柱筋をほぼ平行にして並んでいる。南北部分は調査区の外にあり、全体の規模は不明であるが、東西方向に2間、南北方向に2間以上の建物である。第5号掘立柱建物跡と同様に、桁方向が南北方向、梁間方向が東西方向になるものと考えられる。桁行の柱間は、東辺で北から170cm+180cm、梁間の柱間は、北辺で西から240cm+210cm(合計450cm)を測る。柱穴は方形を呈し、70~80cm四方、深さ20~40cmを測る。柱穴からの遺物の出土はなかった。

3 出土遺物

1 遺構からの出土遺物

住居址 第1号住居址の覆土からの出土遺物は、9点が図示できた。1はかまど付近から出土したもので、この住居址の存続時期に大きく関わるものであろう。口径は22.0cmを測る。体部外面は全体にたたき調整をした後、上部にカキ目、中位にはへら削りが施されている。内面はカキ目による調整を施している。2は長胴甕の底部である。摩滅が著しいが、外面にはへら削り、内面にはカキ目による調整が施されている。3・4は須恵器の壺蓋の端部の小片で、それぞれ口径17.6cm-17.0cmを測る。5は口径12.4cmの小径タイプで、径2.4cmを測る宝珠形のつまみが付けられている。返りの内側に重ね焼きの溶着がみられる。6は返りの付かないタイプで、径11.1cmを測る。8の中型甕は第2号住居址出土の破片と接合したものである。口縁部欠損のため、口縁の形状、器高などはわからないが、体部の最大径は42.0cmを測る。たたき具の原体が、内外面とも胴部と底部付近とでは異なっており、2次調整の痕跡がはっきりと観察することができる。9の鉄製品は、住居址床面に広がっていた炭化物の直上で出土したもので、長さ13.6cmを測る。断面は太さ0.7~0.8cmの略方形を呈し、中央部は腐食により膨れています。一部に木質が付着しており、この鉄製品が使用されていた状況を示唆しているようである。ちなみに重量は31.3gを測る。

第2号住居址からは、10~14の出土があった。10は土師器の鍋で、体部片のみが遺存しているものである。破片はほぼ床面からの出土であり、第2号住居址の年代の決め手になるもの一つである。たたき調整の後、カキ目調整を施し、更に胴部中位にへら削りを施している。外面にはすすの付着が見られる。8世紀後半代の所産であろう。11は小型の甕で、口縁の端部を上方につまみ上げるタイプである。外面にはすすが付着している。全体にたたき調整を施したのち、内外面共体部上半をカキ目調整している。外面はその後中位を削り上げている。これも8世紀の後半代に位置付けられるものである。13は壺の口縁部の破片で、口径13.0cmを測る。外面は降灰により黒色化している。14は口径17.2cmに復元されるもので、底部からの立ち上がり部分に不明瞭ながら一条の沈線が巡るものである。胎土にやや大粒の石英・長石片が含まれている。

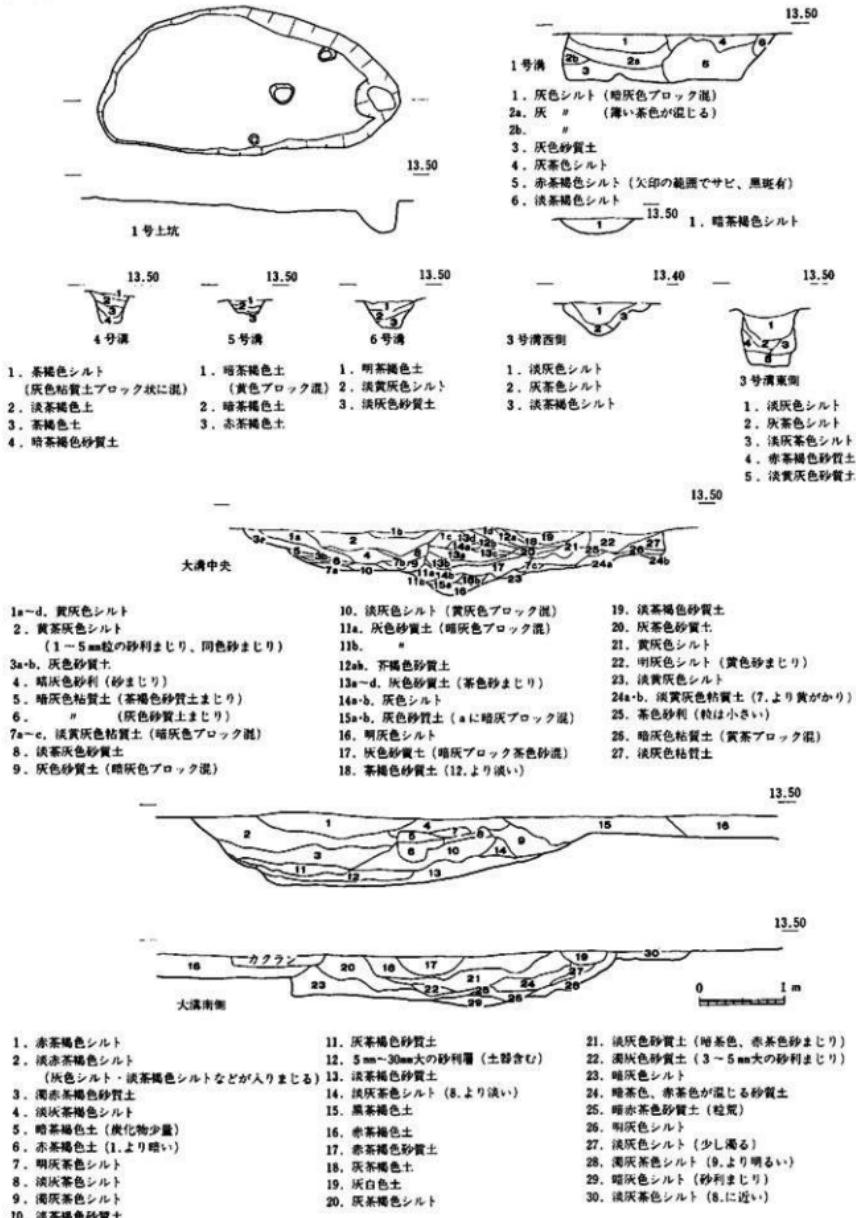
大溝 15~174までが大溝からの出土遺物である。15~18までは弥生時代から古墳時代への転換期に位置づけられるもので、斐形土器の口縁部である。15は口径31.6cmに復元されるもので、有段口縁の端部は外反しながら緩やかに立ち上がる。外面には12条の擬四線が巡り、内面には指頭圧痕が見られる。

19~76までは須恵器の無台壺である。19は比較的丸い底部から立ち上がった口縁の端部を、外側へつまみ出しているもので、口径12.5cm、器高3.5cmを測る。20は口径13.8cm、器高3.1cmを測るもので、内わんしながら立ち上がるタイプである。いずれもその形態から7世紀代に位置づけられるものである。

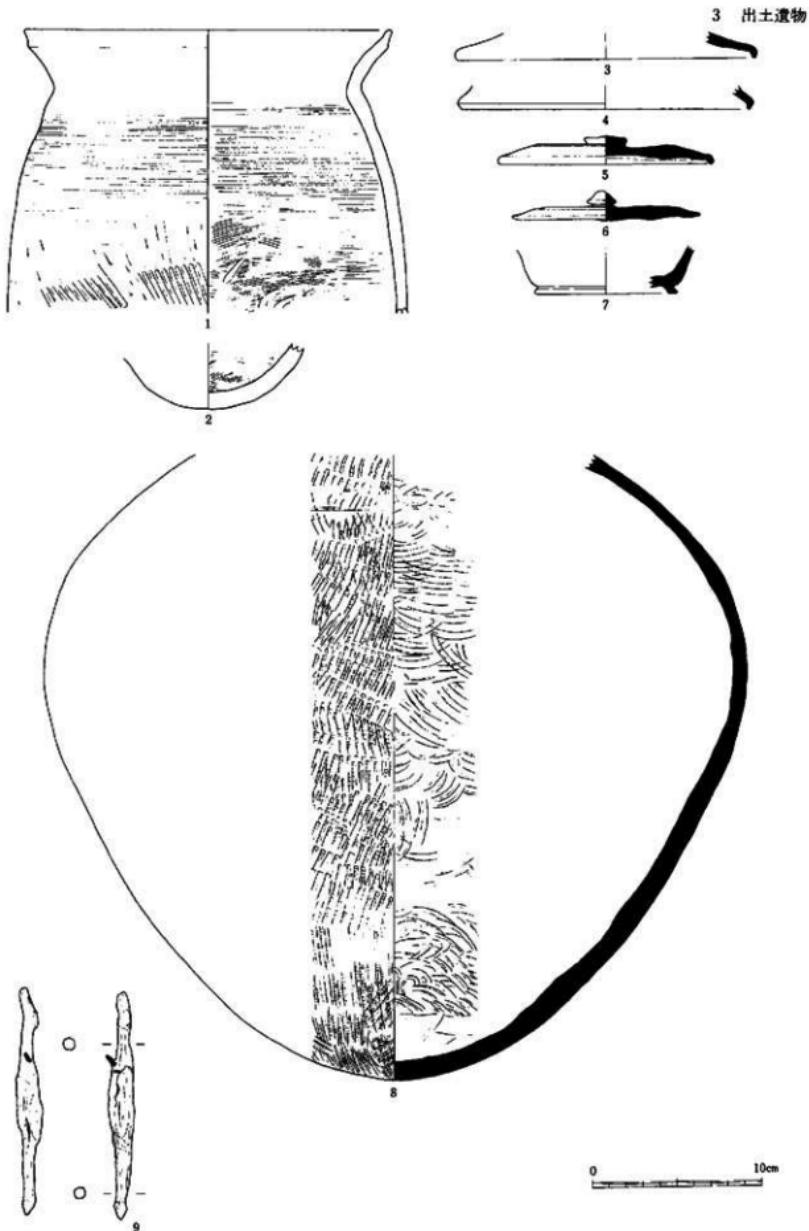
21から32までと35~47は偏平なタイプの壺で、比較的浅いつくりになっている。口径は12.7cmから14.8cm、器高は2.7cmから3.2cmを測り、いずれも偏平率は23%以下である。このうち25~28は外傾度がやや強くなっているものである。

これに対し33と36~46・48~52は、比較的深い作りになっているものである。口径は11.5cmから15.6cmで、偏平なタイプの物とはっきりとした違いは認められない。しかし器高は3.2cmから3.7cmと明かに偏平な

IV 第6次調査の概要

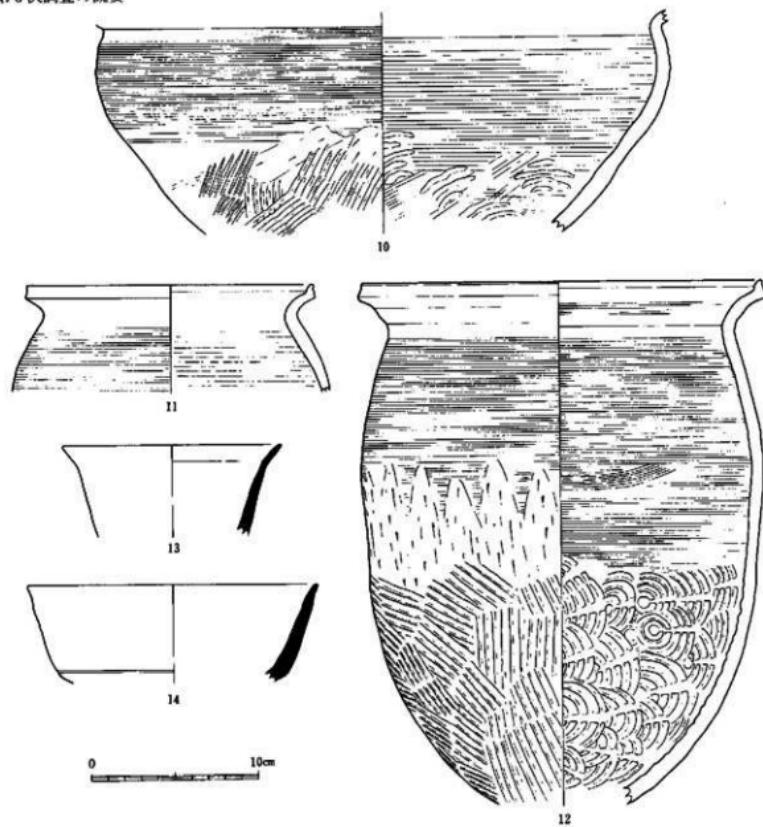


第37図 土坑、溝土層断面図

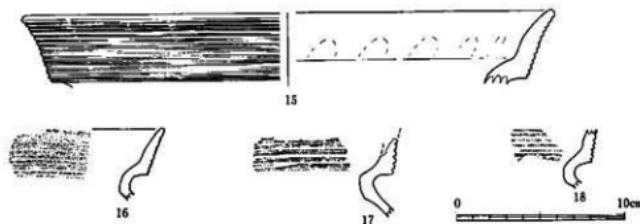


第38図 第1号竪穴住居址出土遺物

IV 第6次調査の概要

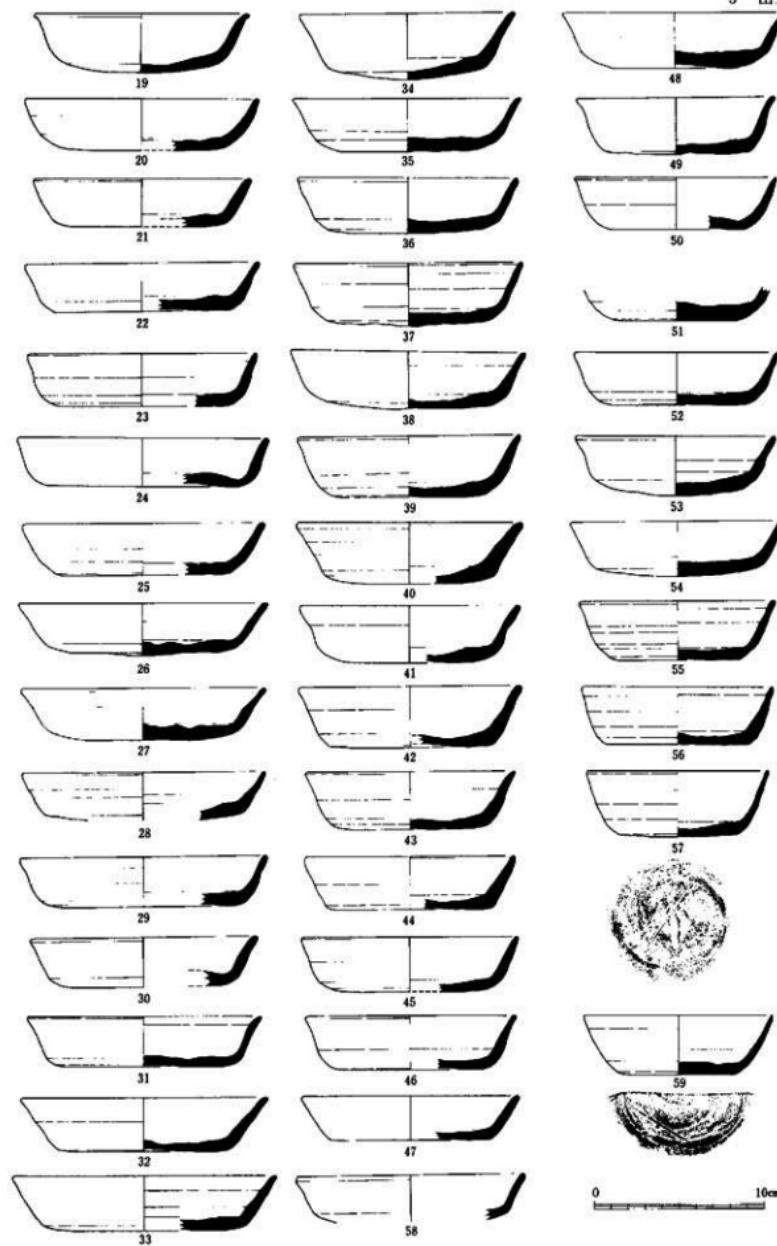


第39図 第2号堅穴住居址出土遺物(1/3)



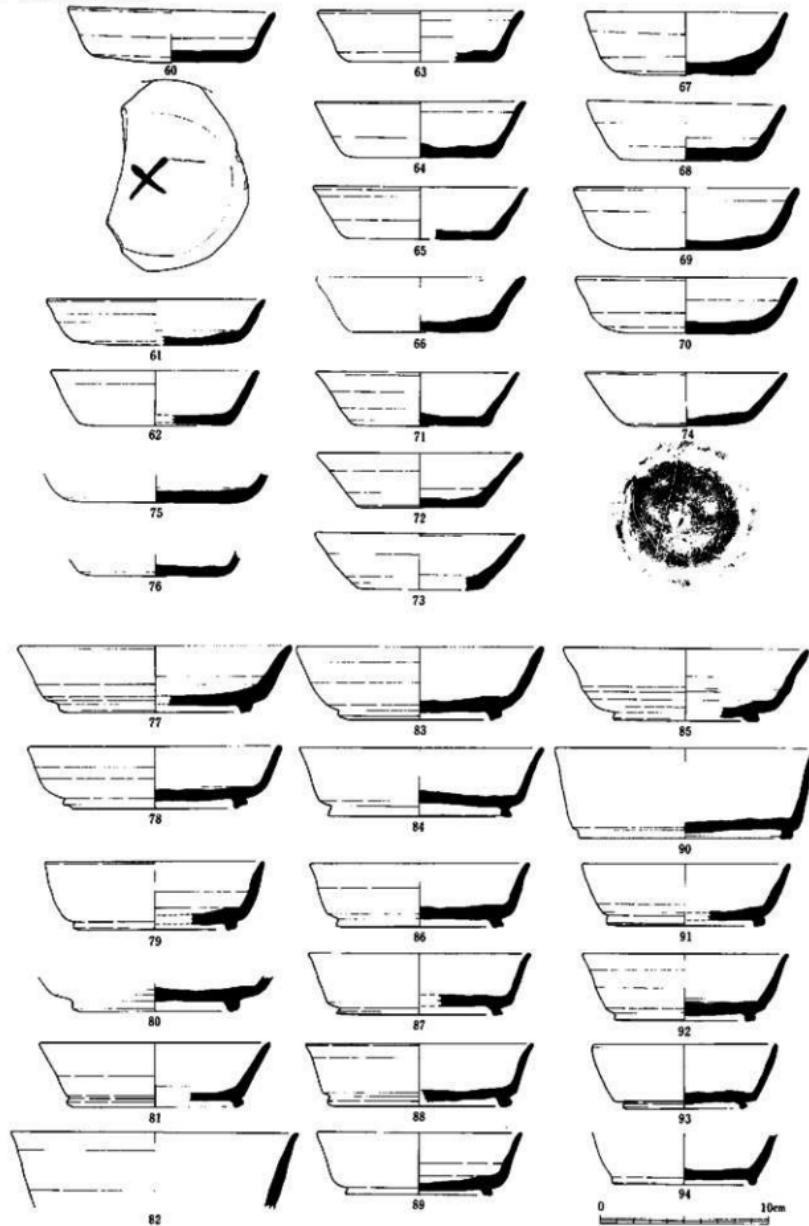
第40図 大溝出土遺物(1) (1/3)

3 出土遺物



第41図 大溝出土遺物(2) (1/3)

IV 第6次調査の概要



第42図 大溝出土遺物(3) (1/3)

タイプのそれとは異なり、偏平率も25%以上となっている。これが使用目的による差なのか、工人の手による違いなのか、あるいはもっと違う理由があるのかは分からぬが、ほぼ同時期にタイプを分類し得る無台坏が併存していたことは確かなようである。

42・44は底部からの立ち上がり部分に明瞭な角を持つタイプで、底部と体部の境がはっきりしている。41は口径13.0cm、器高3.5cmを測るもので、外面のみ体部中程でくびれ、外反するタイプである。底部外面が非常に平滑であり、使用痕と考えられる。

43は口径12.4cm、器高3.5cmを測るもので、焼成があまりよくなく、灰白色を呈するものである。降灰が内面にまで及んでおり、重ね焼きの際に一番上に重ねられたものであろう。49は口径11.5cm、器高3.5cmを測るものである。焼成は良好であるが、底面のみ降灰を受けておらず、灰色を呈する。53は口径11.6cm、器高3.6cmを測るものである。底部はへら切り後などで調整を施しているが、丸みをもたせて仕上げてある。色調は暗日の灰色を呈する。胎土は混和材としての砂粒の混入がほとんどなく、落雁状の質感があり、おそらく金沢の末吉窯跡群で作られたものであろう。

55・57・59は、8世紀後半特有の、小径で深いタイプのものである。57は口径10.2cm、器高4.0cmを測るものである。色調は暗灰色を呈する。へら切りの後などの底面に、へら記号がみられる。59は口径11.2cm、器高3.6cmを測るもので、底面にへら記号がみられる。

60～74は、8世紀末から9世紀にかけての無台坏である。特に71～74は口縁の外傾が顕著で、おそらく9世紀に位置付けられるものであろう。60は口径12.3cm、器高2.9cmを測るもので、黄灰色を呈し、焼成はあまり良くないが、底面には「X」の墨書きがみられる。67は口径11.8cm、器高3.8cmを測るもので、底部が段状に成型されて、体部と底部の境界がはっきりとしているタイプとなっている。

69は口径13.5cm、器高3.7cmを測るものである。70は口径13.3cm、器高3.4cmを測るものである。69と70はいずれも焼成はあまり良くなく黄灰色を呈する。胎土の中に海綿骨片を含んでおり、羽屋窯跡群産の可能性が高いが、高松窯跡群産の可能性も否定できない。いずれにせよこの2つの無台坏は、同じ产地で焼かれたものであろう。さらに見た印象からも、この2つはそっくりであり、同一の工人の手によるものではないだろうか。

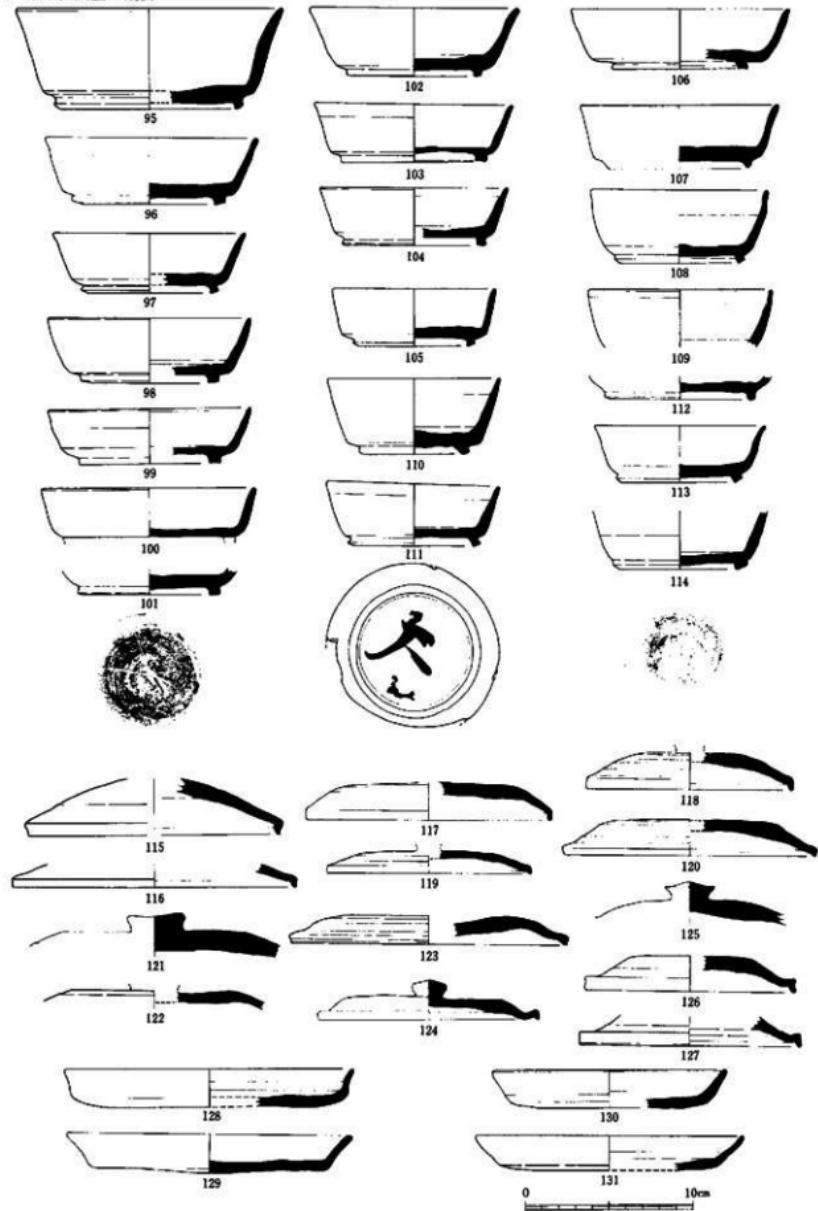
71は口径12.5cm、器高3.2cmを測るものである。底部から体部への立ち上がり部で、しっかりと角をもつ薄手のつくりのものである。73は口径13.6cm、器高3.4cmを測るものである。内外面とともに平滑で、使用の痕跡の可能性がある。74は口径11.8cm、器高3.2cmを測るもので、焼成が悪く黄灰色を呈する。底部内面にへら記号がみられる。

77～114までは須恵器の有台坏である。いずれも8世紀代に位置づけられるもので、9世紀代のものはないようである。81は口径13.7cm、器高3.9cmを測るものである。踏張るタイプの高台が、底面の外縁についている。85は口径14.5cm、器高4.3cmを測るもので、口縁の外傾が強いタイプである。外面の成型も粗雑で、凹凸が目だつ。高台は立ち上がりの屈曲部からかなり内側につけられている。胎土には1～3mm程度の小石が多く含まれる。最も新しく位置づけても、8世紀前半のものと考えられる。能登において、当該期の窯跡がいまだ把握できていない現段階では、はっきりとしたことは言えないが、鳥屋窯跡群産の製品とよく似ているようである。82・90・95は8世紀後半に位置づけられるもので、径の大きな深いタイプである。82が口径17.2cm、90が口径15.4cm、器高5.1cm、95が口径15.8cm、器高6.1cmをそれぞれ測る。80も口縁が欠損しており口径はわからぬものの、底径から見て、同じタイプのものであろう。91・92・93は比較的小径タイプのものである。91は口径12.3cm、器高3.7cm、92は口径12.0cm、器高4.0cm、93は口径10.8cm、器高3.9cmをそれぞれ測るものである。

100は底面に高台が剥離した痕跡が残っているものである。口径12.6cm、坏のみの器高は2.9cmを測る。底面にみとめられる高台剥離痕は、焼成段階以降での剥離とみられ、無台坏として使用されていた痕跡もうかがうことができる。

107は口径11.7cm、器高3.9cmを測るものである。高台が外側からへら状の工具で押さえられ、多角形に仕

IV 第6次調査の概要



第43図 大溝出土遺物(4) (1/3)

上がっている。

108~110は、小怪で、比較的深いつくりのものである。108は口径10.4cm、器高4.3cmを測るもので、体部は内わんしながら立ち上がる。109は底部欠損のため器高はわからないが、口径は10.8cmを測り、体部は108同様内わんしながら立ち上がるタイプである。110は口径10.4cm、器高4.5cmを測るもので、器壁は厚い。

これに対し、小怪で、比較的浅いつくりのものも存在している。105·111·113などがそれである。105は口径9.8cm、器高3.5cm、111は口径10.4cm、器高3.9cm、113は口径10.1cm、器高3.4cmをそれぞれ測る。

101·114には、底面にへら記号がみられるが、いずれも口縁部欠損のため、口径、器高はわからない。

111には底面に「大」の墨書きがみられる。

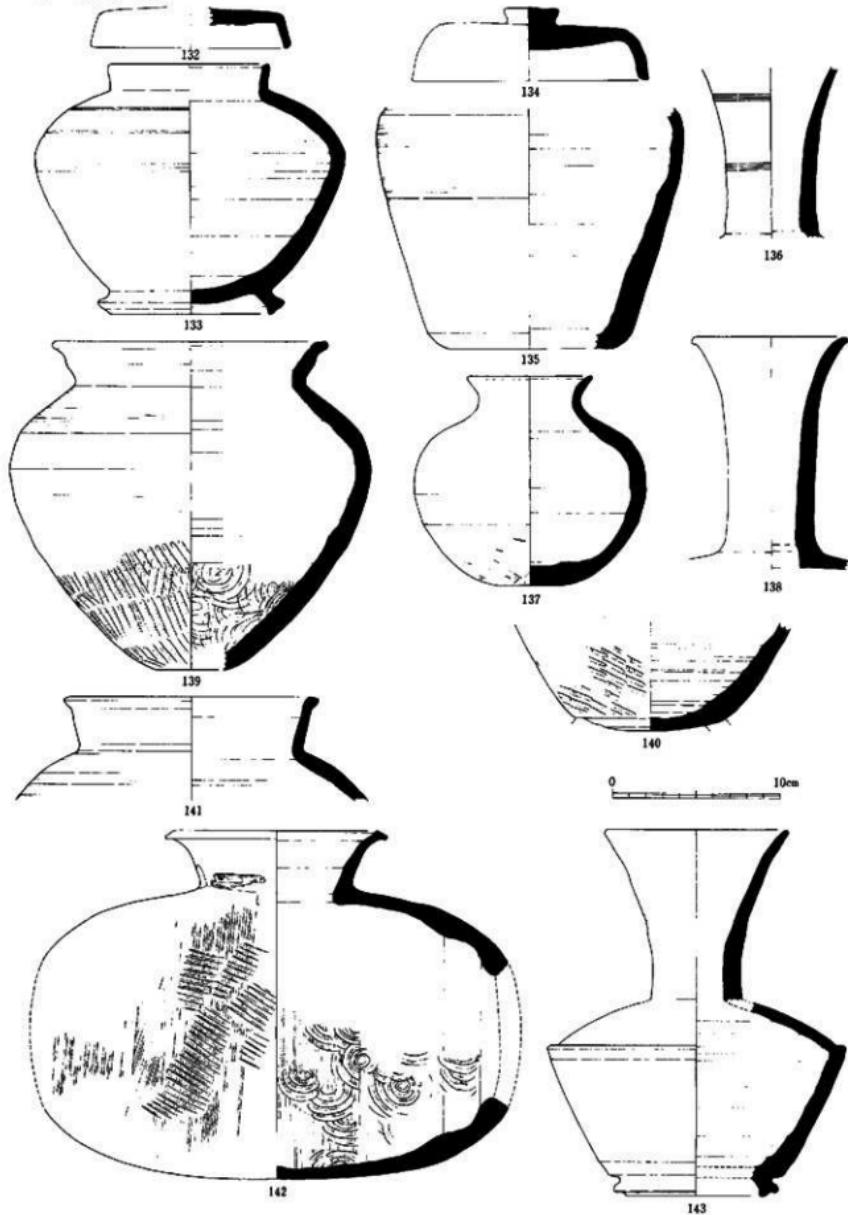
115~127は須恵器の坏蓋である。完形に復元されるものはほとんどない。115は傘状に丸みを帯びるものである。残りが悪いため、径が曖昧である。119は口径12.3cmを測る。つまみ部欠損のため器高はわからない。内面が平滑で、墨が付着していることから、転用鏡として使用されていたようである。121は非常に厚いつくりのもので、径3.4cmのつまみがつけられている。124は大溝出土の坏蓋の中では唯一完形に近いものである。径13.2cm、器高2.4cmを測り、径2.1cmの宝珠形のつまみがつけられている。

128~131は盤である。128と129は、径がそれぞれ17.2cmと17.0cmで、比較的大型である。これに対し130は口径13.8cmと小怪である。128は器高2.4cmを測る。底部から体部にかけては、ほぼ垂直に立ち上がり、体部の中位あたりから折れて外反するタイプである。内面は平滑で使用痕と考えられる。

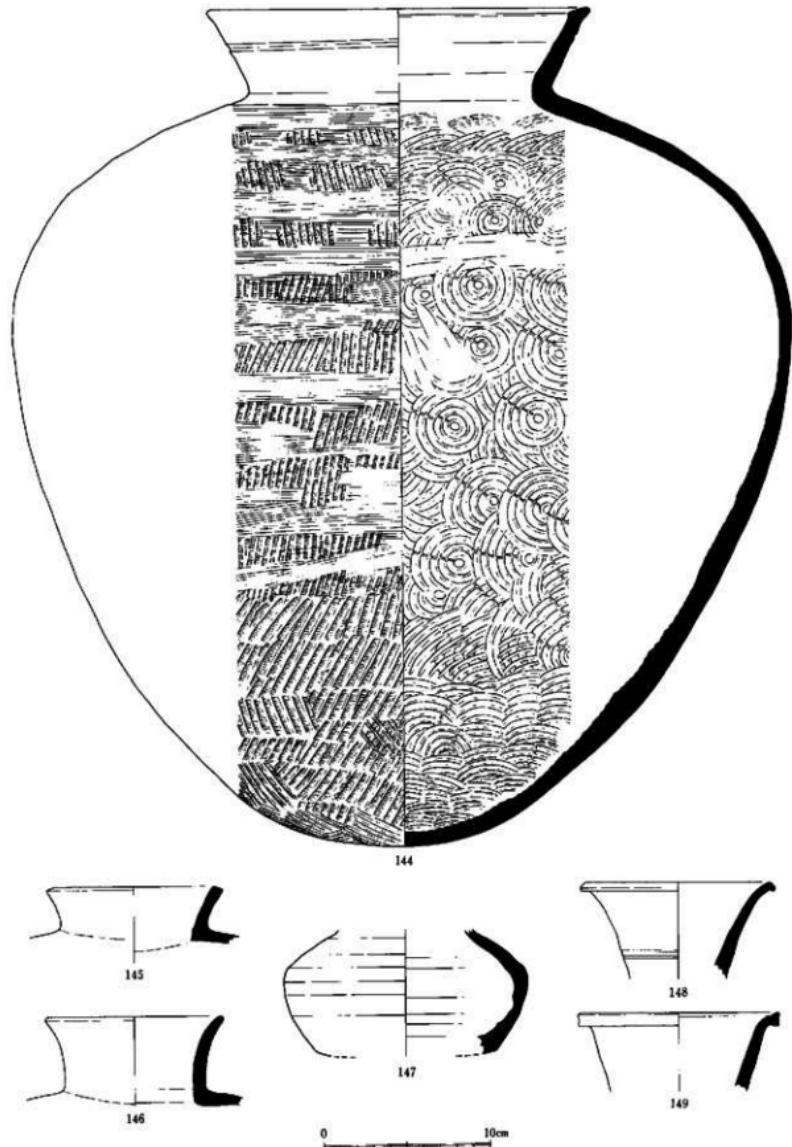
坏の出土数に比べ、坏蓋の出土数が極端に少ない。また盤の出土数も少ない傾向にある。言い替えれば、無台坪、有台坪の出土の割合が非常に高い、と言えるのではないだろうか。

113は口径9.5cm、器高22.1cm、胴部最大径18.5cmを測る短頸壺である。内外面ともに横なで仕上げている。肩部から胴部最大にかけて、二条が1単位の沈線を3箇所に巡らせてある。胎土の肉眼観察から、132の蓋と産地が同一であると考えられる。さらに133の口径と、132の径から見て、この二つはセットで使われていた可能性が高い。134は口径14.1cm、器高4.3cmを測り、天井部には径3.3cmのボタン形のつまみが付けられているものである。全体に厚手で、重厚なつくりである。天井部に繩掛けの跡がみられ、繩をかけたまま窓にいれて焼かれたことがうかがえる。135は壺の胴部のみの破片ではあるが、胴部の最大径は18.5cmに復元できるものである。高台はつかないタイプのようである。外面には自然釉がかなり流れている。137は小型の壺である。口径7.3cm、器高12.6cm、胴部最大径13.8cmを測る。全体に横なで仕上げているが、底部付近だけはへら状工具による削りが見られる。底部付近で一部歪みがみられる他、頸部から肩部にかけて降灰が著しい。胴部の最大径付近に、布で押さえた痕跡が残っている。おそらく横なので工程で使われたものであろう。139は口径16.3cm、器高19.8cm、胴部最大径21.8cmを測る短頸壺である。口縁部は横なで、体部上半部は内外面共にカキ目、体部下半部はたたき調整がそれぞれなされている。140は壺の底部付近のみの破片である。高台が削離した痕跡が残っている。底面に体部と同一の工具によるたたきの痕跡がみられ、高台は全面をたたきにより整形した後付けられたことがわかる。142は口径12.3cm、器高21.0cmを測る横瓶である。頸部にカーゼ状の布が付着している。きれいで口を覆い、布をたたんで縦状にしたもので巻き付けてあるように見える。残っている布の色は赤茶けているが、おそらく土中の水分を吸い、錆びたためであろう。本米ならばしかるべき所へ科学的分析を依頼すべきところだが、時間的にも予算的にも実施することができなかつた。143は長頸の瓶である。口径10.8cm、器高22.1cm、胴部最大径16.5cm、胴部高11.5cmを測る。ほぼ全体に横なのでの調整がなされている。焼成は良好で、明るい灰色を呈する。144は口径22.5cm、器高50.2cm、胴部最大径46.6cmを測る中型の甕である。口縁部の外面に一条の沈線が巡る。調整の観察で、製作過程のよく分かるものである。カキ目の後たたき調整で平底の甕を作り上げる(1次調整)。その後平底をたたき出して丸底の甕に仕上げる(2次調整)。その際に使われるたたき具と当て具は、共に1次調整と2次調整とでは原体が違うのが通例だが、この甕は当て具のみ同一の物を使用しているようである。底部付近には使用痕と思われる平滑な部分がみられる。145·146は共に横瓶の口縁部である。口径はそれぞれ9.4cm、10.2cmを測る。

IV 第6次調査の概要

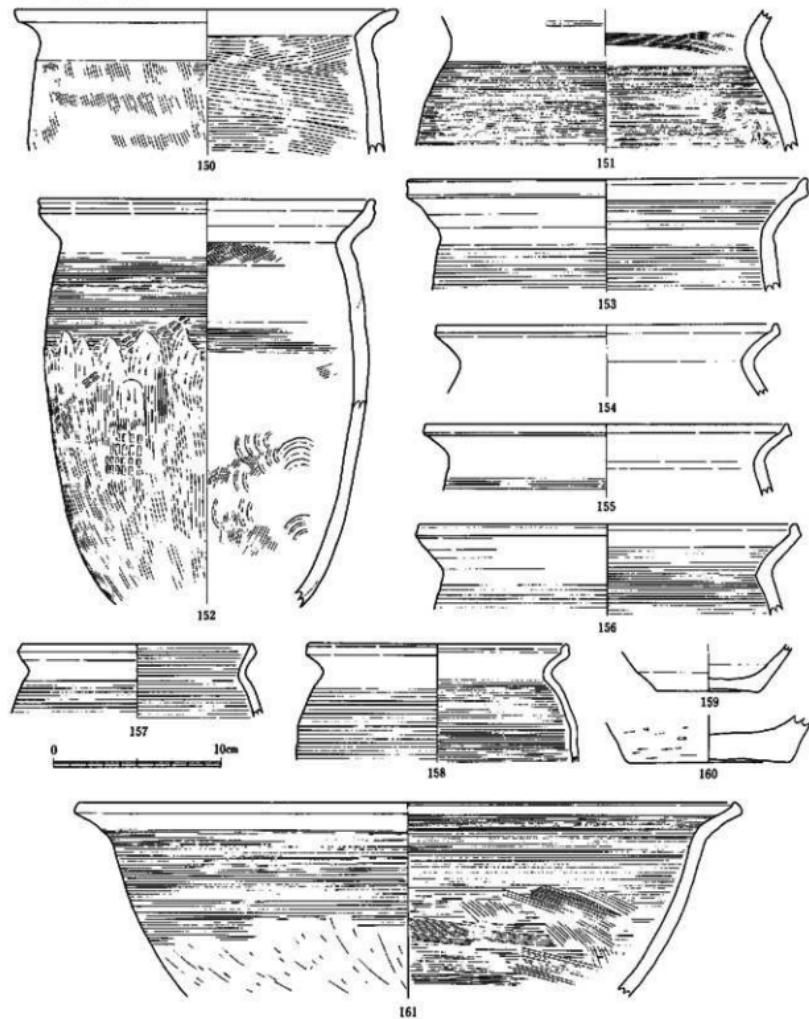


第44図 大溝出土遺物5) (1/3)

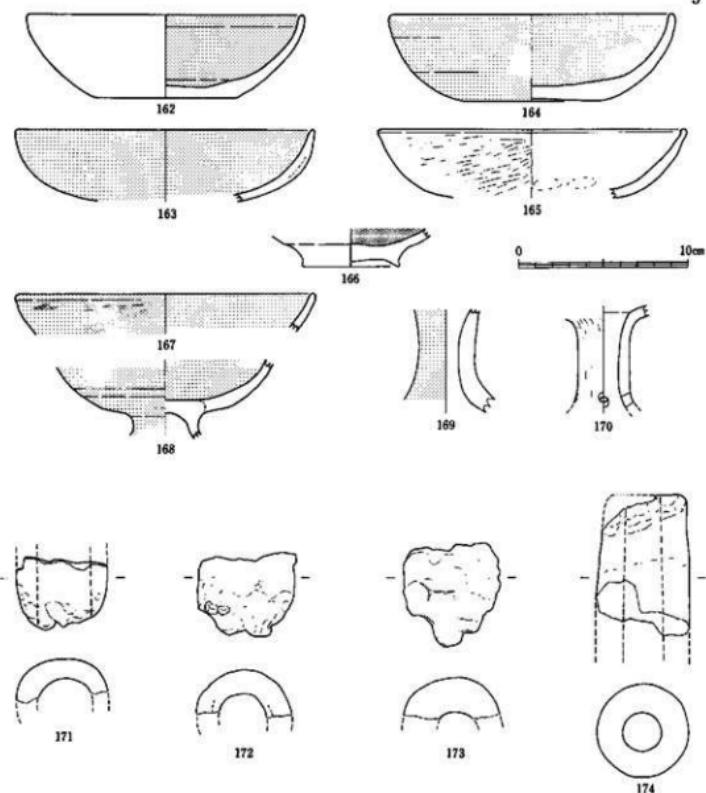


第45図 大溝出土遺物(6) (1/3)

IV 第6次調査の概要



第46図 大溝出土遺物(7) (1/3)



第47図 大湊出土遺物(8) (1/3)

IV 第6次調査の概要

150~156までは土師器の長胴甌である。150は口径22.8cmを測り、外反させながら単純におり曲げた厚めの口縁を持つタイプのものである。152は口径20.0cm、胴部最大径は19.4cmを測るものである。胴部の調整は、たたき・カキ目・削り・ハケの順番になされている。外面のたたき痕はハケによりほとんど消されている。口縁部は横なで調整が施されている。外面にはほぼ全面にすすぐ付着している。156は口径22.4cmを測るもので、口縁の端部を受け口状に内傾気味におり曲げたタイプである。157は口径13.6cmを測る小甌である。頸部から直立気味に立つ口縁がつけられている。口縁の端部は上方につまみ上げられるタイプのものである。158は口径15.5cmを測る小甌である。口縁の端部は上方に折り曲げられるタイプのものである。161は口径39.5cmを測る鍋である。口縁部は緩く外側に曲げられるタイプである。外面はカキ目の後削り、内面はカキ目の後ハケの調整がなされている。

162~166は土師器の碗である。162は口径16.3cm、底径8.5cm、器高5.0cmを測るもので、内面には赤彩が施されている。163は底部が欠損しているため器高は分らないが、口径17.6cmを測るものである。内外面共に赤彩が施されている。164は口径16.5cm、底径8.0cm、器高5.2cmを測るものである。これも内外面共に赤彩が施されている。166は有台椀の底部である。底径は5.7cmを測り、内面は黒色に塗られている。

167~170は高坏である。168は坏部内外面と、脚部外面に赤彩が施されている。170は脚部のみの破片で、四方に透かし孔が開けられている。171~174はふいごの羽口である。

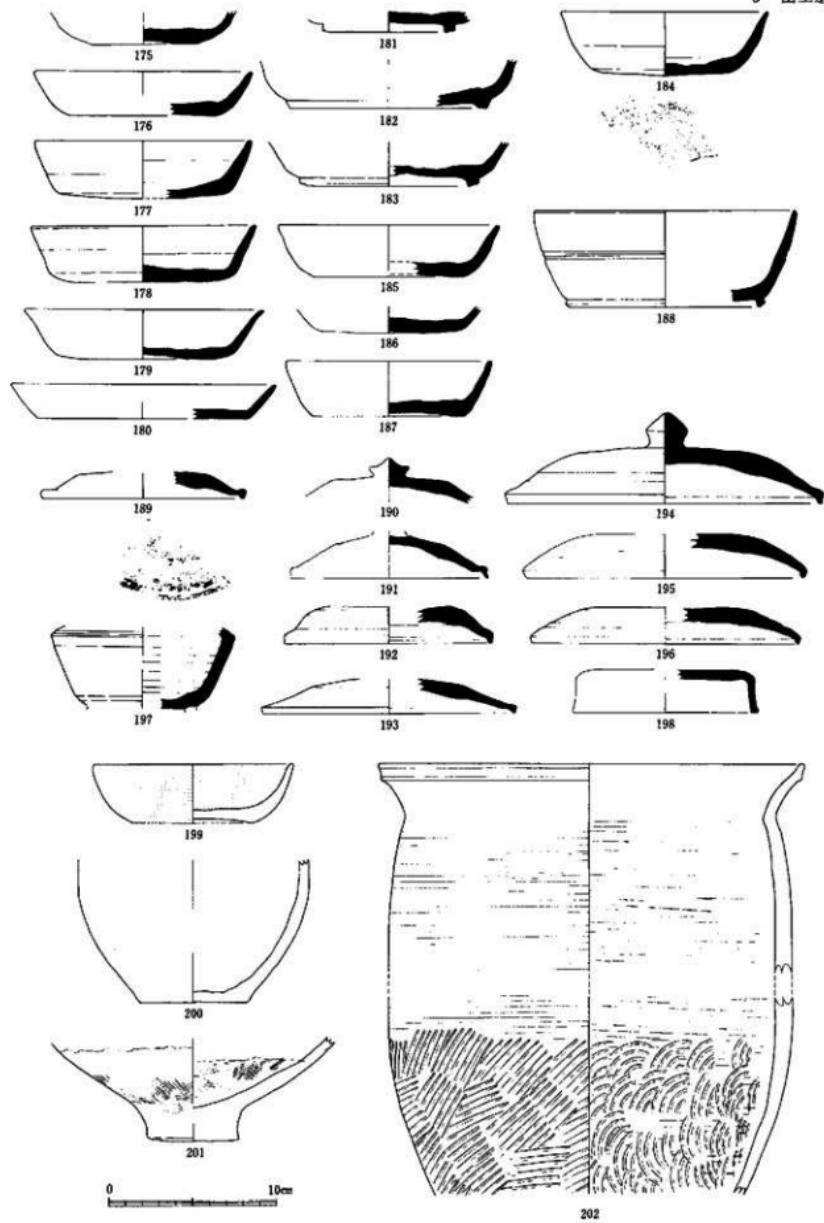
2 包含層出土遺物

175~202は包含層から出土した遺物である。175~179と181~188は須恵器の坏である。176は口径12.3cm、器高2.7cmを測るもので、偏平タイプのものである。178は口径13.4cm、器高3.4cmを測る。焼成は甘く、黄灰白色を呈する。底部がかなり厚く作られているものである。179は口径14.2cm、器高3.0cmを測る。口縁の端部が緩やかに外反し、広がっている。184は口径12.2cm、器高4.9cmを測るものである。焼成は不良で色調は黄灰白色を呈する。底面にへら記号がみられる。187は口径12.2cm、器高3.4cmを測る。全体に少し厚いつくりになっている。188は口径15.4cm、器高5.8cmに復元されるものである。色調は明灰色を呈する。外面に2条の沈線を巡らせているものである。

189~196は須恵器の坏蓋である。189は口径12.0cmの小型品で、内面にへら記号を持ち、内外面ともに横なで調整で仕上げられている。191も口径が11.8cmと小型のものである。器表面全体に陥れ灰を受けており、荒れている。口縁の返りが比較的高いものである。内面は平滑で、使用痕とみられる。194は口径18.6cm、器高5.5cm、つまみの直径2.5cmを測る大型品である。内面はきれいになじて仕上げてある。胎土は混和材が少なく、落雁状の質感がある。浅川窯跡群の特徴的な胎土のようである。195~196も同じ胎土であり、同窯跡群産のものであろう。口径は195が16.4cm、196が15.7cmを測る。この2つは194に比べると、天井部の削りの範囲が大きいものである。195の内面は平滑で、使用痕とみられる。198は短頸甌の蓋である。つまみ付近欠損のため器高は不明。口径は10.9cmを測り、色調は灰白色を呈する。胎土中に海綿骨片がみられることから、羽咋窯跡群産と考えられる。

199は土師器の坏である。口径11.7cm、底径7.0cm、器高3.5cmを測り、内外面ともに赤彩が施されている。底面から体部への立ち上がり部に、明瞭な隙をもつタイプのものである。201は壺の底部である。内外面ともハケ調整をなで消しているが、この底部付近にはハケの調整痕が明瞭に残っている。外面は底部を削り出し、高台のように仕上げている。削り出された底部の径は、5.4cmを測る。おそらくこれまで見てきた須恵器や土師器よりも古手のものであろう。202は口径25.0cmを測る長胴甌である。くびれ部からあまり広がらない、比較的長めの口縁がつけられている。88年度調査のピット6・ピット35から出土した土器片と、接合しているものである。

3 出土遺物



第48図 遺構外遺物 (1/3)

V 若干の考察

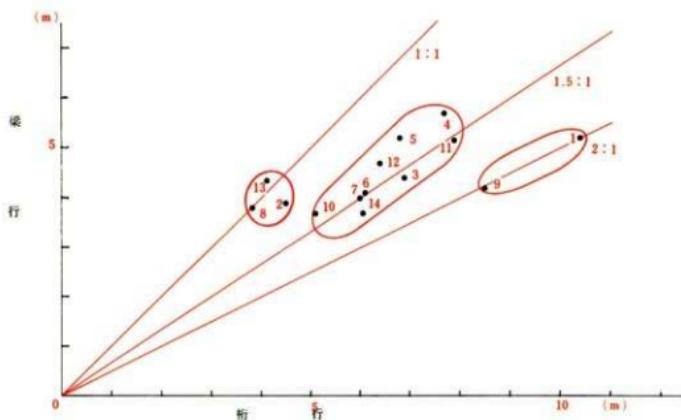
1. 挖立柱建物跡

2年度にわたる発掘調査で、検出された掘立柱建物跡は16棟（昭和63年度が10棟、平成元年度が6棟）であった。この中には昭和63年度の調査で検出された2間×6間の庇付き大型建物も含まれている。これらの掘立柱建物跡について考察してみたい。

第2表 挖立柱建物跡一覧

	長軸方向	桁 行	梁 間	面 積	建 坪	
昭和63年度						
1	第1号掘立柱建物跡	N-46'-W	6間 1,040cm	2間 520cm	54.0m ²	16.4坪
2	第2号掘立柱建物跡	N-45'-E	1間 450cm	2間 390cm	17.0m ²	5.4坪
3	第3号掘立柱建物跡	N-56'-E	3間 690cm	2間 440cm	30.0m ²	9.2坪
4	第4号掘立柱建物跡	N-49'-E	4間 770cm	— 570cm	43.0m ²	13.3坪
5	第5号掘立柱建物跡	N-12'-W	3間 680cm	2間 520cm	35.0m ²	10.7坪
6	第6号掘立柱建物跡	N-41'-W	3間 610cm	2間 410cm	25.0m ²	7.6坪
7	第7号掘立柱建物跡	N-38'-W	3間 600cm	2間 400cm	24.0m ²	7.3坪
8	第8号掘立柱建物跡	N-38'-W	2間 380cm	2間 380cm	14.0m ²	4.4坪
9	第9号掘立柱建物跡	N-46'-W	4間 850cm	3間 420cm	35.0m ²	10.8坪
10	第10号掘立柱建物跡	N-34'-W	3間 510cm	2間 370cm	18.0m ²	5.7坪
平成元年度						
11	第1号掘立柱建物跡	N-16'-W	4間 790cm	2間 515cm	40.0m ²	12.5坪
12	第2号掘立柱建物跡	N-16'-W	3間 640cm	3間 470cm	30.0m ²	9.3坪
13	第3号掘立柱建物跡	N-14'-W	2間 410cm	2間 435cm	17.0m ²	5.5坪
14	第4号掘立柱建物跡	E-16'-N	4間 605cm	1間 370cm	22.0m ²	6.9坪
15	第5号掘立柱建物跡	N-20'-W	2間以上	3間 480cm	—	—
16	第6号掘立柱建物跡	N-20'-W	2間以上	2間 450cm	—	—

この表をもとに、桁行、梁間の関係をグラフにしたもののが第49図である。桁と梁の比率には、3つの分布が認められた。すなわち、桁と梁の比率が1:1になるもの（2・8・13）、1.5:1になるもの（3・4・5・6・7・10・11・12・14）、2:1になるもの（1・9）である。



第49図 掘立柱建物平面プラン

主軸の方向に注目して同時存在の可能性を探ってみると、(1・2・9) (3・10) (4・6) (7・8) (11・12) (15・16)となる。いずれの掘立柱建物跡も、その柱穴からは時期の確定できるような遺物の出土はみられないため、前後関係を明確にすることはできないが、堅穴住居址よりも後出しているようである。

2. 須恵器の流通

法仏遺跡は北加賀地域における消費遺跡の一つである。ここでは発掘調査により出土した須恵器を、生産地での動きを絡めて検討してみる。今回は時間的都合にもより、平成元年度の調査で出土したものうち、比較的残りのよかつた164点について実見し観察を行った。

今回の発掘調査で出土した遺物は、そのほとんどが大溝から検出されたものである。実見し観察した須恵器のほとんどもこの大溝からの出土であり、建物や個別の遺構の時期と直接関わってくるものではないが、集落そのものの存続期間を知る上で有益な遺物群であると考える。

まず、須恵器を肉眼観察により生産地別に分類してみる。あくまで肉眼での観察であり、絶対的な分類ではないが、次の基準によって分類した。

- A 南加賀（小松）窯跡群……混和材としての砂粒は均一で、量が多い。表面に砂が浮きだし、コンクリート状のざらついた印象を受ける。鉄分の融けた黒色の吹き出しが見えるものがある。
- B 能美（辰口）窯跡群……混和材としての砂粒はほぼ見ることができないが、希に細かい長石片の混入が認められる。表面は平滑で、割れ口も鋭いものが多く、粘土が固くしまったカッタリした印象を受ける。粘土を練った際のしま模様が見えるものもある。
- C 金沢（末）窯跡群……混和材としての砂粒はほぼ見ることができない。表地となっている粘土自体が粗く、落雁状の質感がある。全体に暗い青灰色を呈するものが多い。
- D 押水・高松窯跡群……大粒で角張った石英・長石片が目立ち、やや粗雑な印象を受ける。焼きの良いものでは石ハゼを起こしているものがある。
- E 羽昨窯跡群……………押水・高松窯跡群のものと受ける印象は似ているが、胎土中に海綿骨片を多く含んでいる。
- F 島屋窯跡群……………大粒で角張った石英・長石片が多量に含まれている。全体に暗い青灰色を呈するものが多い。

観察の結果を時期別に百分比でグラフに表したもののが、第3表である。参考としてあるグラフは、実見はしていないが上記の基準を基に、実測者が観察した146点を含んだ合計310点についてのグラフである。実見しても大きな差はないと考える。

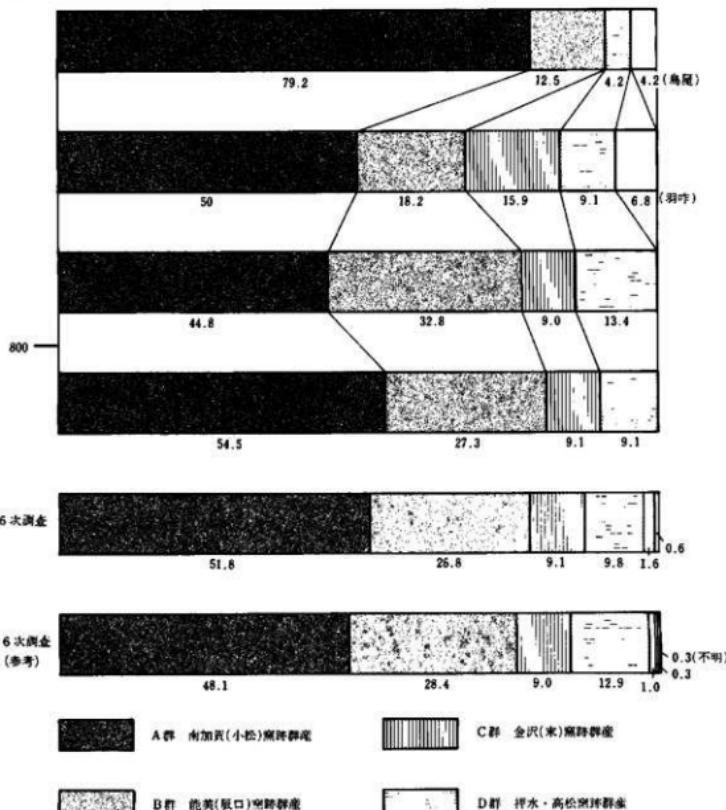
一見してわかるとおり、A群とした南加賀（小松）窯跡群のものが突出して多いことがわかる。8世紀の前半では約8割をA群が占める。8世紀の中頃以降にあっても、約半数がこのA群で占められる。また、B群の能美（辰口）窯跡群のものは動きも注目される。8世紀の前半では1割強にしか過ぎなかったものが、その後の時期には増加し2割から3割を占めるようになっている。これに対しC群の金沢（末）窯跡群、D群の押水・高松窯跡群のものは、各時期を通して定量は入っているが、目立って増えたり、減ったりといった動きはないようである。これはどの時期をとっても多少の差はあるが同様の傾向といえるだろう。この他E群の羽昨窯跡群、F群の島屋窯跡群のものはほんの数点である。羽昨窯跡群の須恵器は、近接する北安田北遺跡にも持ち込まれている。むしろ島屋窯跡群と考えられるものが出土した点は注目に値することであろう。

ここで生産地の動向を見てみたい。南加賀窯跡群は、6世紀の前半で操業が開始されたとされる。8世紀の前半に窯場を一層拡大して第1次の隆盛期を迎える。しかしその後は衰退傾向を見せ、生産量も低下する。

能美窯跡群は、7世紀中頃の成立とみられている。8世紀の中頃に、窯場を北から南へ移し、8世紀の後半に隆盛期を迎える。9世紀の初頭まで操業を続けていたとみられている。南加賀窯跡群の衰退期と、能美窯跡群の隆盛期は、時期的に一致しており、両者の盛衰は相関関係にあったとされる。

V 若干の考察

700 —



第3表 須恵器の生産地とその時期

金沢窯跡群は、8世紀の中頃から生産を始め、9世紀の初めまで操業していたとされる。8世紀の後半に全盛期を迎えるが、窯跡群自体の規模は他の窯跡群に比べると大きくないうようである。

押水・高松窯跡群は、7世紀初頭から10世紀初頭まで生産を続けた窯跡群である。7世紀の末から8世紀の前半代にかけて第一次の隆盛期を迎える。8世紀の中頃に窯場を北から南に移し、9世紀の初頭から中頃にかけて第二次の隆盛期を迎える。ここでも窯場を移す時期と第二次の隆盛期の時期が、金沢窯跡群の盛衰と連動しているかのように一致している。

羽咋窯跡群は、5世紀の末から操業を開始したとみられている。8世紀の中頃には衰退し、その後は単発的な生産が行われたとされている。隆盛期は7世紀代にあるとみられている。

鳥屋窯跡群は、6世紀の前半代に生産を開始し、9世紀の末もしくは10世紀の初めにかけての時期まで操業していたとみられている。7世紀末から8世紀の初頭にかけて隆盛期を迎える。8世紀の後半には窯場が東から西

へ移動している。

この各窯跡群の動向を、法仏遺跡出土の須恵器と対比させてみる。

8世紀前半

窯場を拡大し、第一次の隆盛期を迎えた南加賀窯跡群。この時期、同窯跡群の遺物が8割にも達していることが、これを消費地の法仏集落は如実に表現しているといえるだろう。この他、7世紀代にすでに成立している能美窯跡群と押水・高松窯跡群、それに鳥屋窯跡群で生産されたものが見受けられる。鳥屋窯跡群産の須恵器が、この加賀平野においても見受けられるということは、この時期に隆盛期を迎えていたことや、生産地からの距離が物語っているのではないだろうか。これに対して同時期、第一次隆盛期を迎えていた押水・高松窯跡群産の須恵器が少ない傾向にあるのは、この法仏遺跡を主な市場とはしていなかったためではないだろうか。

8世紀中頃

南加賀窯跡群の生産量が低下し始め、衰退期に入る。これを受けて能美窯跡群は窯場を北から南へ移し、増産体制に入る。法仏遺跡でもこの動向を受けて、南加賀窯跡群の須恵器が割にまで落ち込む。これに対し能美窯跡群産のものは2割へと増えている。このころ生産を開始した金沢窯跡群。同窯跡群で生産されたものが、いきなり能美窯跡群と近い割合を占めている。さらに衰退期に入っている羽咋窯跡群産のものが散点見られる。この時期は、いわば寄せ集め的な様相を示しているといえ、南加賀窯跡群の生産量低下により、必要量の確保が難しくなっている状況を反映しているのではないだろうか。

8世紀後半

南加賀窯跡群の衰退が進み、法仏遺跡ではついに5割を切るところまで落ち込んだ。これに対し、能美窯跡群は隆盛期を迎、3割強を占めるようになった。金沢窯跡群と押水・高松窯跡群で生産されたものは、どちらも1割程度の割合であるが、一定量の供給があるようである。

9世紀代

法仏遺跡の中心となる時代を過ぎ、須恵器の出土数も少なくなっている。南加賀窯跡群産のものが5割強にまで回復しているが、8世紀の後半に比べれば遺物量が六分の一程度に落ち込んでおり、絶対量でみれば決して多くはない。能美窯跡群はこの時期に衰退期に入り、量も落ちている。

合計のグラフでは、南加賀窯跡群と能美窯跡群とで、法仏集落で使われた須恵器の約8割までを供給していることがわかる。法仏遺跡は、この二つの窯跡群を須恵器の主な供給源としており、その影響を直接的に受けていることがわかる。

おわりに

今回の発掘調査は、石川県立埋蔵文化財センターと松任市教育委員会とが調査区を分けて実施した。当センターの調査区で検出された遺構群は、遺物の出土量、遺構の時期などから、ほぼ8世紀の第3四半期から第4四半期にかけてを中心としたものであると推定される。

法仏遺跡の集落域は未だはっきりとはしていない。おそらく今回検出された大溝を挟んで、北と南では様相が少し違うのではないだろうか。その辺りのことを含めて、法仏遺跡の全体像は、松任市教育委員会の調査整理報告で明らかにされるだろう。

なお、最後になったが、本稿を記すにあたって、北野博司、木立雅朗、川畠誠、木田清の諸氏より様々な御助言・御指導をいただいたが、筆者の未熟さのため十分に活かしきれなかったことを心よりお詫びしたい。

V 若干の考察

参考文献

- 吉岡康暢編『加賀二浦遺跡の研究』石川県・松任市教育委員会 1967 年
望月精司「加賀国の麻路跡」「北陸の古代土器研究の現状と課題」石川考古学研究会・北陸古代土器研究会 1988 年
折戸瑞幸・木立恒朗「能登地域の須恵器生産」「北陸の古代土器研究の現状と課題」石川考古学研究会・北陸古代土器研究会 1988 年
木立恒朗「竹生野遺跡出土須恵器について」「竹生野遺跡」石川県立埋蔵文化財センター 1988 年
前田清彦「松任市北安田北遺跡II」松任市教育委員会 1990 年
西野秀和「松任市北安田北遺跡III」石川県立埋蔵文化財センター 1990 年
出越茂和・橋正勝「金沢市千木ヤシキグ遺跡」金沢市教育委員会 1987 年
出越茂和「金沢市千木ヤシキグ遺跡II」金沢市教育委員会 1991 年

第5次調査区全景
(北東から)同上
(南から)同上
(北東から)

住居社群調査風景

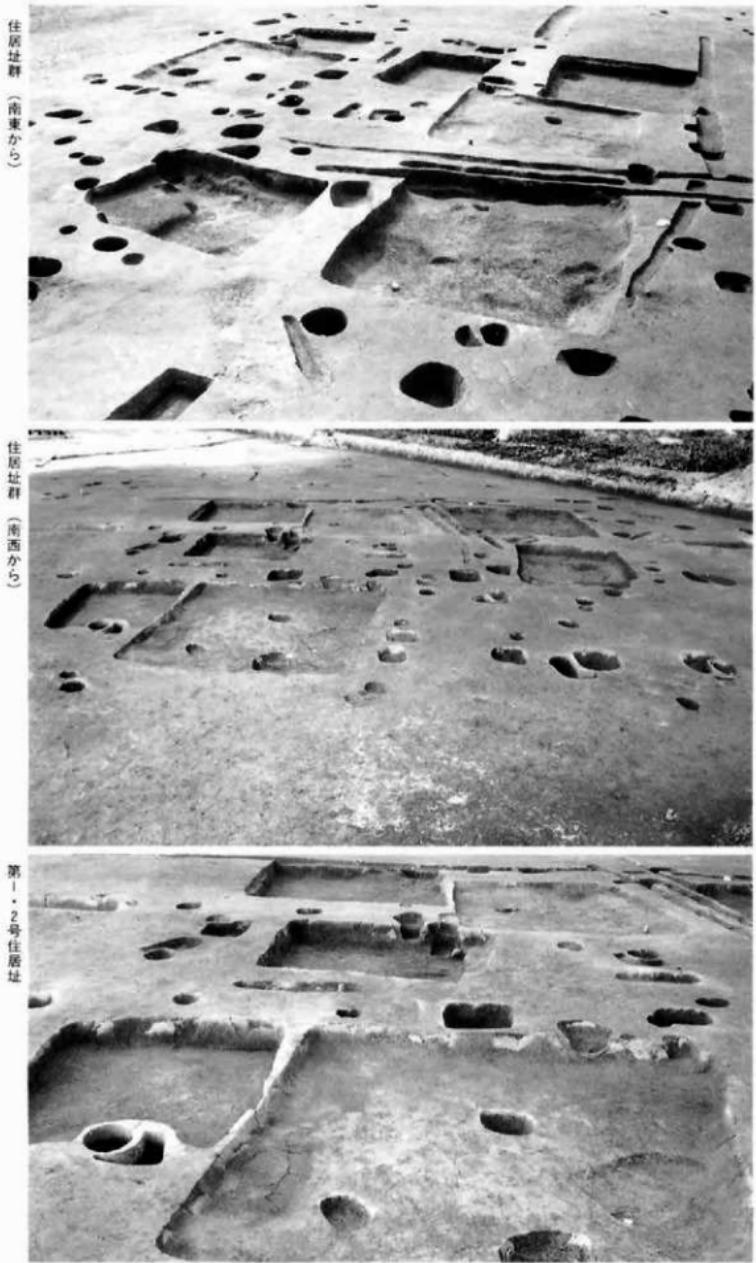


据立柱建物跡調査風景



住居社群調査風景



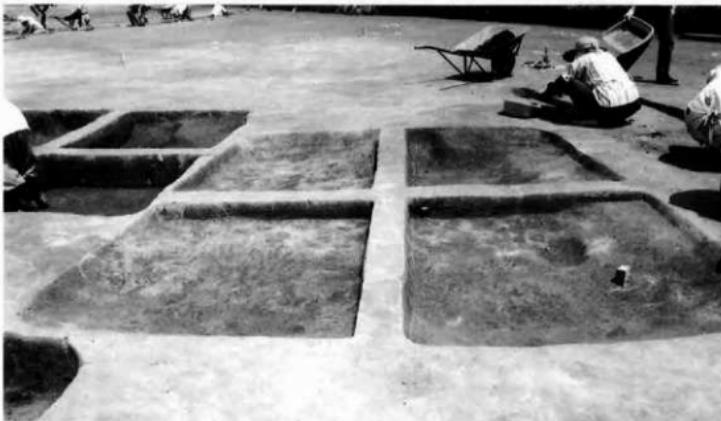


第一・2号住居址

第一・2号住居址



第6号住居址断面



第5号住居址



図版4

第7号住居址断面



第7号住居址断面



第7号住居址



圖版6



第3号住居址断面

第3号住居址



住居址調査状況



第 5 号住居址



第 8 号獨立柱建築跡



第 8 号獨立柱建築跡



第一～4号掘立柱建物跡



第一号掘立柱建物跡

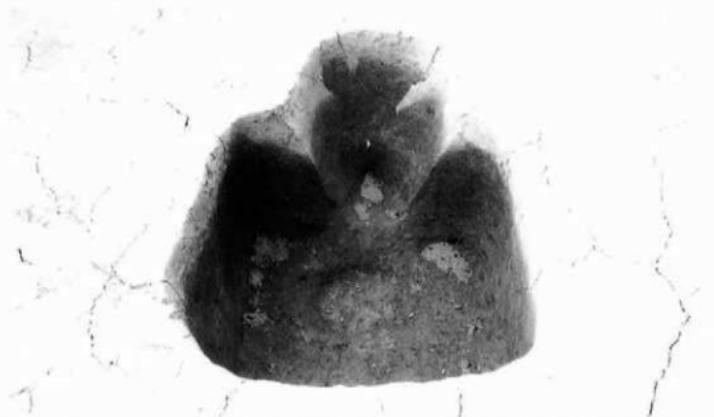


同上





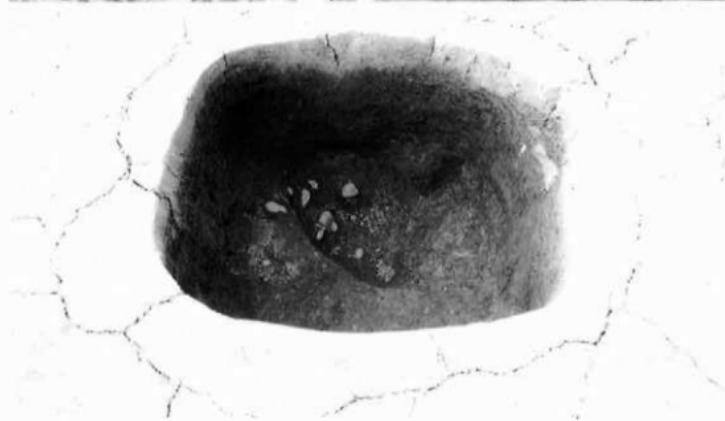
圖版
10



柱穴
7



柱穴
8



柱穴
4

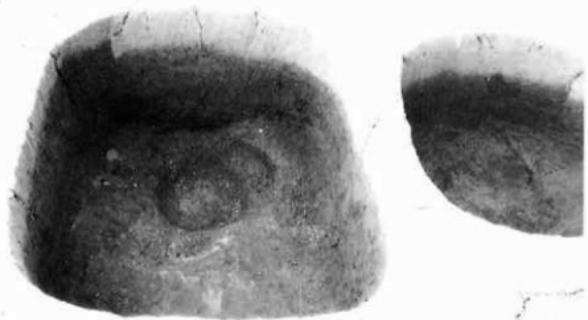
柱穴 10



柱穴 6



柱穴 3





第4号溝と周辺



第6号溝と周辺



第2・3号溝と周辺

第6号溝の発堀



第8号溝の発堀



第15号溝の発堀

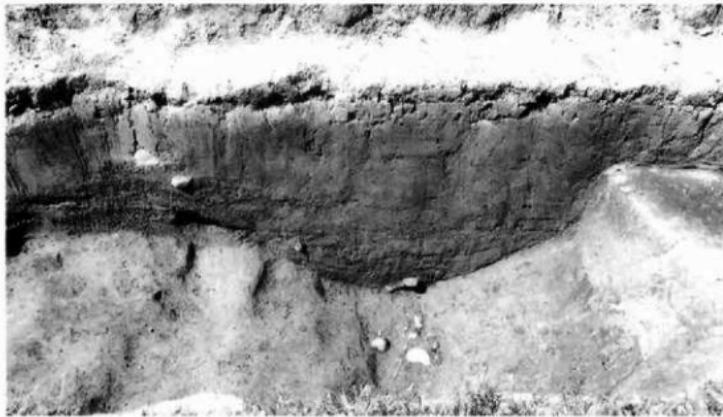




南端トレンチ
(東から)



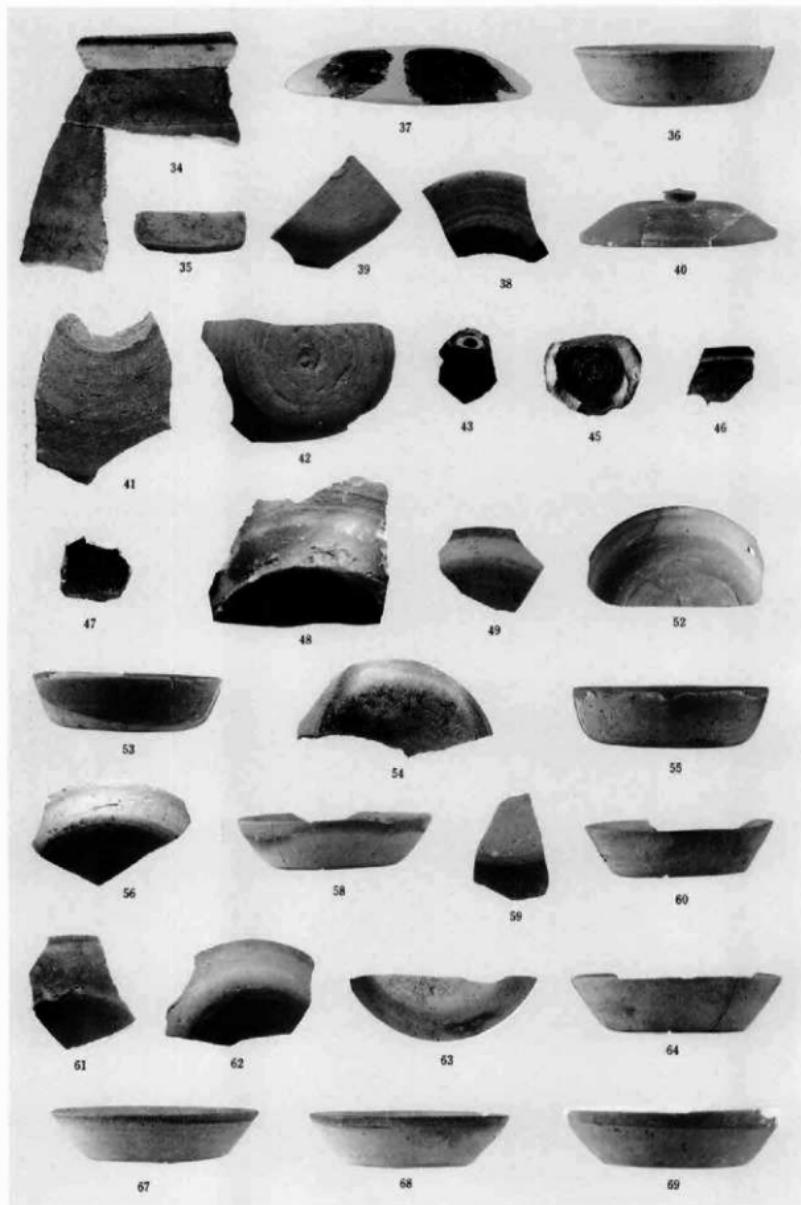
南端トレンチ
(西から)



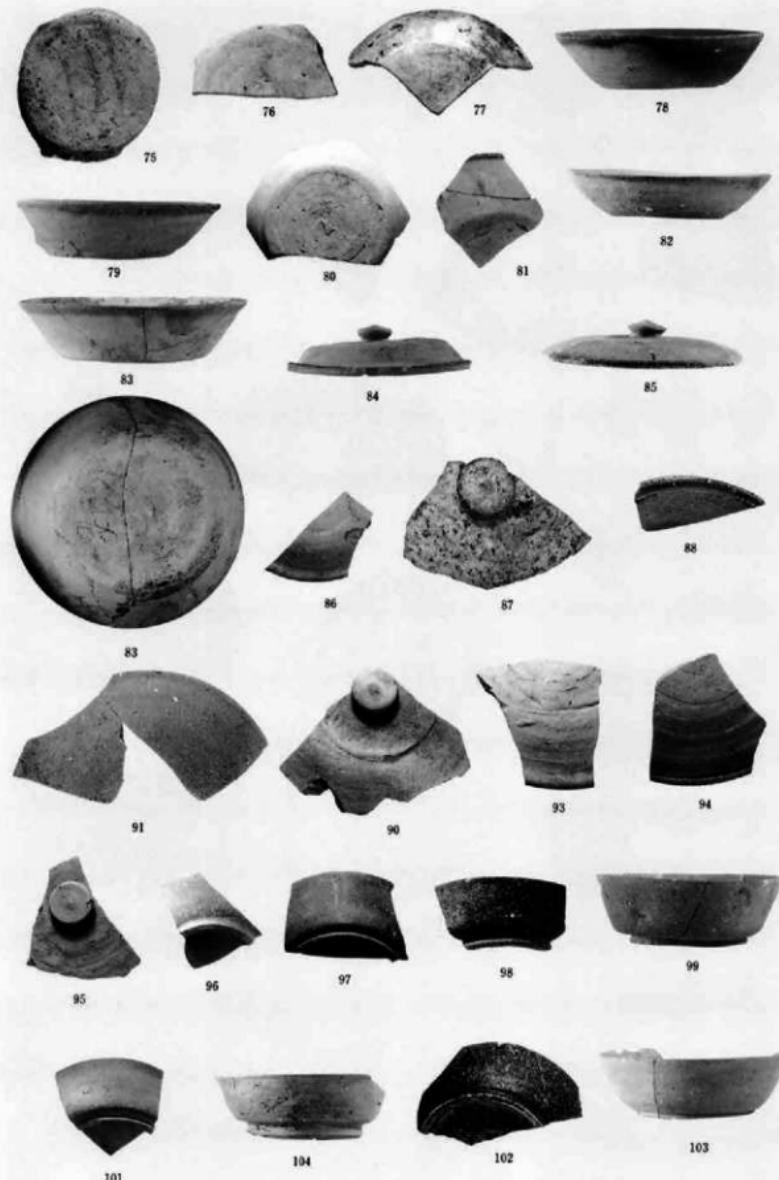
大溝検出状況



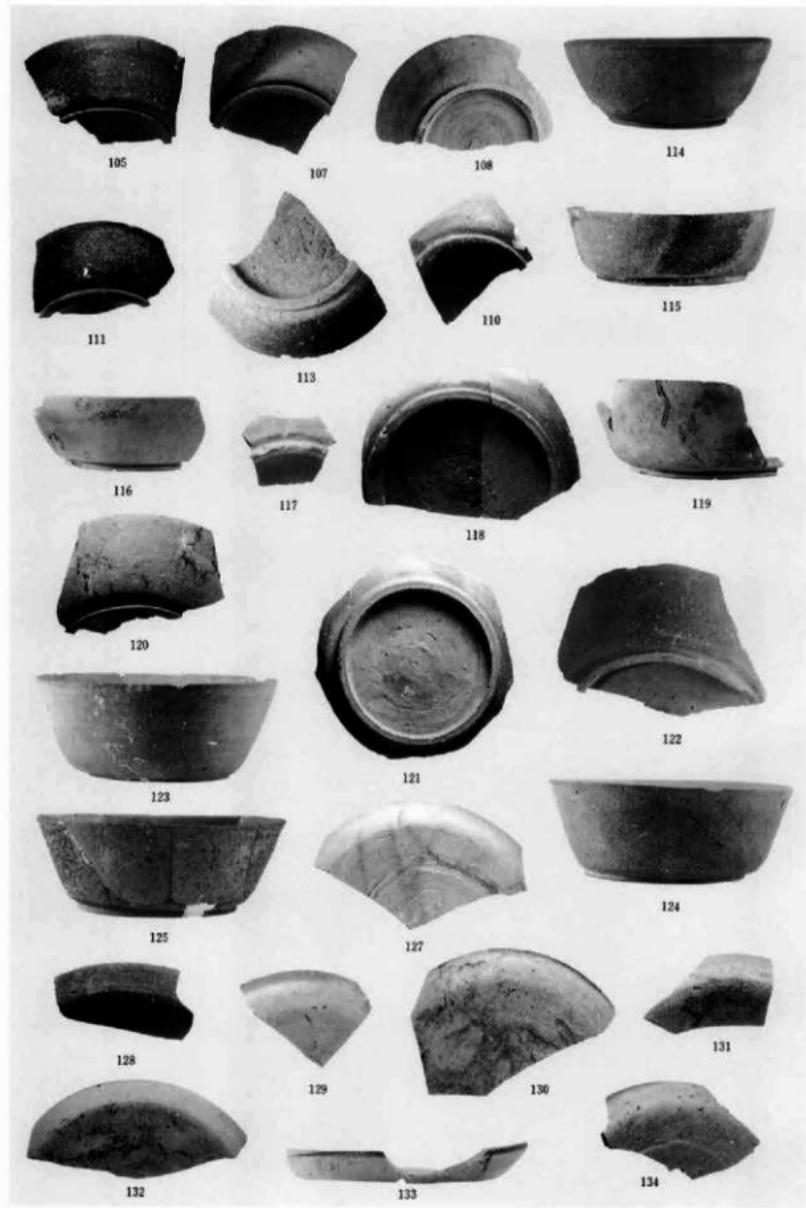
出土遺物(1) (1-33)



出土遺物(2) (34~69)



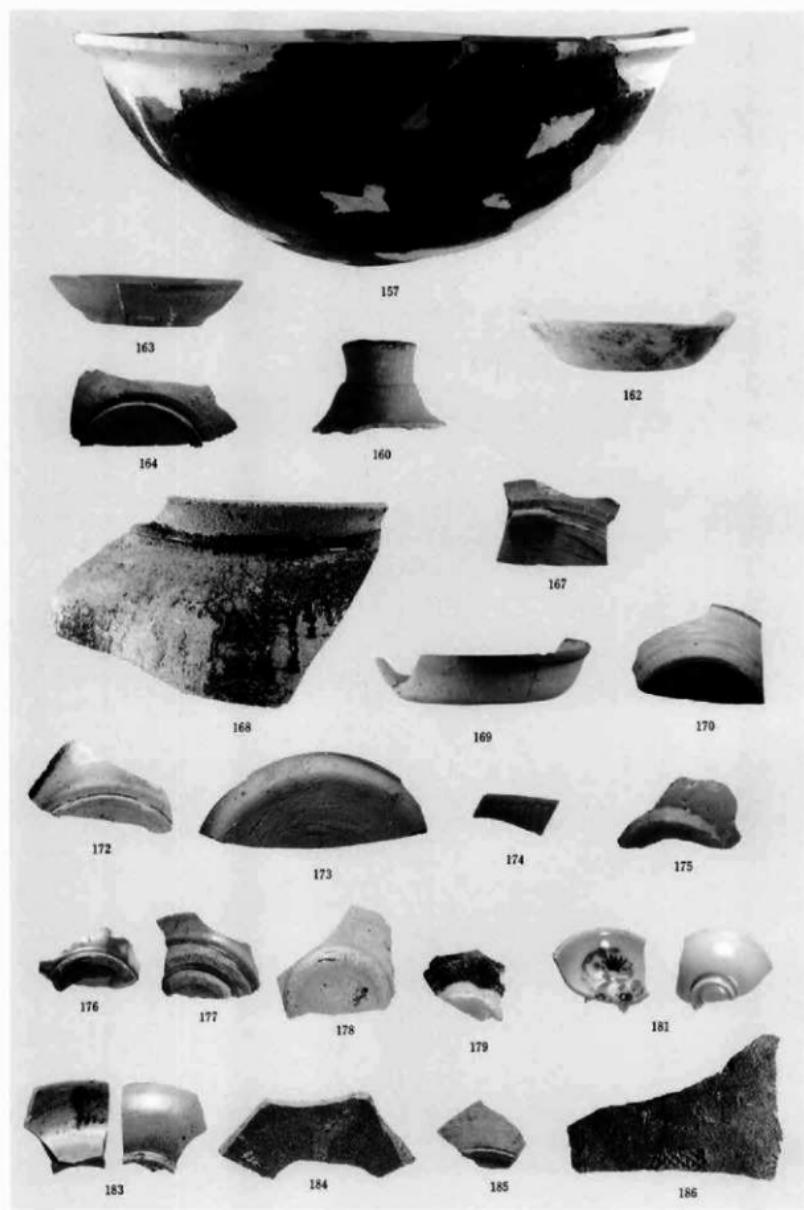
出土遺物(3) (75~103)



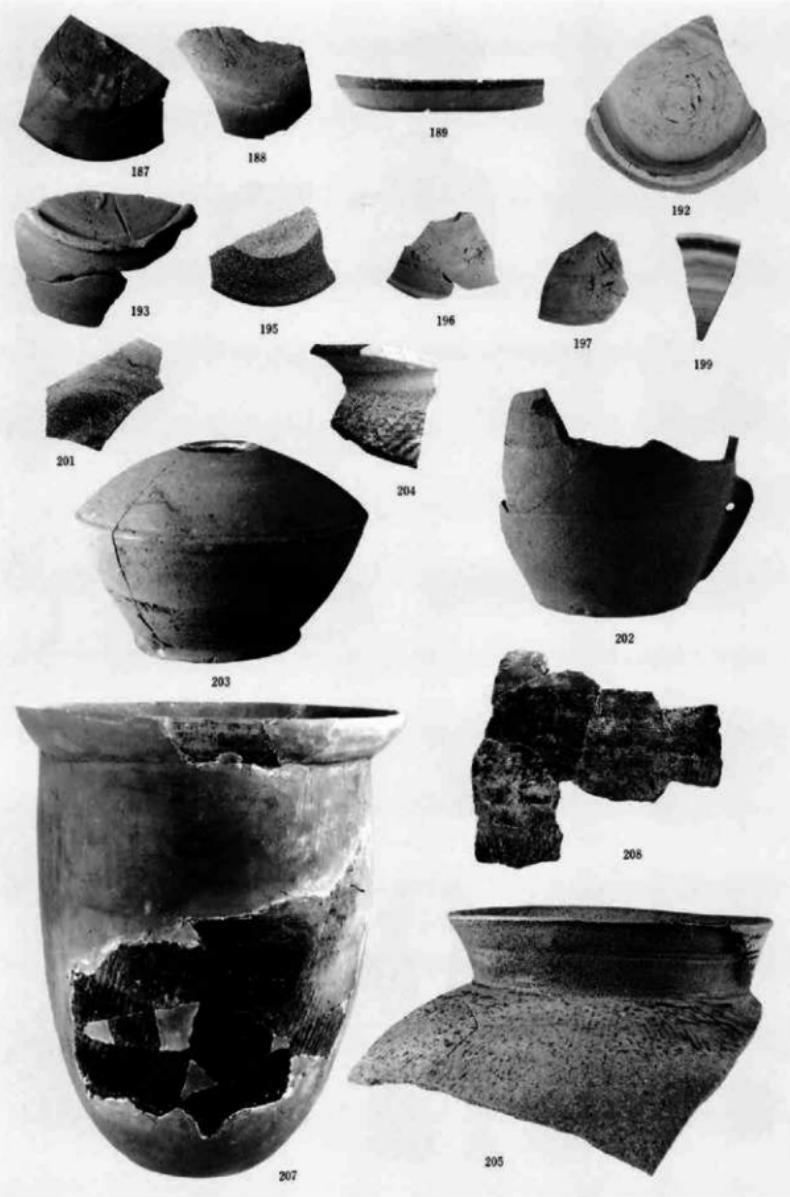
出土遺物(4) (105—134)



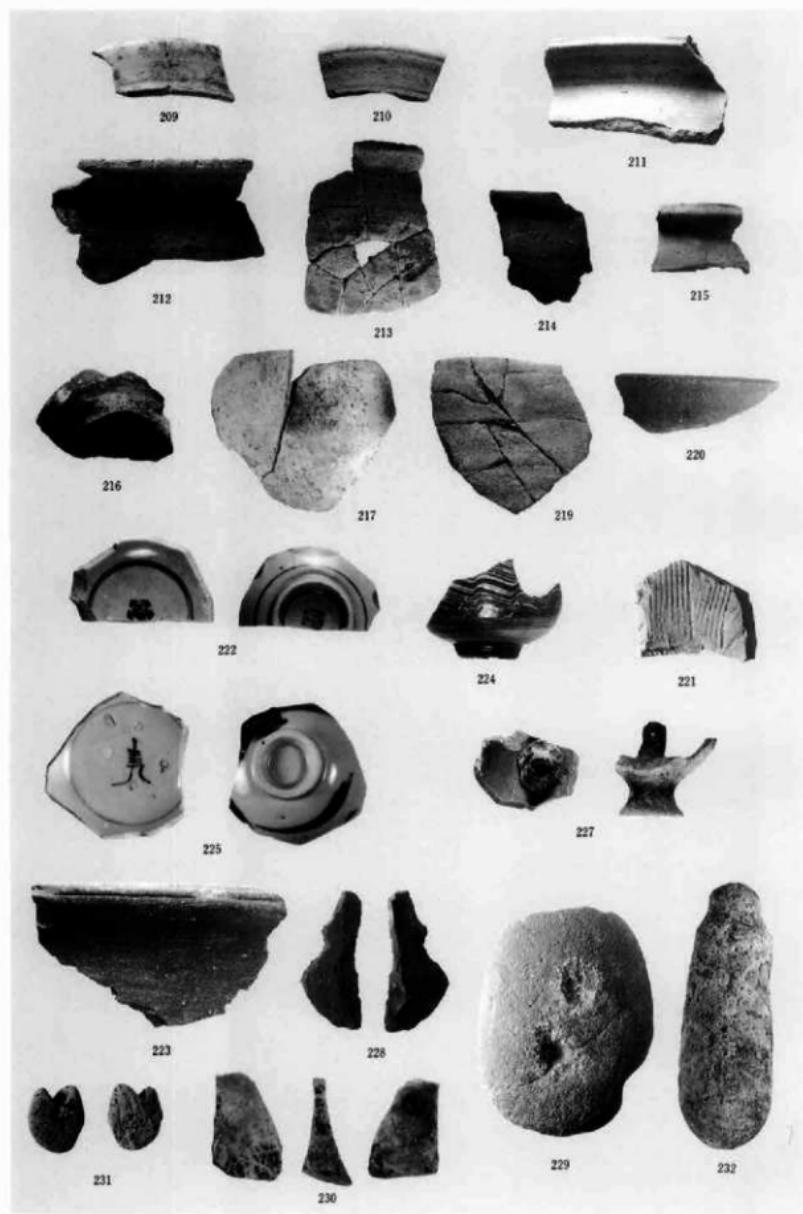
出土遺物(5) (136-159)



出土遺物(6) (157—186)



出土遺物(7) (187—208)



出土遺物(8)(209—232)



全 景



東 西 断 面

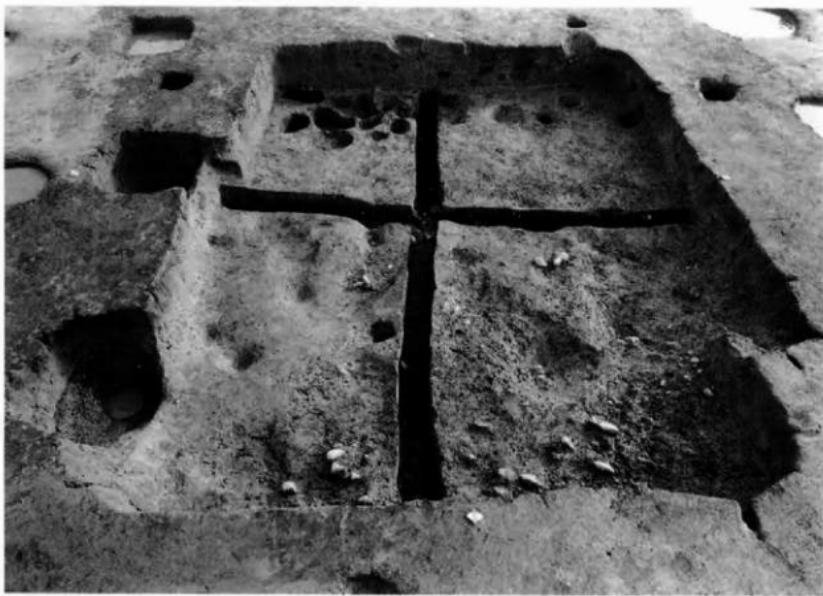


南 北 断 面





第1号堅穴住居址完掘状況（南より）



同上 たちわり状況（北より）



作業風景（第1号竪穴・第1号櫛立周辺）



第1号住居址かまど址検出状況



同 鉄器出土状況



第2号住居址



同上 東西断面（北より）



第2号堅穴住居南北断面（西より）



同上 完掘状況（東より）



大溝中央断面（北より）



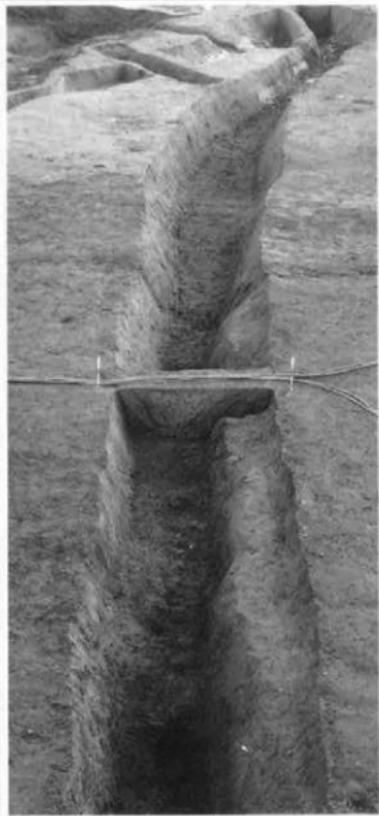
大溝完成状況（南より）



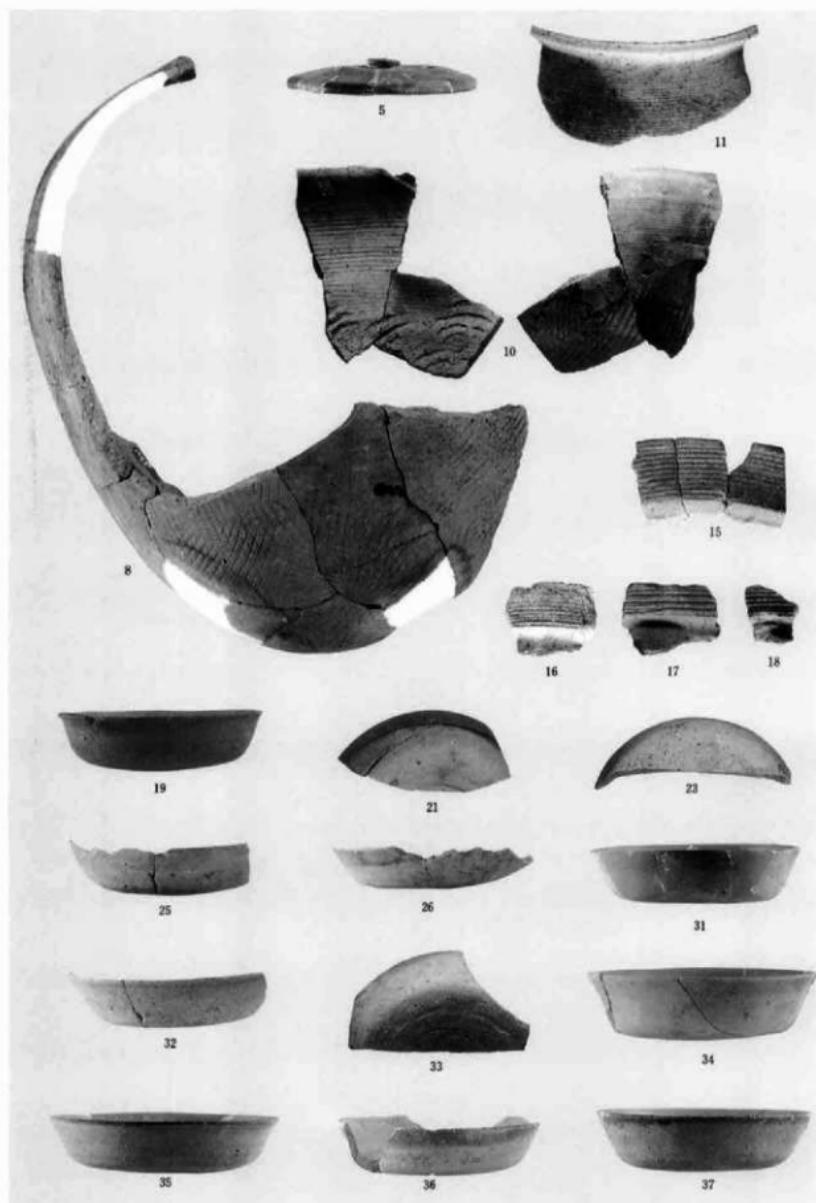
第2号据立柱建物地



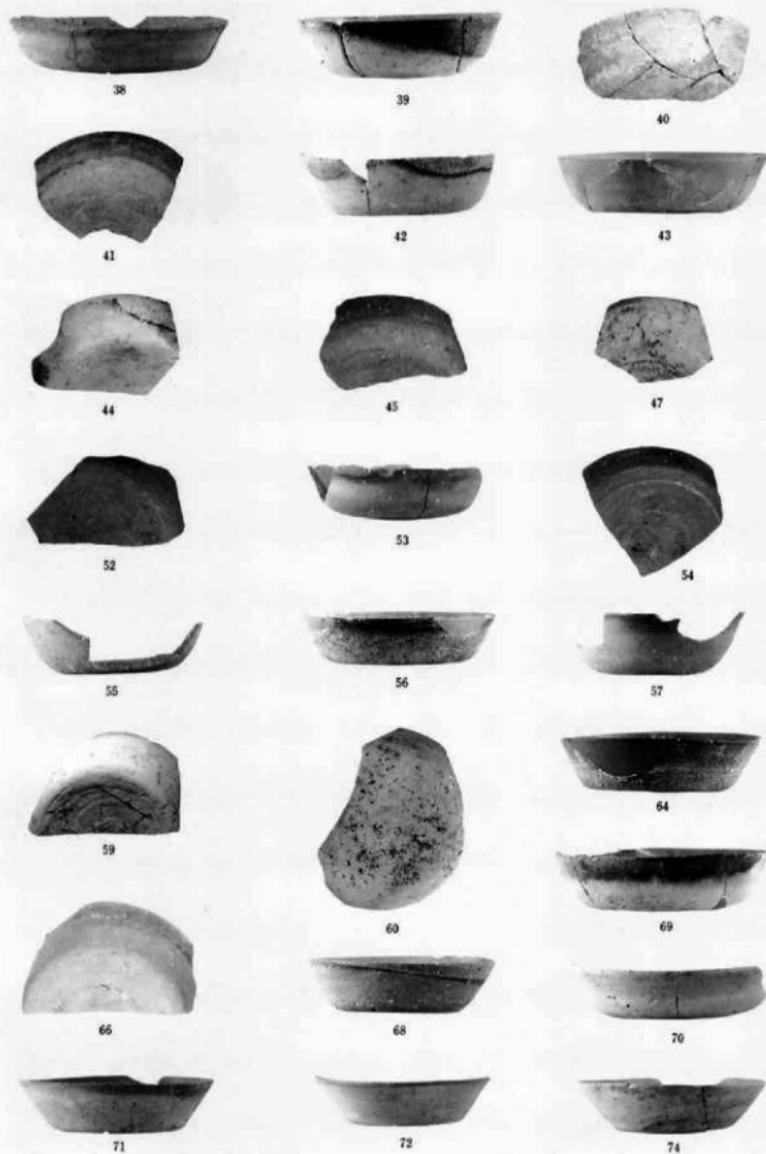
第1号土坑



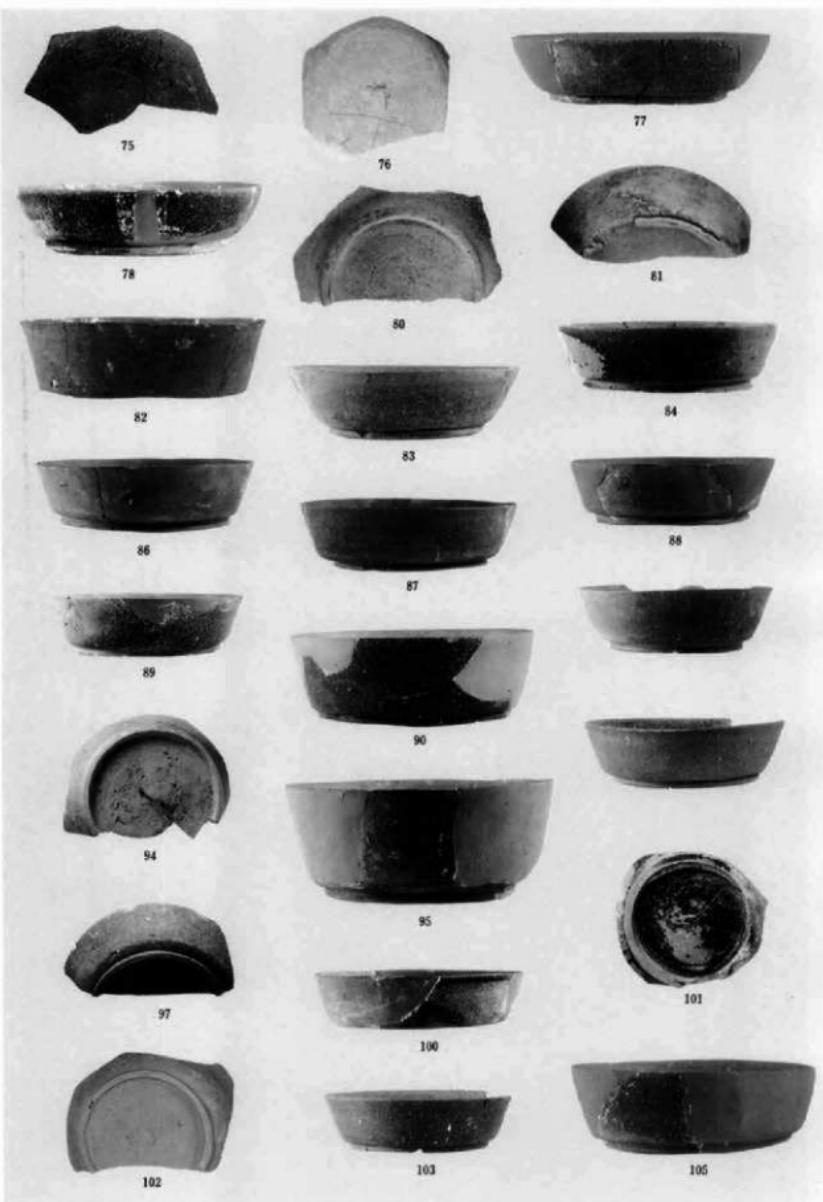
第3号溝



出土遺物(1) (5~37)



出土遺物(2) (36~74)



出土遺物(3) (75-105)



106



107



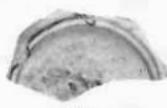
111



108



110



112



113



119



120



121



122



123



124



128



129



125



130



133



134

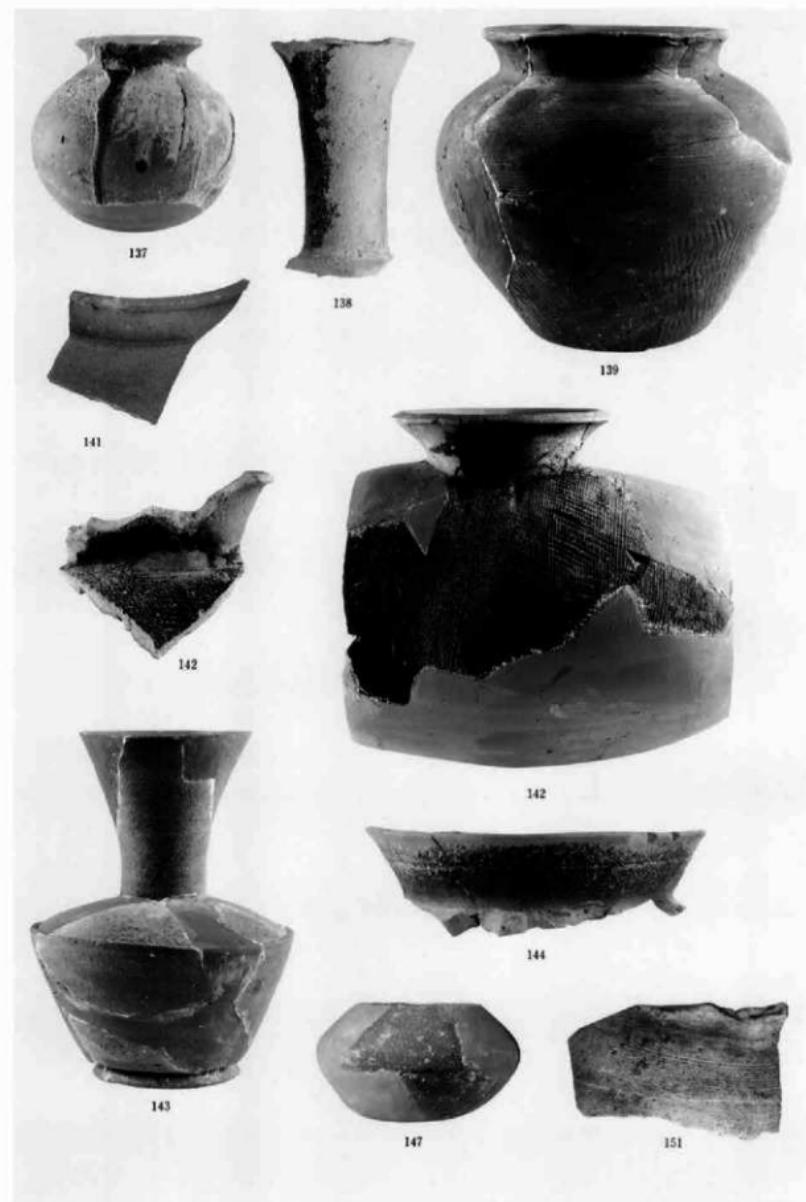


132



136

出土遺物(4) (106—136)



出土遺物(5)(137-151)



152



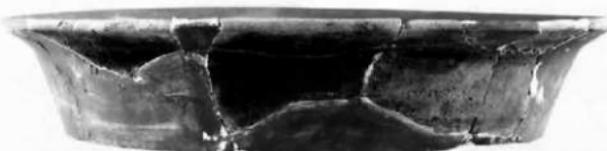
162



164



165



161



169



170



171



172



173



177



178



180

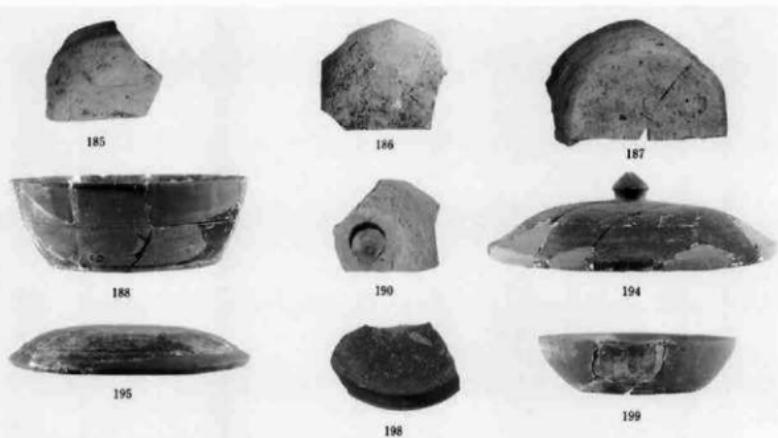


179



184

出土遺物(6) (152—184)



出土遺物(7)(185—202)

松任市法仏遺跡

第5・6次発掘調査報告

発行日 平成3年3月30日（1991）

編集者 石川県立埋蔵文化財センター
発行者 921 金沢市米泉4-133

印刷者 (株)橋本確文堂
920 金沢市大手町